

# あつぎの女たち

—25 周年記念誌—



さがみ女性史研究会「さねさし」

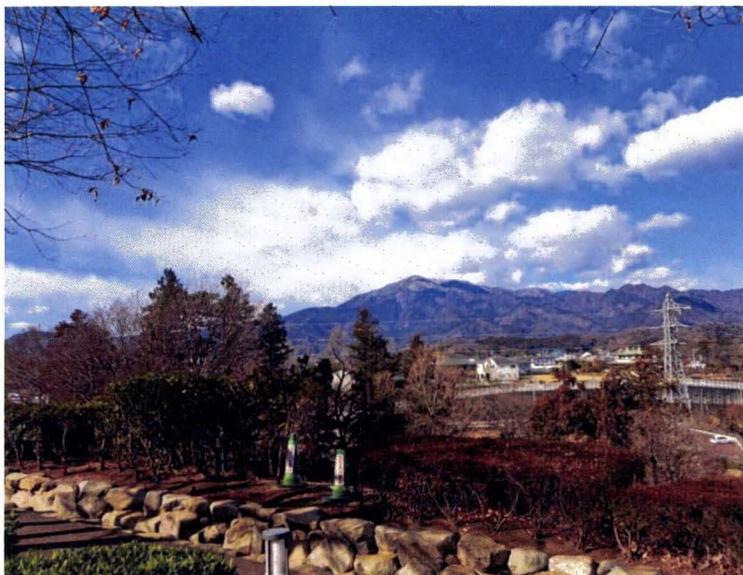






# あつぎの女たち

—25 周年記念誌—



さがみ女性史研究会「さねさし」



思い出 あれこれ



第7回全国女性史研究交流のつどい  
in かながわ 1998.09.05~06



長田かな子氏（女性史研究者）を囲む 1998.11.27  
前列右から2人目



講師 江刺昭子氏

あつぎパートナープラン推進セミナー

**地域を支えた女性たち**

講師：女性史専門家 江刺 昭子 さん

日時 **12月19日（土）**  
午後1時30分～3時30分

場所 厚木市総合福祉センター  
5階 視聴覚室

女性史とは何か。  
守、なぜ女性史なのか。  
現在につながる女性たちの足跡をたどります。

※ 参加を希望される方は、女性政策課  
電話 25-2454、又は、ファックス 25-3782 へ  
お申し込みください。  
※ 申し込み締め切りは、お申し込みの日です。

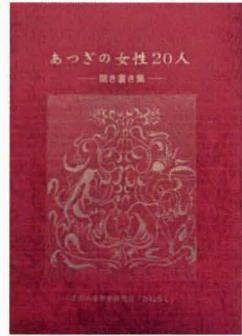
主催 厚木市 お問い合わせ 女性政策課 0462-25-2454

講演会「地域を支えた女性たち」  
1998.12.19





大下トシ氏（民権家山川市郎の孫）聞き取り  
2002.04.11 ー富士吉田ー



『あつぎの女性』  
2004.04.01 刊行



朝日新聞 2004年4月16日付（さがみ野版）  
神奈川新聞 2004年4月13日付（相模原・県央版）  
市民かわら版 2004年4月15日付



『あつぎの女性 20 人』出版記念の集い 2004.04.21



小島すみ氏「敗戦で女たちが得たもの」2005.05.30  
右から 2 人目



第 100 回定例会記念 2007.12.06～07—熱海伊豆山—



地域女性史  
交流シンポ

地域で女性史を掘り起こし記録として残してきた県内の地域女性史研究グループ4団体が10月下旬、藤沢市江の島の県立かながわ女

# 活動の深まり、定着実感

藤沢で県内4グループ

「時代認識の共有も必要」

本紙文化欄で「魅せたいかながわの女」を連載中の女性史研究グループ「史の家」を指導する女性史研究会の江崎昭子さんを司会に、かまくら男女共同参画市民ネットワーク（アンサンブル21）女性史編さん部会、小田原女性史研究会、さがみ女性史研究会（さねさし）、史の会のメンバーらが語り合った。



地域女性史交流 in かながわシンポジウム—県立かながわ女性センター  
神奈川新聞 2009年11月16日付（文化欄）

第11回 全国女性史研究交流のつどい in 東京  
The 11th Meeting of Women's History in Tokyo

2010年  
9月4日(土)・5日(日)

記念講演  
9月4日(土) 13:00~14:00  
一人からはじまる  
作家 澤地久枝

日程  
9月4日(土)  
11:30~ 受付開始  
12:30~16:30 開会式・記念講演・分科会Part 1  
18:30~20:30 懇親会  
9月5日(日)  
9:20~11:30 分科会Part 2  
11:30~12:00 昼食  
13:15~14:00 ミニコンサート  
「佐藤真子 女性史を学ぶたう」  
14:15~16:15 全体会  
16:15~16:45 閉会式

会場 国立オリンピック記念青少年総合センター  
〒113-8522 東京都文京区本郷1-1-1  
（交通）有明駅南口徒歩10分

主催 第11回全国女性史研究交流のつどい実行委員会  
ホームページ: <http://www.gendai-shi.com/kyouka.html>  
お問い合わせ先: [kyouka@gendai-shi.com](mailto:kyouka@gendai-shi.com) 03-3822-1111

協賛 財団法人日本女性史研究会

第11回全国女性史研究交流のつどい  
in 東京 2010.09.04~05

分科会 2  
地域女性史 (3)  
オーラル・ヒストリー

報告

分科会2 地域女性史 (3) オーラル  
ヒストリー報告者、中村碩子 (中央)

第14回 日本自費出版フェスティバル  
第14回 日本自費出版文化賞表彰式  
2011年10月22日

第14回自費出版文化賞受賞 2011.10.22



『続々・あつぎの女性』  
2015.09.01 刊行

第12回全国女性史研究交流のついで  
in 岩手 2015.10.09~11

## あつぎ女性の軌跡を一冊に

「さねさし」が3冊目の記録本寄贈



書い6人市協発訪た

「さねさし」の3冊目の記録本寄贈が、岩手県岩手市で10月9日（土）に開催された。この日は「さねさし」の代表として、岩手県岩手市長と平井教育長も訪れ、市教育委員会を通じて、中央図書館、各公民館、郷土資料館などに寄贈された。この記録本は、あつぎの女性20人の聞き書きをまとめたもので、あつぎの女性20人の聞き書きをまとめたもので、あつぎの女性20人の聞き書きをまとめたものである。

聞き書きを女性の視点から見た郷土の歴史に光を当てている。さき女性史研究会「さねさし」3冊目の発行となる「続々・あつぎの女性 聞き書きと資料」がこのほど完成し、9月18日には会員9人が厚木市役所を訪れ、完成を贈った。

民権 郷土資料館などの関係者も参加し、あつぎの女性20人の聞き書きをまとめたもので、あつぎの女性20人の聞き書きをまとめたものである。

あつぎの女性20人の聞き書きをまとめたもので、あつぎの女性20人の聞き書きをまとめたものである。

あつぎの女性20人の聞き書きをまとめたもので、あつぎの女性20人の聞き書きをまとめたものである。

あつぎの女性20人の聞き書きをまとめたもので、あつぎの女性20人の聞き書きをまとめたものである。

### 外部続

丹念な聞き書きと資料で綴る

あつぎの女性20人の聞き書きをまとめたもので、あつぎの女性20人の聞き書きをまとめたものである。



# 感謝状

さかみ女性史研究会さま様  
貴団体は本市教育行政に深い理解を寄せられ厚木市立小中学校等に圖書を寄附されたことは学校教育の振興に寄与するところ多大でありますので感謝の意を表します

令和三年三月一日  
厚木市教育委員会  
教育長 曾田 高治

厚木教育委員会より感謝状 2021.03.01



コロナ禍で、やっと対面での定例会 2021.03



**EduNavi  
FACE**

## 女性の生きた足跡を後世へ

さかみ女性史研究会 | さねさし | 代表 **神谷智子** さん(72)

「さかみ女性史研究会さま様へ」  
 さかみ女性史研究会さま様へ、  
 2021年3月1日、厚木市教育委員会より、  
 感謝状をいただきました。この度は、  
 本市の小中学校等に、図書をお寄せ  
 いただき、誠にありがとうございます。  
 貴団体の活動が、本市の歴史を  
 伝えることに大きく貢献している  
 ことと、心から感謝いたします。  
 貴団体の活動が、本市の歴史を  
 伝えることに大きく貢献している  
 ことと、心から感謝いたします。



第 300 回定例会記念 2024.05.22

教育委員会より EduNavi 2021.05.01



## 刊行に寄せて

江刺 昭子

今年は一九七五年の国際女性年から五〇年になります。政府の国内行動計画に続いて「かながわ女性プラン」が策定されたのが八二年。県立婦人総合センター（現、かながわ男女共同参画センター）が開館し、事業の目玉に女性史編纂があげられました。八七年に『夜明けの航跡 かながわ近代の女たち』、五年後には『共生への航路 かながわの女たち<sup>45</sup>〜90』が、県と県民女性の共同作業で完成。中央と男性の視点ではなく、地域と女性の視点から歴史検証をする画期的な試みでした。以後、県内で「女性史ブーム」が起こって、いくつもの女性史グループが生まれました。「さねさし」もその一つで、中村碩子さんの『さねさし』誕生まで』によると、厚木市の女性行政が進展するなかで女性史研究の熱が醸成されたということで、行政の取り組みの大切さがわかります。

研究機関に属していない在野の自主グループである女性史研究会の存続は会員の熱い思いがあつてこそ。一定の成果をあげるのはなかなか困難ですが、「さねさし」は本誌を含めて研究誌

五冊を出版されました。手に入りにくい、女に関する文献資料を集め、地域の高齢者のご協力を得て聞き書きを重ねてこられました。戦争をはさんだ激動の近現代、厚木の女たちがどんな環境で学び、働き、結婚し、子を育て、老いを迎えたのか。広い分野から埋もれていた声を掘り起こし、心のひだまで分け入って、その姿を明らかにしました。正史や教科書ではほとんど無視され、忘れられている女性たちの歩みを歴史の領域に定着させました。そうして女たちの軌跡を分析し、叙述することで、会員自らが歴史を創る主体になっていく過程に同伴させていただいた歓びをかみしめています。

歴史に問いかけることは、女性問題の今を知り、未来を拓く手がかりになります。このすばらしい成果を厚木市の財産として生かしてくださいことを願ってやみません。

## はじめに

一九九九年四月の発会から二五年、「さねさし」の活動の軌跡をまとめ『二五周年記念誌』を刊行しました。

子育ても終わり、さて後半の人生、何を生きがいに生きていくかという時代でした。志を同じくした仲間で、さがみ女性史研究会「さねさし」を立ち上げました。発会から五年後の二〇〇四年、『あつぎの女性20人』を刊行しましたが、指導者の江刺昭子先生が「刊行に寄せて」の文末に「聞き書き集にとどまらず、通史、年表などを加えた厚木女性史が書かれることを願う」と述べられています。いみじくも今回、記念誌出版にあたって、先生に通史を書いていただけたことはこの上ない喜びです。県央の地で、日々、子育てや農家の働き手として地味に暮らしてきた私たちの姿を掘り起こしていただきました。

「想い出 あれこれ」は発会前からの懐かしい写真に加え、「さねさし」会報や新聞記事など活動した記録をまとめたものです。

聞き書きは「戦争」をテーマに以前お聞きし、活字にしていなかった小島すみ・内山良子お二

人の戦争体験。新たに石射はつ・鳥山洋子お二人からは若い頃の思い出、母上から聞かれた学童疎開のことなど、貴重なお話を伺うことができました。

資料としては民権家大矢正夫の二女寛子から大畑哲への書簡を掲載。ご自身の生い立ちや父親への思いなど、率直な文面に触れることができました。年表も今までの年表とは一味違う、女性を取り巻く社会の動きや全国と神奈川県的女性史研究の動向を入れました。

「さねさし」は現在四人（中村碩子、亀井喜美子、神谷智子、深沢かをる）で活動しております。よちよち歩きのわたしたちを指導してくださった先生への感謝でいっぱいです。本の完成までの過程には会員同士で協力し合いながら、文章をまとめるむずかしさ、根気のいる編集とその面白さ、できあがったときの飛び上がるほどの喜び、かけがえのない財産になりました。

「光陰矢の如し」とはよくいったもので、あつという間の二五年です。「さねさし」というバックボーンがあったお陰でわたしたちの後半の人生は、充実したものになりました。ご協力いただいたみなさまに深く感謝いたします。

二〇二五年四月

さがみ女性史研究会「さねさし」

## 凡 例

- 一、本書は「さねさし」が二五年間活動した記録をまとめたものである。
- 一、本書の記述は現代仮名づかい、常用漢字を用いた。
- 一、年代は西暦を使用し、必要に応じて（ ）内に和暦の元号を併記した。
- 一、難読の語句には、ふりがなを付け読みやすくした。
- 一、敬称、敬語は省略したところもある。
- 一、聞き書きには脚注を付け、話者の話を補うために聞き手が加筆した。文末には聞き手が感想など余話を付記した。
- 一、戦時中の用語などは、できるだけ話者の語り口のままとした。
- 一、年表は「さねさし」の活動を主体とし、厚木市、神奈川県、国の女性史研究の動きを中心に記述した。
- 一、参考文献の表記は書籍・雑誌名『』、論文・新聞・講演会タイトルなどは「」を用いた。



国破れて山河在り

話者

石射 はつ

78

養徳寺と疎開児童

話者

鳥山 洋子

89

「さねさし」誕生まで

話者

中村 碩子

101

資料 I

民権家、大矢正夫の二女寛子から大畑哲宛書簡

113

資料 II あつぎの女たち「さねさし」・国と県の女性史年表

国際婦人年々「さねさし」誕生前

121

「さねさし」発会〜現在

130

おもな参考文献

146

編集後記

147

あつぎの女性

通史

(明治〜昭和戦前期)

# あつぎの女性 通史

えさし あきこ  
江刺 昭子

## I章 女の暮らしと仕事

### 明治・大正時代の農家

明治から昭和戦前期の厚木地域の女たちは、どんな暮らしをしていたのだろうか。生業、学び、働き、社会参加などについて見てみる。ただ、近現代の厚木市史が未完の現在（二〇二四年）、手に入る女性に関する資料はきわめて乏しく、ほとんど『神奈川新聞』の前身である『横浜貿易新報』（『横濱』と略）の記事に拠らざるを得なかった。また、「さねさし」が積み重ねてきた聞き書きも貴重な歴史の証言であることを、改めて認識した。

厚木市の現在（二〇二四年）の人口は二万四〇〇〇人だが、明治時代初期の人口は愛川町や愛甲郡清川村を含めた旧愛甲郡で二万八七八一人（女一万四〇八八八・男一万四六九三人）。厚木市域だけだと現在の約一〇分の一ということになる。

明治・大正時代の市域の大半の生業は農業である。丹沢山系から流れ出る豊富な水が相模平野を潤し陸稲おかぼや麦や雑穀作りに適し、平地の少ない山間部では林業が主。副業の養蚕が盛んで、農業生産力の低い山間部で専用の桑畑が無くても、屋敷まわりや田畑の畔などで栽培、少ない収量で収益が多いのが理由である。

農家のなりわいは一家総出で、かなり裕福な家でも、女も子どもも大切な働き手だった。棚沢村で八人きよだいの総領に生まれた熊坂千代（一九二七年生まれ）の実家は一五代続いた農家で、父親は村会議員。子どもがやることはいっぱいあって、雑巾がけ、筵むしろを七〇枚も八〇枚も干して「学校に行く前は戦争のよう」。帰つてくと弟妹をおぶつて風呂の水汲み、田植えも一六歳から教わつてやったと語っている『あつぎの女性20人』。

現在のように、結婚前に男女が交際して、式場で結婚式を挙げるのではなく、自宅が式場だった。上荻野の農

家に生まれた曾根サク（一八九三年生まれ）は、二六歳のとき三田の農家に嫁いだ。親が決めた人で、場所もよくわからないまま、その日を迎えた。仲人が手傘をさして夜道を萩野から三田まで歩いて、魔除けの意味か、男の子と女の子が一人ずつ松明を灯して相手の家の裏口から入った。長持ちなどの荷物は大勢が荷車で運んだ。仲人の口上などがあつて、「楽座」という披露宴のようなものがあり、大勢で飲み食いをした（萩野・鳶尾の古老に聞く会『九十九髪炉辺の回顧』）。

食生活は戸田の二見タケ（一九一三年生まれ）家の例をみる（『厚木の民俗9』）。二見家は畑一町、田は三反ほどで主に米、麦を育てて生計を立て、野菜は食べる程度、養蚕をやっていた。家族は祖父母、父母、本人夫婦に子ども五人の一人家族。主食は一升の米に麦三合か糯粟を混ぜた。もの日や夜宮にはそば、代用食はうどん粉に黒砂糖を入れた玄米パンか蒸したさつま芋。副食はみそ汁に季節の野菜を入れた。鶏を飼っていたので売ってイワシやサバを買った。山羊の乳を飲んだ。間食は落花生やラッキョウの漬物など。

厚木出身の作家和田伝の「門と倉第一部から第三部・ゾク」にも農家の様子が詳しい。醤油や味噌作りは主婦が宰領。諸味噌は大きなもので丸一年、一日の怠りもなく丹精こめて突いて作る。それを絞って醤油にし、絞りに塩を加えて二番絞り、三番絞りまで絞る。三番となると塩辛いだけなので、貧しい農家にやる。

時計もない明治時代の農家では、「客に飯を出すのは、食事の時刻だからというのではない。また、客が腹が減つていようと察してでもない。時刻にも、腹具合にもかかわりなく、飯を、それもありあわせのではなく新しく炊いて出すのは、客への信愛の表現で、客も腹具合とはかかわりなく箸をとるのが作法だ」つたという。

## 養蚕は一家総出で

一八五九年に横浜が開港すると、生糸は遠くヨーロッパやアメリカにまで輸出されるようになり、さらに明治二〇年代から昭和初期にかけて各地で器械製糸工場が設立され、養蚕で生計を立てる農家が急増。愛甲郡の一九

二三年度の養蚕農家戸数は荻野村五一八、南毛利村四六六、依知村四〇〇、小鮎村三六五、中津村二一五などで計三四四八戸になる。

繭の生産が盛んになった大正中期から昭和初期にかけて、愛甲郡の繭の集散地である厚木の町は、糸繭商、運送業者、料理屋などで繁栄。信州の若尾幾造が巨大な繭の保管処理施設を作ったのがきっかけと言われる。「その時期になると厚木の町に近郷から運ばれる繭の車（牛馬車、荷車、自動車）で賑わいを呈し、町内の各所に生繭の取引の買場の市が開かれた。山梨県、長野県、群馬県などの製糸業者が出張し、中には繭の買入の建物まで建てる盛況であった」（『厚木産業史話』）。

一九一〇年度の県の製糸場の器械部は厚木市域にはゼロだが、共同揚返場は依知村、荻野村、厚木町、小鮎村、玉川村にそれぞれ二カ所、他の村にも一カ所はある。この頃になると厚木商工会や各地で屑繭整理講習会や真綿講習会が頻繁に開かれている。各家庭の女の副業にするためである。

家中の衣生活ももとより主婦の仕事。玉繭や屑繭を売らずに残しておく、真綿かけをした。その真綿で布団、子どものはんてん、赤ん坊のねんねこぼんてん、年寄りのどてらなどを作った。お宮詣りのお配りのお返しや赤飯をもらうと、そのおうつりには真綿をあげたものだという（石井ミネ『続々・村のくらし』）。

とはいえ桑を植え、蚕を育て、繭を収穫するまでは、寝る暇もないほどの忙しさ。前出の熊坂千代がその作業を語っている。（『あつぎの女性20人』）。

「お蚕さんは籠かごに蚕座紙を敷いて、その上に幼虫をのせて育てるんですよ。一二段の棚があつて手前に籠を引き出して桑をくれるんです。これはあたしの仕事でした」。青虫が赤くなつて透き通つてくると、それをお盆のなかに入れ網につけて二、三階の厨子へと送る。籠かごに菰こもを敷きそこへひきたお蚕さんをのせるとお蚕さんが好きなところへ行つて自分で繭を作る。春蚕は四〇日で繭になる。繭かきをして良い繭だけをゆたんという繭の袋に入れて、牛車に積んで父親と厚木や中津の蚕の出荷所へ運んだという。

## 農家の賃仕事・女中奉公・糸取り女工

専業主婦が増えるのはサラリーマン層が増えた戦後の高度経済成長期で、戦前は夫が外で働き、妻が家事、育児に専念する性別役割分担の家庭は少数派。女も男もよく働いた。農家の賃仕事、奉公、糸取り女工などで、学校を出たあと、結婚するまで何もしないのはよほど裕福な家庭に限られた。八王子の片倉製糸、高座郡長後の製糸場や半原の抛り屋などに大勢働きに行った。信州岡谷からも募集人が来た。

玉川村七沢の石材店の二人きょうだいの一番目に生まれた川口せん（一九一五年生まれ）は、小学校を六年で卒業後、姉たちと同じように足柄上郡の紡績工場へ糸取りに行ったり、東京へ女中奉公にも行った。一年中奉公に行くのは「よつほど困っている家の人」で、川口は奉公といっても行儀見習いのような形で、お正月から三月頃までは家に帰って縫い物を習いに行ったという（『あつぎの女性20人』）。

同年に依知村の教員一家に生まれた鈴木花枝は、教師を経て、戦後市会議員になった人で、小学校を終えて進学しない女子は、「普通に暮らして食べられるところは家事手伝い、生活が楽でないところは女中奉公。女中奉公先は村内が多かった。鈴木家にも男衆おとこと女衆おんなが泊まり込みで二人ずついて、男部屋、女部屋があった。お仕着せで小遣いは自分で使っていたが、お給金は実家の収入として家に入れていた（『依知と女と七十七年』）。

○三年、相川村の梅原勇次郎の次女まつ（一四歳）が、南秦野村の清水製糸所に就業するに際して交わした契約書がある（『厚木市史 近代資料編（一）』）。賃金や契約期限のほか、就業違反があった場合の取り決めも書いてある。賃金が三年間で一〇円という契約は小遣いにもならないほどだが、契約者が本人ではなく父親であることに注目したい。現代であれば雇われて働く場合の契約は本人が行うが、民法で家制度に縛られていた当時、働きに行ったり、結婚する場合は、家長（戸主）の許可が必要だったことを証している。

## 厚木町の発展

飯田孝「今昔あつぎの花街」(No. 7、8、9、21)によると、厚木は江戸時代から相模川舟運の基地で、海運を通じて全国の物産が集まり、内陸部からは材木、薪炭、年貢米などが江戸へ運ばれた。さらに相模川にかかる厚木渡船場には矢倉沢往還(青山街道)が通っていて、大山詣りの季節になると関東一円から大山に向かう旅人で賑わったという。しかし、一八八九年に東海道本線が開通すると、停車場のない厚木はさびれ始めた。それを打開したのが鮎漁。横浜や東京方面からの客を平塚から人力車や馬車で厚木へ運び、相模川に浮かべた屋形船に芸者を伴って鮎漁を楽しませ、帰りは平塚まで船で下るといふプランで、訪れる人びとを相手に厚木芸妓営業合資会社(一八九九年)、相模馬車株式会社(一九〇一年)が創業している。

この頃には輸出の花形となった生糸や繭の取引市場が開設され、厚木の町には大金が舞い、繭糸商人たちが料理屋を利用するようになって花柳界が発展。付近の田んぼが埋め立てられ、旅館や料理屋、芸者置屋、寄席などができ、それに伴って湯屋、酒屋、米屋、八百屋、鮮魚乾物屋、豆腐屋などの食品業者、呉服屋、小間物屋、髪結などさまざまな関連業者が集まって活気を呈した。

芸妓は明治時代までは一〇人くらいだったが、一九一七年には二一人、二六年には四三人と増加。料理屋から見番に依頼が来ると、箱屋(芸者の三味線などを運ぶ男衆)が置屋に伝え、指名された芸者が料理屋や旅館に向く。花代(揚げ代)は線香を立ててとる時間で計算した。

芸者街のまん中にある「竹の湯」の跡継ぎと結婚した前出の川口せんは、隣の見番の様子を語っている。當時は「人を売ったり買ったりする」桂庵という商売があつて、その紹介で芸者が来た。「寒い地方の人が多かったと聞いています。子だくさんで貧しい家の子とか、親のない子なんか、年季奉公で来ていたようです。小学校終わるか終わらないくらいの子もいて泣いている姿も見かけたことがあります」。芸者たちのために昼の一二時半から深夜まで開けており、川口は半世紀にわたって番台に座り続けたという。

## 「私生児」と「もぐり産婆」

前近代から明治期まで、農村には広く夜這いの習慣があり、男が思いを寄せる女の家に忍んで行くなど、未婚の男女が通ずる習慣があった。厚木地区でのそのような習慣の記録は見当たらないが、愛甲郡の統計係が調査した一九二一年度の出産数は、男女計一六八八人で、内嫡出子が一六〇一人、庶子二六人、私生児六一人。これは「他郡に比較して私生児出生率が高く」、「愛甲郡の風紀は頗る憂慮さるべき前途を持つている」（『横賀』二二年六月二九日）とあるのは、夜這いの習慣や、籍を移さない男女の同居が多かったのだろう。

子殺しや虐待（DV）の新聞記事も少なくない。一四年五月、荻野村の夫婦が「白痴」の妹が産み落とした嬰兒を圧殺して懲役刑を受けた。妹は多くの男と通じており「嬰兒が死んでも驚かない」と述べている。三三年六月、依知村の二〇代の女が便所に嬰兒を産み落としたとして過失致死罪で起訴された。奉公した家の主人との子で、本人は妊娠に気付かず生理解識も腹痛もなく便通だと思つたという。三七年二月七日、依知村の二七歳の女は、下川入の男と関係し子をはらんでいるのを隠して厚木町の男と結婚し、便所に不義の子を産み落とし、不作為の殺人と認定され送局された。いずれも『横賀』の記事である。

結婚によらない出産だけでなく、避妊法が知られていないから、子だくさんで生活が苦しいため墮胎を望む人も多く、もぐり産婆が横行した。しかし刑法で墮胎は禁止されており、墮胎罪で摘発される産婦や産婆の記事が新聞に散見される。「潜り産婆退治」の見出しで、「潜り産婆の跋扈するの傾きある」ことから、厚木署が視察の結果、十数人を召喚して取り調べた結果、荻野村の二人、妻田村の一人を無免許産婆として小田原区裁判所に告発し、他は「署長より嚴重訓戒されたり」（『横賀』一九一六年九月一五日）。

望まぬ出産でなくても、出産の多くは職業的な専門家ではなく、身近にいる女たちが担っていた。七沢在住で八人の子を産んだ前場コウ（一九〇三年生まれ）によると、戦後まもない頃まで、農山村では産婆ではなく取り上げ婆さんが子を取り上げたという。母親、しゅうとめ、仲人の妻、親類の女などが出産の準備をした。

産婆が公的な免許制になるのは明治の中頃からで、『神奈川県統計書』によると、愛甲郡は一八八五年に本免状が一人、仮免状が四人、八八年に本免状が二人、仮免許が六人。八九年からは、内務省免許と自治体免許になり、九四年には内務省が二人、神奈川県が四人。以後減る傾向が続き、一九〇二年には計四人しかいない。一二年からはまた制度が変わり、内務省、地方庁、試験合格、指定学校と四種の免許があるので総数のみ記すと、一九年にやっと二桁の一四人になっている。

正式な産婆によらない出産は、非衛生的な環境が多く、出産で命を落とす産婦や死産が跡を絶たない。こんな因習をあらためようと、東京医科大学第一医院で学んで、一八九八年に厚木町で産婆を開業した杉山フクはこんな広告を出している。「今や時運駿々トシテ日二月ニ進歩シ世ハ文明ノ域ニ達セントシ」「旧来行ハレツツアル取揚婆ノ因習ヲ打破シ」「文明的学理ヲ応用セル産婆ヲ普及セシムルニ如クナシ」。

一九二六年には愛甲郡産婆会が発足して、杉山フクが会長になった。会員は九人。三二年五月には、定期総会が開かれ、出席者は十数人、医師会からの来賓もきて事業報告や会計報告をした(『横濱』五月三〇日)。しかし、その後もあまり増えず、免許産婆が三六年に二〇人になるのは、「産めよ殖やせよ」政策の反映であろう。四〇年には二三人になっている。

昼夜関係なく呼びだされる産婆の仕事はきつい。母子二代で産婆だった川上はるみ(一九一五年生まれ)は、養蚕農家が多い下川入村でたった一人の産婆として二〇年、病院勤めも四〇年近く、八〇歳まで働いて一万人近くを取り上げたという(『続々・あつぎの女性』)。

産婦の家の者が呼びに来ると夜中でも自転車を飛ばす。妊娠中に診察を受けず、お産のときだけ産婆を頼む人も多かった。産家に着くと掃除をして、外の風が吹き込まないよう障子を貼り、井戸水を釣瓶で汲んで、薪で湯を沸かして、洗濯用のたらいをきれいに洗うなど、家の者がやる仕事もしてお産の準備をした。下に敷く油紙がないときは、蚕座紙を敷いた。後産を新聞紙か油紙に包んで渡すと、家の大黒柱の根元に埋める家もあった。

## 事務員や女給など新しい職業

戦前、雇われて働く女は「職業婦人」と呼ばれ、横浜などの都会では一九一〇年代から会社の事務員やタイピストなどが相当数いる。遅れて厚木でも職業婦人が現れる。繭の取引が盛んになった大正期に入ると、厚木町の神奈川県養蚕取締所で養蚕検査吏員を養成する講習会が開講されている。第一回は一九一三年七月で、蚕体病理学、理化学、数学、養蚕法などを学んで女子が資格を取得、四〇人が検査吏員に採用された。第二回六〇人、第三回三〇人募集と、その後も継続しているので、免許を取得して検査所で給料をもらって働いた人がかなりいたことになる。

中荻野の女性（一九一六年生まれ）は、父親から現金収入がないと困ると言われ、取締所の試験を受けて一〇人中一二人に選ばれ、顕微鏡で蚕種の微粒子病など病毒の検査をした。近在だけでなく、遠く静岡、山梨まで袴を着けて蚕の雌雄鑑別に歩いた。一九三二、三年頃で、月給は三〇円。米一俵が五円で買え、県職員のみ月給が四〇〜四五円くらいのときで、破格の報酬だったという（荻野・馬場地区民俗調査報告書『谷戸田のムラ』）。

厚木町には大正時代中頃から中央総武自動車会社のほかに相模自動車株式会社、片瀬自動車商会などが開業して女の仕事が多かった。厚木町の鈴木トヨ（一九一一年生まれ）は自立心が強く、高等小学校を卒業後、中央相武自動車株式会社の事務員になった。厚木では職業婦人のはしりだった。ただ、洋裁をするのが夢だったので、二年で辞めて東京の洋裁学校に行き、三六年に卒業してすぐ厚木元町で洋裁店を開業、翌年には厚木洋裁学院を開校している（『あつぎの女性 20人』）。

関東大震災から復興した昭和初期には厚木町に次つぎとカフェが開業し、女給が評判になった。三五年には大手町・弁天町にカツフエアツギ、カフェー満洲、カフェー高橋、元町にカフェー花蝶があり、カツフエアツギでは、ララ子、リリ子、ルル子、レレ子、ロロ子の五人の女給が接待にあたっており、夕方になると、拡声器から音楽を流して客を呼び込んだという（飯田孝「今昔あつぎの花街」）。

## II章 学ぶ人、教える人

### 学校へ通うということ

江戸時代までの教育は、藩が子弟のために設立した藩校と、庶民が通った寺子屋があり、厚木市にも主に読み書きそろばんを教える寺子屋が各村にあり、女子も通っていたことが『日本教育史資料』に報告されている。

男女を問わず小学校教育を受けるようにという学制が發布されて近代教育が始まるのは一八七二年から。その前に設立されていた荻野の興讓館、妻田の静学館、山際の淳風館、厚木の成思館、小野の博文社などの私塾の看板が書き替えられて尋常小学校になった。

開校まもない一八七四年の女子児童数は興讓館が九四人中二九人、静学館が四〇人中九人、淳風館が六二人中一人、成思館が一七三人中七〇人で、女子は圧倒的に少ない。『厚木市小学校教育史資料』。就学年齢くらいになると、女子は子守や家事手伝いに使われ、幕府時代以来の女子に学問は不要という考えが強かった。

その後はしだいに就学率が高くなり、一九〇〇年には尋常科四年が義務制になり、〇七年には六年制になり、就学率もあがって全国では女子九六%、男子九八%。〇五年の県下の就学率は男九三・四%、女八七・八九%。愛甲郡は『神奈川県統計書』（一九〇〇年）によると、就学年齢に達している児童六〇六八人（男三二八七人・女二八八一人）のうち就学しているのは男二九四八人、女二〇七五人で、就学率は男九二・八%、女七二・〇%になり、女子の就学率が低いことがわかる。しかも、これは就学率で中途退学して働きに行く者が多いが、その実態は不明だ。

玉川村生まれの川口せんは、「当時は、小学校も六年行けばけっこうなほうで、四年とか五年でさがる人が多く、一学級で高等科へ行った女子が二、三人、女学校へ二人」と語っている。『神奈川県社会教育概要』（三年）によると、当時の愛甲郡女子青年団員一三六〇人の学歴は、尋常小学校卒四七九人、高等小学校卒六七三人、実

科女学校や高等女学校など中等教育かそれ以上の教育を受けた人は一七五人となっている。

### 中等教育は実業補習学校から

小学校の就学率があがってきた明治中期には、中等教育を希望する人が増える。一八九九年には高等女学校令で一県に一枚、公立女学校を設立することになり、それまでは主にキリスト教系の女学校が女子中等教育を担っていた神奈川県でも横浜に県立高等女学校が開校している。

厚木では、一九〇二年に下荻野の法界寺に女子教育の場が設けられ、技芸講習所と呼ばれた。これが、現在の厚木東高校（現、厚木王子高校）のルーツだと言われている。それからまもない〇六年四月、及川村に愛甲郡立実業補習学校が開校した。文部省の規程によると、実業補習学校は義務教育で学んだ教科の補習と、実業の知識を授けるのが目的。それぞれの地域の状況に応じて休日や夜間に開校してもよいという自由な学校で、学ぶ生徒も多種多様だった。この実業補習学校の女子部が、郡立実業女学校として認可されたのが一年。修業年限は三年で、定員は本科七〇人、専科二〇人、研究科一〇人。

実業補習学校第一回卒業生の中には民権家難波惣平の次女ミツがおり、研究科まで進んだ。また父親が小鮎村で製糸工場を経営していた松川サク（一八九二年生まれ）は三回生で、卒業後、東京で行儀見習いのち結婚、夫とともに始めた事業を拡大し相模ゴム工業を設立した実業家である。自宅から一時間以上かけ歩いて通い「人一倍負けん気が強かったせいか、むずかしい比翼ひよく仕立てや褶かたぬなども夜遅くまで縫いました」と語っていることから、授業はおもに裁縫だったことがわかる（神奈川県立厚木東高等学校創立百周年記念誌『夢はるか』）。

補習学校は一三年に厚木町に移転し、翌年、愛甲郡立実科高等女学校と改称。一三年に郡制が廃止されると県に移管され、神奈川県立厚木実科高等女学校に改称している。大正期の厚木の町は田んぼが多く、その中に学校がポツンと建っていた。まもなく関東大地震が発生し、新校舎も寄宿舎も全焼、寄宿生二人が亡くなった。寄宿

舎が焼けてしまったため、その後は片道二時間かけて通う人もあった。実科女学校なので、カリキュラムは裁縫が主だが、遠足もあり、テニス、バレーボール、体操、丹沢登山などのスポーツも盛んだった。修学旅行は日光や関西旅行だった。制服は白線の入った海老茶の袴で、ほおほ朴齒の下駄をはき、風呂敷を抱えるのが通学姿だった。生徒は愛甲郡内だけでなく、約三分の一は隣接する高座郡などから来ている。二三年度の在校生は本科一七八人、選科二八人、計二〇六人である。

二六年、県立厚木高等女学校に改称。バラック建ての仮校舎から新校舎になっており、通学風景も変化。制服はセーラー服にグレイのネクタイをあしらったデザインになり、大山を背に畦道をスイスイと自転車で走る姿は相模野の風物詩になった。三〇年代になるとさらにスポーツが盛んになる。『横買』に厚木高女主催で県下諸学校連合女子排球大会、茅ヶ崎海岸で水泳の講習会、暑中休暇には三、四年生が富士登山、秋季体育大運動会、大山登山などの記事が連続して出てくるから、国がこの頃から女子の健康、体力作りに国策として取り組み始めた結果とみられる。

三四年、第一二回卒業式挙行、卒業生九七人の希望先は多彩だ。神奈川県師範学校二部七人・和洋女子学院三人・大妻技芸学校三人・千代田女子専門学校三人・日本女子高等商業学校一人・金華学園一人・日本タイプライター四人・家政学院二人・実践女子専門学校五人・栄養学校二人・平塚実践女学校四人・就職希望者一〇人・家庭五三人とある。高等教育を受ける人が増え、東京方面が多いのは小田急線の便からであろう。

## 女教員の苦勞

雇われて働く女の代表は教師である。教員不足が言われるようになったのは、一九〇七年に義務教育が四年制から六年制になった明治末年頃からで、教員の低賃金ゆえに男の志望者不足、日露戦争による男子の出征などがあり、男教員より安い給料ですむ女教員の採用が進んだ。厚木でもその傾向が見られる。しかし『横買』に南毛利

村高等尋常小学校訓導豊島フサが中郡成瀬村小学校に転任（〇九年一月二〇日）、小鮎村の中村キマが無試験で裁縫科正教員の免許状を受けた（二五年七月二日）という記事になるくらい、実数は少ない。

『神奈川県統計書』で愛甲郡の教員数がわかるのは一八九五年からで、教員数六八人のうち女は一〇人。本科正教員一人、准教員九人。一九〇八年にやつと二人になり、本科正教員五人、専科正教員一〇人、准教員三人、代用教員一人。昭和になると二七年に三五人（本科正教員一人・専科正教員二三・准教員八・代用教員五）、戦時下になると男が出征したあおりで急激に増えて四〇年には八五人になっている（本科正教員四八・専科正教員一二・代用教員二五）。

働き続けるには苦勞が多かった。厚木高女第一回卒業生の中野タエ（一九一一年生まれ）は、県立女子師範学校二部を出て一八歳で煤ヶ谷小に赴任。厚木小を経て、二六歳で南毛利小の同僚と結婚。川崎の小学校に移って翌年出産。妻、母、そして教師として日曜日の日直をすることもあった。「産前産後の休みも十分にとれず、ある人はぎりぎりまで体操を教え、産後は子守りに学校まで赤ちゃんを連れて来させ、おっぱいを飲ませていました。わたしの親戚の先生は雪の日に小使い室で出産してしまいました。子どもには学校の『学』の字を校長がつけました。元気に育ちましたけど」（『あつぎの女性20人』）と回想している。

地域によって違いがあるが、大正期に入ると平均して全教員の三分の一を女が占めるようになったが、女教員の社会的評価は低く、評判が悪い。そこで帝国教育会は努力を促す意味で一九一七年に第一回女教員大会を開き、産前産後休暇、有夫女教員の半月勤務、女教員の適・不適格学級など、女教員問題を話し合った。最も切実な問題は産前産後の休暇で、二二年の第三回大会後の九月には文部省が「女教員の産前産後休養に関する訓令」を出し、産前二週間、産後六週間の休養、産休補助教員の設置を指示。しかし、これは訓令にすぎず、ほとんど守られることはなく、実際に法律ができるのは戦後のことになる。

ただ、二四年の第四回大会後、全国小学校連合女教員会が結成され、女教員の待遇問題などを話し合うように

なつたのは、大正デモクラシーの動きが背景にある。県内では二〇年に横浜市と横須賀市で女教員会が結成され、二二年七月には三日間、県教育会主催で県下女教員大会が横浜の女子師範で行われている。愛甲郡からも三栖マヌ（厚木）、木村キン（荻野）、佐藤カツ（南毛利）、大久保ケイ（清水）、中村スミ（小鮎）ら二一人が出席。また、二六年六月九日、一〇日に湘南中学校で開かれた県下女教員大会にも中村スミら一七人が出席している。

しかし、愛甲郡の女教員会結成は遅く、三〇年七月一二日に厚木小学校講堂で発会式が行われた。来賓に村上教務課長、厚木高女校長、群内小学校校長ら。副会長の萩原ケイの開会の辞、君が代斉唱、勅語奉読と型通りに始まって、副会長の菊地ますの経過報告、会長中村スミの訓示、来賓の祝辞のあと懇談会を催した。このあとすぐ、一月二九日には県下女教員連合会が発会しているから、これに合わせて急ぎ発会したと思われる。連合会には、県下で二千人余の女教員の代表百余人が横浜女子師範に参集し減俸や女教員養成縮小などについて「紅い気焰」を挙げたという『横買』一月一九日。

三二年五月一三日には厚木小で郡女教員会の役員会が開かれ、一〇月に総会を行うことや視察や講習会など行事予定を決めているが、実施記事がなく、どんな活動をしたのか不明だ。ただ、この頃には女子青年団の活動が活発になっており、女教員はその指導者になり、戦争体制に入っていくなかで、女子青年たちを戦争協力に導く役割を担う。女教員自身の待遇改善といった働く女の権利を向上させる方向にはいかなかった。

小鮎小の中村スミは、明治、大正、昭和と教壇に立ち続けるとともに、愛甲郡連合女子青年団の副団長も務め、学校だけでなく、社会教育の指導者としても大きな実績を残した。彼女は『神奈川県教育会雑誌』二五年七月に「女教員の前途」を寄稿し、一〇年以上前には女子が家業以外の職業を持つことは世間から冷笑されたが、今は婦人が経済的に独立していることは「子孫繁栄のために職業婦人が激増した」としている。

### 第三章 社会に参加する

#### 荻野村に愛甲婦女協会

明治期の愛甲郡で特筆すべきは女の自由民権グループができたことだ。一八八四年春、荻野村に愛甲婦女協会が設立された。会員は自由民権運動家の妻や妹たちで、天野政立の妻八重、山川市郎の妻えん、難波惣平の妹のせい、こうら。難波家から見つかった「愛甲婦女協会創立主意書」には、西洋諸国の女たちが男子の相談相手になって、国家の進歩を助けているのにならって、智徳を養おうと呼びかけている。五項目にわたる「申合規則」には、身を慎み行いを正しくする、家政を担当し、人の母として善男淑女を養うこと、などは江戸時代から女の務めとして言われてきたことだが、目を引くのは三項目めで、会員は「世の中の事に目を注いで」「国家の進歩に補いあるべき、働きをなすべき事」と社会の動きに関心を持つとうという。

男女とも小学校教育を受けるよう学制が發布されてから一〇年余、就学率はあがらず、女子に学問は不要という考えが強いなかで、学びを勧めているのは、きわめて先進的だ。さらに言う。男子の演説会や懇親会などに行つて傍聴するのが学問への近道だから、誘いあつてこれらの会に行きましよう。

これより約一〇年前、薩長の独裁に対して国会開設を要求して全国で自由民権運動が起こり、神奈川はその激震地で、多くの民権結社ができた。板垣退助が総裁を務める自由党には愛甲郡からも民権家が馳せ参じている。とはいえ、民権運動の担い手はほとんど男で男の民権には熱心だが、女の民権には見向きもしないなかで、愛甲自由党ができ、その流れのなかで愛甲婦女協会ができたとみられ、全国的にも珍しい。

会員たちの具体的な動きについては資料がなく不明だが、郡内でしばしば開かれていた演説会などの傍聴に行つたとみられる。また、運動の犠牲者に女性が義捐金を贈つたという新聞記事もあり、民権運動の支え手の役割を果たしたことは確かだ。

一八八五年、朝鮮改革運動が起こる。旧自由党左派の大井憲太郎らが、自由党壮士を朝鮮に派遣して紛争を起こし、その勢いで内政改革もやろうという計画だったが、八五年末に渡韓壮士らが一斉に逮捕され、主要人物らが大阪で逮捕されたので、大阪事件ともよばれる。この事件に資金を提供するなどして、愛甲自由党の天野政立、山川市郎、難波春吉、黒田黙耳らが連座した。山川は出獄後の九〇年に亡くなり、八人の子らとともに残された妻えんの苦労は並大抵ではなかった。国会開設翌年の一八九〇年、国は集会及政社法を制定して、女が政談演説を傍聴したり、政党に参加するなど、いつさいの政治参加を禁じた（この項、詳しくは『続・あつぎの女性』参照）。

### 日本赤十字社と愛国婦人会

国は女の政治活動を封じる一方で、福祉分野と戦争の支え手としての働きを女に求めた。その一つが看護婦養成である。看護婦の発祥は戊辰戦争のときだが、医師のように専門的な訓練を受けていたわけではなく、近代的な看護婦養成が始まるのは一八八〇年代からで、神奈川県では横浜の十全病院が最も早く九八年。資料で愛甲郡の看護婦の存在がわかるのは一九一九年からで、初めて試験を受けた人一人、准看護婦一人で計二人。二六年五人、二九年に初めて二桁の一人になり、内訳は指定校と試験合格が計八人になっている。満州事変が始まった年（一九三二）には二七人になり、戦時体制で増えて、三四年には四一人、三九年九四人と激増している。

明治中期、来たる戦争に備えて政府が看護婦を養成しようとしたが、当初はなかなか生徒が集まらなかった。一八九〇年に日本赤十字社の募集に応じたのは一〇人、二回生九人。そこで看護事業について啓発するため、皇室や華族の女たちが参加する篤志看護婦人会が組織された。まもなく日清戦争が始まると、彼女たちは陸軍病院に赴いて繃帯巻きをするなど軍事援護活動をした。この頃には横浜では、キリスト教徒の女たちが貧しい人のためにさまざまな福祉活動を始めているが、愛甲郡ではそのような動きを示す資料がない。

日露戦争中、県下の赤十字社員は二万二四〇〇人、その人口割が最も多いのは津久井郡の七八人、最も少な

いのが愛甲郡の三八人〔横濱〕一九〇五年一〇月二日。愛甲郡の赤十字社員は一八九八年に五五九人中女はゼロ、一九一三年に一一六〇人中六五人、二六年に一五一七人中七五人〔神奈川県統計書〕。この女たちは篤志看護婦人会会員であろう。明治時代の大きな戦争は一八七七年の西南戦争で厚木地区からの戦死者は二人。対外戦争では日清戦争で九人、日露戦争で六六人の戦死者が出ている〔厚木近代史話〕。

戦争が始まると働き盛りの男をとられ生活が困窮する家族も出てくる。そこで義捐金を集めて出征兵士の家族に贈ったり、留守家族の慰問をするなど女性団体が横浜などで活動を始めているが、日清戦争中、厚木でこれに類する動きがあったかどうかは不明だ。一九〇一年には奥村五百子が呼びかけて愛国婦人会が結成された。戦死者の遺族の救護と重病傷痍軍人の救護を目的に、全国の知事を通じて入会を呼びかけたたちまち全国組織になった。神奈川県にも〇三年に支部ができ、支部長に知事の妻、その下に各市町村長の妻、社会的地位のある男の妻らが名を連ねた。日露戦争中の〇五年の会員は一万三九七人。会員は篤志看護婦人会会員と重なる。

厚木の愛国婦人会は、『神奈川県統計書』には一九〇六年から人数が記載されているので、この年に愛甲郡支部ができたのであろう。〇六年四二一人、〇七年七六八人、一三年八五五人、二〇年七七二人、二七年七九六人と、八〇〇人前後が続く。一四年に第一次世界大戦が始まると、直接参戦はしていないが、愛婦が慰問袋六二四個を贈った、郡立実科高等女学校同窓会員が慰問袋を集めて郡役所に寄付した、同生徒が各家庭にある布の断片などを利用した袋を販売した五〇円余を時局に対する国民奉公の一端として郡役所に寄付したなどの記事が続き、銃後の運動が女学生にまで及んでいることがわかる。

戦争が終わったのち、愛甲郡の赤十字と愛婦の総会が一緒に行われ、軍事援護にとどまらない救済事業に踏み出すこととし、台風・地震等への義捐金募集を開始し、一九二〇年代には女、子ども、貧困者を対象とした救済活動を拡充していく。銃後の活動がふたたび活発になるのは満州事変後である。

## 地方改良運動と節婦の表彰

日露戦争に勝って人心がゆるみ、奢侈しゃしに流れることを恐れ、明治政府が取り組んだのが地方改良運動で、のちの社会教育に当たたる通俗教育を地方自治体を実施させる。一九一四年一〇月には、愛甲郡教育会の通俗講演会が高峰村から始まって郡内一か所、佐川郡長の「国民の覚悟及び二大義務の根拠」の大演説会が行われた。聴衆は南依知小で六〇〇余人、田代小では一六〇戸の村で聴衆約六〇〇人、小鮎小では一三〇〇人、特に婦人の参加が多かったという。厚木町や各村で染色講習会や通俗講習会がひんばんに行われ、一八年一月から厚木町開催の衛生展覧会は一六〇〇人の参加者で盛況をきわめ、一日日延べした『横覧』二月六日。

このように大正から昭和初期にかけては新聞にしばしば生活改善、民力涵養という文字が見られる。それは生活の近代化、合理化という側面を持ちながら、第一次大戦後の恐慌を切り抜ける策としての思想善導の色彩を持った官製運動といえる。大正デモクラシーが上げ潮になり、労働運動や社会主義運動、女性解放運動などが盛んになってきた世相を背景にしており、国が人びとの生活のすみずみにまで目を光らせるようになってきている。これらの動きと同時に全国で婦人会、処女会、女子青年団などの組織化が急速に進むのが大正期である。

このような官製運動のなかで節婦の表彰がしばしば行われている。節婦の表彰は明治期にも盛んに行われており、福祉が置き去りにされているなかで、貧苦に耐えながらも働きぬいて、舅姑や夫に尽くす女を涙金とともに表彰して、このように生きなさいと女の生き方規範を示したのだ。男は徴兵制で軍隊に入り忠孝を叩き込まれるが、成人女性を縛るのが表彰制度であった。『横覧』の記事からたどってみよう。

一九一三年二月一日 節婦熊坂ツヤ（中津村）、孝女小島イマ（小鮎村）、一四年一月三日 厚木町の関本ヨウ・愛川村の山口キン・荻野村の柳川クメ。翌年一月二〇日に荻野村で行われた講演会に出席した佐川郡長がわざわざ節婦柳川クメ宅を訪問している。

柳川クメは、一八八六年に三三歳で荻野村の柳川新次郎に嫁いだ。子はなく二人で働いて家計を維持していた

が、夫が中風症に罹り寝たきりになって甚しく「貧窮困厄」。六〇歳になった今も、看護をしながら、家事はもちろん雨の日も風の日も毎日豆腐揚げ類を行商して「其志操の零個なる行為の奇特なる誠に賞賛に足る」。

もう一人、海老名出身の関本ヨウ（一八六七年生まれ）は、中郡比々多村の男と結婚し二児に恵まれたが、夫は素行が悪く「生計貧困難を極め」、さらに夫に逃げられ生家も頼れず、厚木町に来て乾物類の行商を始めた。荷を肩に担ぎ、子を背負い、もう一人の子の手を引いて近郷の村落に行商。こちらも「志操の堅実なる行為の奇特なる物に地方婦女子の模範とするに足る」として表彰されている。

決まり文句は、「貧苦」「孝養」「志操堅実」「刻苦碎身」などで、きわめて貧しい暮らしの中で親に孝養を尽くし、家族のために身を粉にして働いたことが挙げられている。東京や横浜などの都会で女が社会進出し、舞台や演劇で脚光を浴びる人もいれば、平塚らいてうや市川房枝たちが始めた新婦人協会は女の政治参加を求めて活動。労働組合に婦人部もできて横浜や川崎の紡績工場では労働争議に参加する女工たちも出てきた。各地で農民の小作争議も盛んになっている。そのような動きから農村女性たちを隔て、「思想善導」するのが大きな目的であったといえる。

### 処女会から女子青年団へ

このような官製運動の実施団体として明治末期から国が設立に乗り出したのが処女会。のちに女子青年団と名前を変えて、若い女たちの集団活動を上から組織していく。その活動状況については『あつぎの女性 愛甲郡女子青年団のあゆみと聞き書き』に詳しいので、ここでは簡単に経過をたどっておく。

未婚女性の集りを指す処女会が農村を中心にでき始めたのは明治の終わり頃。小学校の同窓会から発展した親睦団体で集って裁縫を習ったりした。成人女性の愛国婦人会や地域婦人会、あるいは男子青年団から未婚女子が独立したものもある。愛甲郡では一九一〇年一月にできた高峰村処女会が最も早く、次いで厚木町（一二年五

月)、依知村下依知(同二月)が続き、県内の他郡に比べて動きが早い。

これを文部省が社会教育政策として指導に乗り出したのが大正中期で、一八年に全国の処女会の連絡機関として処女会中央部が発足。全国の知事や市町村長に処女会の設置を促し、地方長官は学校長に働きかけ、校長は優良な女教員を指導役に選ぶ。文部省は「全国処女会設置基準」を府県に示し、府県は市や郡に通牒を發して処女会の設置を促す。こうして二三年一月の時点で、愛甲郡では前記四市村に続いて、三田村、依知村上依知、小鮎村、荻野村、田代村、煤ヶ谷村などで一四団体が結成されている。

関東大震災後の二四年頃から「処女会」ではなく「女子青年会」や「女子青年団」を名乗る会が増え、組織化が急速に進んだ。二四年九月には神奈川県青年団連合会の機関誌『武相の若草』が月刊で発行され、県と郡は女子青年団の連合組織化を進め、幹部研究会や指導者養成講座を併せて一〇〇回以上も開き、そこで学んだ幹部はそれぞれの出身地に戻って各町村単位の女子青年団へ伝えた。こうして大正末期の二六年三月には愛甲郡連合女子青年団が発足。発団式は荻野小学校で行われ、各村の代表六〇〇人が参加した。

そして、二七年七月には横浜市を除く二市一郡が結集した神奈川県連合女子青年会が成立。会長は知事の妻の池田民子で、役員には男も多く名を連ねている。愛甲郡からは評議員に長沢恭治と中村スミ(小鮎小教員)が選ばれている。県連合はさらに全国組織の大日本連合女子青年団に加盟した。ということ、全国連合↓府県連合↓郡市連合↓小学校単位の村の女子青年団というピラミッド型組織が完成し、ピラミッドの頂点から指令を流せば三角形の裾まであまねくいきわたる仕組みができあがったことになる。これは少し遅れて出発した大日本国防婦人会が陸軍の後押しを受けて、隣組単位まで組織化すると同じ支配のしくみで、戦争体制を銃後で支える団体になっていく。団体数は二五年に一三団体一七二八人、三〇年には一四団体一三八六人になっている。

## IV章 一五年戦争下の暮らし

### 関東大震災の被害

一九二三年九月一日、突然大地が揺れ関東大地震が発生。神奈川県は酒匂川と相模川沿岸の沖積層上の軟弱地盤地帯の被害が大きかった。厚木町、妻田村、三田村、小鮎村などの土地、建物の多くが倒壊した。厚木町はもつとも被害が大きく、ほとんどの家屋が倒壊。発生した火災で住宅、商店、会社、工場などが焼け、死傷者九二人が出た。新築したばかりの県立実科女学校も焼失し、寄宿舎の生徒二人が亡くなった。

川口せんは玉川村七沢で小学校二年生だった。家は倒れなかったが囲炉裏がどーんと落ちて怖かった。「一日くらしいしてから、朝鮮人が来るよつて噂が広がって、はだして山へ逃げてね。梅の木の下へ蚊帳を吊つて寝ました。結局、デマでなかったんですけどね」と語っている(『あつぎの女性20人』)。朝鮮人騒ぎで、「厚木警察署は消防・青年団・在郷軍人をはじめ青年以上の男子を集めて警戒にあたり、伝家の宝刀や鎗をたんの奥や庫から持ち出し、竹鎗を作り鳶口をかかえて部落の入口に集合した。仮小屋や半壊の家屋に雨露をしのぐ人々は夜に入ると灯火を消してまんじりともせず夜を明かした」(『厚木近代史話』)。流言だとわかって山奥に逃げた人たちが戻ってきたのは数日後だったという。襲われた朝鮮人がいたのかどうか、同書は触れていない。

地震から復興するには大正時代末までかかるが、二七年に小田急線が開通したことで、本厚木駅を中心に新しい街並みができていく。相模川沿いの本町通りや厚木神社あたりの天王町に商店が立ち並び、厚木銀座と呼ばれるようになっていく。しかし、ほっとするまもなく世相はしだいに暗くなる。

### 満州事変と女子青年の覚悟

一九三二年七月に関東軍の南満州鉄道爆破から始まった満州事変から四五年八月の敗戦までアジア・太平洋戦

争が続く。当初は町ではダンスホールやカフェも開業しており、人びとの暮らしに大きな変化はないが、気がつかないうちに戦時体制にまきこまれていったというのが、多くの人の本音だろう。

「在満兵士の為に街頭に進出」というタイトルで、厚木男女青年団員が「北満の戦友にご同情下さい」と書いたポスターと日の丸を掲げ、紅白のたすきをかけて慰問金を呼びかけたのは三一年一月。続いて愛甲郡産婆会が満州派遣軍へ慰問金一円を新聞社に届けたことが美談として報じられ、厚木高女で開かれた郡青年団の評議会では、戦死軍人遺族や出動軍人家族の慰問などの実施を決めた。

県男女青年団の機関誌『武相の若草』三二年二月号は「在支皇軍慰問号」で、愛甲郡からは小林直枝（南毛利村）、小島広江（小鮎村）、綱島ミツ（荻野村）、依知村女子青年団が寄稿し、全て在満兵士の戦意を鼓舞する決意文である。小林直枝は、「私達は農村の女子であります。鋤執る畑に針持つ灯火の下に一寸時も忘るゝ事の出来ぬのは遠い満州の広野に立つ吾が勇士の事であります」と書き出し、私達は気候に恵まれた内地に飽食暖衣しているが、酷寒零下三十度の満州の広野に血を流し骨を砕いて奮戦する勇士を思い、「此の時局に際し吾等女子は出来る限りの労役を為し陣頭に立つ勇士の万分の一に報いねばならぬと思ひます」と覚悟を示す。

三五年三月には、依知村出身の北満勇士（二八歳）と愛川村出身で厚木高女卒の女性（二三歳）が結婚。夫とともに「民族のために犠牲になる」覚悟で挙式後すぐに満州へ出発、全村挙げて祝ったという。こうして国策で多くの人が海を渡ったが、敗戦後の混乱でかの地には累々と屍が重なった。この夫婦は無事に帰れたのだろうか。

このあと、各村の女子青年団はそれぞれ工夫をこらして活動を進めるが、資金が潤沢なのだろう、活発な動きをしているのは足立原マサが団長を務める厚木町女子青年団。「非常時」が言われながらも三二年から三六年にかけては、三浦三崎や横浜、鎌倉に旅行したり、家庭経済化講習会、衣服染色講習会、料理講習会、活花講習会などを開催。団服や団旗を決めて団員の結束をはかり、毎日曜日に厚木神社及び忠魂碑の掃除をして敬神奉仕、非常時女性の訓練精神作興講習会、敬老会と軍人遺族慰勞会、梳き毛を集めて国防献金など、ゆとりのある動きを

見せている。しかし、日中戦争が始まり国民精神総動員運動が始まると、戦争を銃後で支える活動に大きく傾斜。厚木駅で除隊兵歓迎、街頭で公德強調週間の標語配布、千人針の依頼、神社で武運長久祈願、在満・在支兵士に慰問袋発送、出征兵士の見送りなどに力を注ぐ。本心は戦争に征きたくない男たちも、駅や沿道につめかけた女たちに「バンザイ」で送りだされると、胸を張らざるを得なかったと戦後になって語っている。

### 三 婦人会が連立

銃後における最大の女性組織である大日本国防婦人会は一九三三年に大阪築港の女たちの奉仕活動から始まり、やがて全国組織に膨張。厚木支部は三六年一〇月一七日に結成された。会長後藤ナホ（町長の妻）、副会長足立原マサ（女子青年団団長）、北川恒（厚木高女校長の妻）、青木みよ子（在郷軍人会会長の妻）、他に理事七人、班長七人、組長一五人、評議員二二人で、会員は二〇〇人。翌年にかけて各村単位の国防婦人会が結成され、未婚既婚を問わず、女性たちは網の目のように張り巡らされた戦争推進組織にからめとられる。

時節柄、花柳界も愛嬌をふりまいてばかりいられない。翌年一〇月六日には厚木花柳界三業組合が厚木報国婦人会を設立している。厚木町の芸妓、女給、飲食店の女中たちが、「各人自発的に、出征将兵の見送りや献金に努めているが、彼女等の見送りは兎角一部から誤解を招く恐れがあるので、銃後後援の新団体として結成した」のだそうだ。結成式当日には、中込卯三郎厚木警察署長から「時局に対する訓示」があり、会長、副会長を選任、「エプロンに会員章の廻しをつけた一同は折よく出征する勇士」を見送ったという。

ところが厚木町飲食店組合の従業者は、報国婦人会から分かれて赤心婦人会を結成。「カフェー厚木」の近藤コウが会長になった。名誉会長に中込警察署長、副会長に「バーボン」と「花蝶」の主人が選ばれた。一二月一五日の『横賞』には、町内出征兵士のうち軍事扶助を受けている家族に対して金一封を送って慰問した。煙草の銀紙、歯磨きのチューブなどの廃棄物、愛国ハンカチを売って得た収益で、「同会の銃後奉仕振りは賞賛的になっ

ている」という。

この三団体と、明治時代から活動してきた愛国婦人会は、一九四二年六月二十九日、大日本婦人会厚木支部に統一され、厚木国民学校で結成式が行われた。支部長足立原マサ、副支部長は浅葉スミと山本トシ。戦時生活改善の一つとして花嫁の典礼衣装「振袖」を追放し、町内の結婚式には絶対に着ないことを申しあわせたり、衣料切符の献納運動や洋傘修理講習会を行っている。

そして、敗戦。これらの婦人団体の後継団体とする厚木市地域婦人団体連絡協議会の結成40周年記念誌『歩み続けた40年』には、「本会（大日本婦人会厚木支部）は、昭和二〇年八月一日、太平洋戦争終結により、婦人団体としての任務を全うして解散。「このようにして活動を続けてきた婦人団体は、終戦によって消滅しましたが、女性達のうちに潜んだ情熱は、新時代の活動への原動力となって燃え上がろうとしていたのです」とあって、戦争遂行に加担した反省はない。

### 小学生も女学生も献金、慰問、勤労奉仕

女子青年団や婦人会だけではない。同調圧力に屈しやすい国民性なのか、多くの国民が戦争熱にかかり献金と慰問ラッシュになった。一九三九年中の『横濱』によると、小学生が日用品を売った利益を献金、芸妓組合、料理屋組合、女子青年団なども競って献金行動に出る。古雑誌や廃物を集めて売ったお金で慰問品、出征兵士家留守族に防寒用フランネルを贈った、小学生が小遣いを貯めて国防献金したといった報道が連日。報国婦人会員が陸軍病院の傷病兵を慰問すれば、厚木国防婦人会も負けてはいられず東京第三陸軍病院で作業労力奉仕と慰問くらべ。厚木小学校高等科の児童五三人が教師に引率され、出征軍人の武運長久、国威宣揚、日本精神発揚週間の行事として伊勢神宮に参拝したかと思えば、同じ厚木小学校は四〇年一〇月には蝗いばの採集売却金を読売新聞社に寄付。採集には尋常四年以上の生徒九〇〇人が動員されたという。

一方で、不況の影響で愛甲郡内の欠食児童が増加していると、新聞が各校の人数をあげている。多いのは依知校四六人、厚木校四〇人、菁莪校二六人、三田校二〇人など（『横濱』三五年二月二六日）。

男たちが兵隊にとられて農村は人手不足。厚木高女生も勉強どころではない。三九年六月五日、労力奉仕班を結成して南毛利村、依知村、三田村などへ二五〇人を出動させた。一月一三日には農会の依頼で出征軍人家族宅の勤労奉仕で桑園除草作業に四〇〇人参加、四一年八月、暑中休暇を利用して玉川村、南毛利村、三田村、小鮎村で勤労奉仕。四一年一月には託児所や共同炊事の手伝いもしている。

農繁期託児所で早いのは中郡相川村で、三三年から毎年六月に一カ月間、開設してきた。天宗寺で一歳から七歳までを朝から夕方まで預かり保育料はなし。高峰村は三八年からで、産業組合の援助で三週間、高峰小学校で収容人員は一〇〇人、保母一人と女子青年団員三人が交代で世話をした。村長や組合が茶菓子や夕食を提供して援助、村民から感謝されている。戦時体制が厳しくなると他村にも広がった。

太平洋戦争開始後の四二年六月には、東京家政専門学校、栄養学校の生徒、横浜と川崎の女子青年などの「お嬢さん部隊」一六〇人が農繁期託児所で献身的に働いてくれたので、慰労の鮎漁大会を催したとある（『横濱』七月一日）。緒戦で浮かれていた時期だからなのだろうが、現実にはすでにミッドウェイ海戦で大敗を喫している。

### 農家も困った食生活

戦争の進展に伴い暮らしは大きく変化する。国家統制で三九年には米穀配給統制法公布、四〇年にはマッチや砂糖の切符制開始。配給品は米穀、味噌、醤油、衣料切符、綿ガーゼ、地下足袋、石鹼や木炭などが配給制になった。それも戦況悪化に伴い遅配が続く。

冒頭で紹介した熊坂千代は、棚沢村の農家の総領に生まれ、戦後、結婚するまでずっと畑の手伝いや蚕の世話をしていた。戦争末期に父親の弟二人が戦死し、その家族を預かったので全部で一四人。朝、四升釜にさつま芋

を蒸かしておく、夕方にはなくなるほどだった。出征兵士の見送り、演習のために相模原からきた兵隊さんを泊めたこともある。おにぎりを作ったり、炊き出しをしたりした。

山田富美枝（一九二八年生まれ）は南毛利村で育ち、厚木高女を出て小鮎国民学校の教師になった。戦争末期には横須賀から疎開児童と引率の先生が来て校舎に入った。空襲がひどくなったときは地域別の分散教育になり、神社などで授業をやり、心細かったという。

高座郡大和村の地主の家で育った甘利千代子（一九一九年生まれ）は三九年に山際の農家の長男甘利正と結婚。戦時中は手伝いの人もいなくなり、それまでの白たび、白エプロンから野良着に着かえて田んぼに入り、牛の鼻先に竹の棒をつけて牛を引つ張る「鼻どり」をやるようになった。やがて一人で田んぼを耕すようになったという（いずれも『あつぎの女性20人』）。

戦争中の食生活については、『厚木の民俗9』が詳しい。農家は足りないながらも自給自足しており、町から野菜やさつま芋などを買い出しにきたという農家がいる一方、「食糧難でコメ、麦、粉もなく困った。配給では何も得られず、農家へ行って物々交換して穀類を手に入れたこともあった。主に食べられる草ものを入れた雑炊が多かった」（七沢の前場コウ）、「米は供出したため、コメの中にかぼちゃ、むぎ、あわ、さつま芋、ひえなどを混ぜた」（下荻野の難波テイ）、「陣地構築で荻野にも兵隊が入ってきて、昼はご飯を炊いて食べさせた。配給は不十分でコメの代わりに桑の葉や砂糖が配給されたり、買い出しに行つて自分の着物と食糧を取り換えてきたこともあった。荻野は田んぼが少ないので、麦や芋類を供出し、横須賀の小学生が疎開してきているので、そこへも食糧を出さなければならず、食べるのに困った」（上荻野の鈴木ゆき江）など、供出させられたり、野菜の出荷割り当てがあつたりで、食生活に困っている農家が多い。

## 勤労働員で川崎の工場へ

戦争末期になると、小学生も貴重な労働力だ。一九四五年に厚木国民学校五年生だった大久保ミヨ子（一九三四年生まれ）は、農家に行つて桑の皮や木の皮をはがした。そうすると農家の人が真っ白なご飯と具が入つていゝるみそ汁を食べさせてくれた。夏休みの宿題は干し草一貫目。小鮎川の土手まで行つて草を刈つてきて家で干す。何のためなのか、先生は「お国のため」としか言つてくれなかつたという『続々・あつぎの女性』。

四四年八月には「学徒勤労令」が公布され、全国の学徒は学業をやめ、軍需工場や国防建設事業などへ通年動員されることになつた。厚木高女の三、四年生約三〇〇人も学徒勤労報国隊の腕章をして川崎市溝ノ口にあつた日本光学川崎製作所に動員された。通勤する人と寮生に分かれ、通勤生は「神風」の鉢巻きをしめてモンペをはき、防空頭巾、非常食として煎つた大豆を手作りのカバンに入れて肩にかけ、早朝に家を出た。溝ノ口駅前集合して点呼、「海ゆかば」を斉唱したのち、一列縦隊で工場に向かつた。

第二工場では海軍航空関係の爆撃照準機を生産し、第四工場は陸軍の爆撃照準機・偏流計等の航空機搭載高額の兵器を生産していた。岡田幸江によると、「機械場の旋盤でビスやワツシャーを作つた。頭上からモーターの油がたれ、足元はコンクリートの上に棧俵を敷いて寒さを防いだが、寒くて冷たくて、裸電球で手を温めながら、必死に働いた。身体中油にまみれ、毛穴の中まで真っ黒になり、目ばかり光らせていた」。春頃には毎日の空襲で一日防空壕の中で過ごすことが多くなり、ようやく電車に乗つても警報が鳴るたびに電車から降ろされ、木の陰に隠れる日々が続いた『夢はるか』。四五年になると、空襲で工場が罹災して生産活動が麻痺状態になり、高女生は七月、相模陸軍造兵廠に配置転換になつた。通勤途中や勤務中に艦載機に襲われて逃げまどうなど、それは過酷な日々だった。

一方、学業を終えた未婚の女性たちによる厚木女子挺身隊約三〇人は、相模海軍工廠で教育訓練ののち、第二火工部に配属され、気球や防空凧などの出張検査に従事した。

## 「敵国人」と疎開学童の受け入れ

一九四一年の太平洋戦争開始とともに日本に在留する外国人のうちアメリカ人、イギリス人などは、自らの意思とかかわりなく「敵国人」との烙印を押され、各地敵国人抑留所へ抑留された。貿易商や教師、宣教師などに成人男子が収容された。戦争が進むにつれ範囲が拡大され、四二年九月には「女子と高齢者を含む教師・宣教師・修道女・保母」の抑留が始まった。一部は四三年に行われた相互交換による交換船で帰国したが、日本の暮らしに慣れていたり、仕事や国際結婚の家族のため、日本にとどまった人もいた。敗戦時に抑留されていたのは全国で八五八人、抑留中の死亡者五〇人という（小宮まゆみ『敵国人抑留 戦時下の外国人』）。

早くから外国に港を開いた横浜には長年その発展を支えた外国人が多かった。四三年二月七日、横浜山手から玉川村七沢の旅館、玉川館と福元館に突然イギリス、アメリカ、オランダなどの老人、女性と幼児四人を含む二〇世帯二八人が連れてこられた。最高齢の九二歳のイギリス人男性は横浜の茶輸出商だった。警察がときどき監視にきたが、行動は比較的自由だった。食事は廊下にコンロを置いて自分たちで煮炊きをしていたが、食べ物が困っており、同じ村に住んでいた亀井ナヲ子（一九三四年生まれ）の父親・佐藤忠治は牛を飼っていたので牛乳をわけてあげた。二人の女性が毎日四〇分の道のりを歩いてきて搾りたての牛乳を入れた一升瓶を抱えて帰っていた姿を、当時小学生だった亀井が覚えていた（『続々・あつぎの女性』）。

四五年五月三〇日、彼らはまた急に厚いカーテンがおろしてあるバスに乗せられ移動していった。行く先は秋田県平賀郡だったという。

横浜や横須賀から厚木へ国民学校生徒が集団疎開でやってきたのは四四年八月から。七月に学童疎開実施要項が決まったからだ。南毛利村に船越、煤ヶ谷村に逸見、依知村に沢山、愛川町に田戸、小鮎村と玉川村に山崎、荻野村に衣笠、依知村に大津、三田村と妻田村に久里浜の各国民学校からで、計二五〇〇人余。各村の神社、寺、小学校の裁縫室や集会所などが宿舎になった。その生活の一端を妻田村の石井ミネが『続々・村のくらし』に書

き留めている。

妻田村の神社境内の公会堂に久里浜国民学校から五、六年生三〇人が来た。食事は付き添いのおばさんが近所から調達したが、風呂がない。石井宅にも子どもたちが入浴に来たが、栄養不足で衛生状態が悪いので子どもたちの着物からシラミを移され、熱湯をかけてもなかなか死なず、シラミやノミとりが仕事の一つになったという。「疎開の学童たちはお行儀もよく、家にあるさつまいもなどをあげると、喜んでくれました」と振り返っている。

一九四五年に入ってから、七月一〇日と八月一日に厚木にも米軍機が襲来し機銃掃射があったが、大きな被害がなかったのは幸いだった。しかし、厚木市での戦死者は二二二〇人にのぼっており『厚木・愛甲の100年』、父や夫や息子を失った家族の悲しみと苦労は察するにあまりある。

## 参考文献

- ・『九十九髪炉辺の回顧』荻野・鳶尾の古老に聞く会 一九八六年
- ・『厚木の民俗9』厚木市文化財協会 厚木市教育委員会 一九九七年
- ・『厚木産業史話』厚木市史編纂委員会 厚木市役所 一九七六年
- ・『続々・村のくらし』石井ミネ 市民かわら版 一九九五年
- ・『依知と女と七十七年』厚木市福岡県人会 一九八六年
- ・『厚木市史 近代資料編(一)』厚木市教育委員会社会教育部文化財保護課文化財保護係 二〇二一年
- ・『谷戸田のムラ』荻野・馬場地区民俗調査報告書 厚木市教育委員会社会教育部社会教育部社会教育課編 一九九五年
- ・『今昔あつぎの花街』飯田孝 市民かわら版 二〇〇一・〇三年
- ・『厚木市小学校教育史資料』厚木市教育研究所 研究紀要 第四四号 一九八四年
- ・『神奈川県社会教育概要』神奈川県学務部社会教育課 一九三二年
- ・『神奈川県統計書』神奈川県企画調査部 神奈川県新聞社 二〇〇七年
- ・『夢はるか』神奈川県立厚木東高等学校 神奈川県新聞社 二〇〇七年
- ・『神奈川県統計書』神奈川県企画調査部 一八八一・一九四一年
- ・『厚木近代史話』厚木市史編纂委員会編・発行 一九七〇年
- ・『武相の若草』神奈川県男女青年団連合会機関誌 一九二四・三八年 神奈川県青年団連合会・神奈川県連合女子青年団
- ・『歩み続けた40年』厚木市地域婦人団体連絡協議会の結成40周年記念誌 厚木市地域婦人団体連合協議会 一九八九年
- ・『敵国人抑留 戦時下の外国民間人』小宮まゆみ 吉川弘文館 二〇〇九年
- ・『目で見る厚木・愛甲の100年』北村精一郷土出版社 一九九一年



聞  
き  
書  
き

## 敗戦で女たちが得たもの

こじま  
小島 すみ

今回、記念誌を刊行するにあたり、二〇年前、すみさんに講話をしていた資料がありました。恐らく当時の会員は「戦争体験者に話を聞くのは今しかない」、という思いが強かったのでしょうか。

話者のすみさんは八六歳と高齢。お連れ合いを見送られたあとでお疲れもあつたでしょうが、ご自分の心境を率直に語ってくださいました。その様子が文面からも感じ取れます。かなり踏み込んだ内容もありましたが、これはご本人の思いとして承りました。

長時間のお話しのなかから、聞き書き風にまとめるに当たり、ご自身の貴重な体験談や家族とのかかわり、女性としての思いに重きを置きました。

「思い出 あれこれ」にその時の写真が掲載してありますので、ご覧ください。

〔さねさし〕記



(一九一九―二〇一五)  
東京府豊多摩郡渋谷町生まれ  
厚木市妻田西

小島喜一

(一九一六―二〇〇四)

すみの夫。神奈川県、厚木、相模原、秦野、川崎などの学校の国語の教師。近隣の小学校の校歌や、秦野煙草音頭を作詞。短歌の会「醍醐」に所属。

## はじめに

わたしはね、こういうところへ来て話すの慣れていないんです。本は出しても、それはうちでできることでしょう。なぜかっていうと、これも私事になるけれど、昨年六月に亡くなった連れ合いがね、晩年は非常に病気がちになりまして通信病院で、S字結腸の癒着を起こして一度切つて、また切つて、治つて帰つてきたけど、腸閉塞をおこしかけて、県央胃腸科へ出たり入ったりして病院通いが多かったし、そのうちには足腰も弱つちやつて、とてもわたしだけでは世話がしきれないので、睦合ホームへ二年、北部病院へ二か月お世話になったわけ。そのあいだは、わたしは亭主のほうへ顔も体も向けていたから外へ出るということとは、ほとんどなかったわけ。だから皆さんといつしよに話すことなんか慣れてないんですから、そのことはご勘弁願いたいと思います。

### 参政権の獲得と家族制度からの解放

参政権はなかったんですよ、戦前は。選挙で女が行くなんてことは、ぜんぜんなかった。それを得たことは大きな収穫ですよ。あともう一つ、それは家族制度から解放されたこと。敗戦後、日本国憲法ができて新しい民法になる前は、家、家というものが第一番の狙いだったから。女の人権とかそういうことは無視され

#### 参政権

国民が直接または間接に政治に参加できる権利。日本で女性は一九四六年、新選挙法で参政権を行使できた。

#### 家族制度

一八九八年に公布の民法では戸主の父親が家族統制し、長男が家督相続する古い家制度。一九四六年日本国憲法の公布と翌年の民法改正で法律上は姿を消した。

#### 日本国憲法

日本の現行の憲法。大日本帝国憲法に代わり一九四六年一月三日に公布、翌年五月三日施行。

ていたからね。その一番いい例は「嫁して三年、子なきは去る」（三年子宝に恵まれなければ帰りなさい）。文句なんか言えなかつたんですよ。それでね、旦那さんが亡くなつちやうとお舅さんが「その子は家の跡継ぎだから置いていきなさい」と「まだ若いんだから実家へ帰つて再婚すればいいでしょ」と追い出されちやう、そういう例は、わたしの身近にいっぱいある。それが当たり前になつちやう、だから言われてみれば、ほんとうにそうだつてことになるよね。

「嫁して子なきは去る」日本の家族制度つてものはたいへんなものだった。家長がいて、その首を縦に振らなきや、結婚もできないし、好いた同士で、勝手に結婚するなんてことはできなかつた。長男が跡取りで非常に大事にされて極端な家では、長男にお頭付けてもほかの子どもたちには付けなかつたか、すべて長男、長男と優遇されてきた。家族制度から解放されたつてことは、女にとつて非常に大きな収穫だつたと思えますよね。それと選挙ができるようになったということね。その二つじゃないですか。

## 作家、和田傳と『大日向村』

戦争だけはするもんじやないですよ。「戦争に行かない」なんて言つたら、「非国民だ」そんなこと言つたら、「ちよつと来い」となつちやうの。

ほんとうのこと書いたら大変。小説家の石川達三の書いた本なんて発売禁止に



和田 傳

(一九〇〇—一九八五)

愛甲郡南毛利村恩名生生まれの農民文学作家。一九三八年、第一回新潮社文芸賞、神奈川文化賞、厚木市民文化彰を受賞。厚木市名誉市民第一号。主な作品は一九三七年『沃土』、三九年『大日向村』、五七年『翳雲』。映画「翳雲」は五八年公開。



『大日向村』  
1939年

石川達三

(一九〇五—一九八五)

秋田県出身の小説家。『蒼氓』で第一回芥川賞受賞。『生きてゐる兵隊』は発売処分を受けた。

なっちゃったのよ。なにか罰金を取られたのかな。だけでも文学をやる人も絵を描く人も向こうへ行つて取材して来いという時代があつたのよ。それで和田傳さんなんかも行つたんだつて。どうだつたつて聞いたらね、満州は広いから赤い夕陽が沈むところまで日本のものになるつて言つて、皆行つたんですつて。満蒙開拓団だつて、それでね、小説を書くために大日向村、長野県の大日向村が村を二つに割つて満州へ移つた。それを取材しに行つたの。ところがね、未開の原野を開拓するんだと思つて行つたら、そうじゃないんだつて、すでに水路があつて、つまり満人が作つてあつた土地を追い出して奪つちやつたのよ。「そして、どうしたの」つて聞いたら「そんなこと言えるもんか」つて。傍らにサーベルの将校がついていて、ガチャガチャさせていて。だから、和田さんは帰つてきて「大日向村へ行け行け」と言つてみんな行つたけど、それ以上のことは書けなかつた。

和田さんのこと、娘さんの梓さんが書いた文のなかに「父が目を伏せなければならなかつたこと」といつてこのことを書いています。軍国主義のあの頃、従軍作家といつて、みんな行つたんですよ。

わたし、その頃隣組の組長をやつていて、食べるものが統制になつちやつて、八百屋から「今日はこの組、これだけですよ」つてもらつてきて七軒なら七つに分けるのにキャベツなんかバラバラになつちやつて、そういうことやつていたの。炭もお砂糖も。生活必需品は切符持つていかなきゃ買えない。そんな時代でした。

#### 満蒙開拓団

満州事変後、国策により日本から満州、内蒙古華北に送り出された農業移民団。二七万人が移民。

おおひなたむら  
大日向村

長野県佐久地方にある僻村・大日向村が家族ぐるみ分村して満州国（吉林省）に移民。和田傳は一九三八年、満州国へ派遣され、その旅で真つ先に大日向村を訪問。翌年の三年七月、朝日新聞社から『大日向村』を刊行。八五年、ドキュメンタリー映画『大日向村の46年』が制作される。

#### 隣組

一九四〇年九月、内務省により国民統制のために作られた地域住民組織。町内会、部落会の下部組織で配給切符の割り当、防空活動、資源回収などをを行った。

## 井上篤太郎の孫「カナオ」

戦犯っていえばね、わたしはカナダに二世の従兄弟がいて戦犯で殺されているの。その父親というのは井上篤太郎の次男だっていうけど明治の何年頃かね、カナダは広いからね。日本もどんだんカナダへ行って海もあり、お魚も取れるしと言つて三井物産あたりが奨励して移民船が行つたんだつて。それで篤太郎の次男も行つたんですよ。向こうでうまくいっていたの。広い土地をもらつて、そしてカナダ国籍ももらつて住んでいたわけ。そしてね女の子が、三人か四人いて、その一番下が男の子だった。神奈川県の神という字とカナダの字を使つて「カナオ」という名前をつけた。早くおとつあんが亡くなつてしまつて東京に来ていて大酒を飲んだらしいのね。

この息子が微用を受けて香港、香港はその頃、英領で要塞があつたの。その捕虜収容所の通訳をやっていたの、カナダ生まれだから英語が喋れたから。通訳が不足しているからといって、だから一時は良かったのよ。終戦になつたら逆になつちやつた。自分が今度は捕虜になつちやつて結局、軍事裁判があつて、海外の軍事裁判というのは日本から弁護士をつけるなんてできないから。英国法廷ですから、それで絞首刑になつちやつた。で、戦犯の遺骨はぜつたいに返されたい。頭の毛と腕時計だとか返つてきたつて。それを叔父たちが父親の墓の横に埋けたつてという話は知つているけどね。父親のお墓の横側に戒名だけ刻んであります。

### 井上篤太郎

(一八五九—一九四八)

郷土三田村が生んだ政治家で実業家。青年期は自由民権運動にかかわり、のちに衆議院議員。中央政界と実業界で活躍。

### 東京裁判

正式の名称は極東国際軍事裁判。日本の戦前・戦中の指導者二八名の被告、主要戦争犯罪人（A級戦犯）として、彼らの戦争犯罪を審理した国際軍事裁判。

「香港において客死」と書いてある。清源院の奥の方に篤太郎のも父のもあります。今度はおじいさんの（夫の）入ったお墓はね、新墓地だから明るいの、木も何もなくてね。

清源院の和尚さんに「高いお金を出して院号の付く戒名なんかいらなから、一番下でいいから必ず文学で生きた人間だから文の字をつけてください」と言ったの。それで、「文翁」とつけてくれたの。

## ひめゆり部隊と靖国神社

靖国神社、難しくなってきたね。わたしもあれはいろいろ書いたけどね。新聞雑誌もとつてくれないよ、靖国神社はね。だけでもそこに遊就館というのがあってね、人間魚雷とか、人間魚雷って分かりますか。戦争末期には武器がないから人間がなかに入って、もうそのまま身体ごとぶつかるんですよ。決死隊みたいなもんだ。それが飾ってあるんだってね。お花見には行くんだけどなかに入って見たことない。

靖国神社そもそもの起こりはね、昔はね官軍、官軍に対して賊軍、つまり鳥羽伏見の戦いとか西南戦争とか、官軍と戦って死んだ人を祀ったのが最初なんだって。それがそもそもの始まりだって。

わたしが思うに靖国神社はこういうものだったっていうことをもつと国民に知ら

### ひめゆり部隊

一九四四年一二月から第二次大戦末期、米軍との沖縄戦で従軍看護要員として動員され、戦死した沖縄師範学校女子部、沖縄県立第一高等女学校の教師生徒。

### 靖国神社

東京都千代田区にある神社。幕末および明治維新以後の国事に殉じた人々の霊二四六万六千余柱を祀る。一八六九年、東京招魂社として創建。一八七九年、現社名に改称。「別格官幣社」という特別の社格を与えられ、国家神道の中心的神社と位置づけられた。

### 遊就館

靖国神社の祭神ゆかりの資料を集めた宝物館。

せなきやいけないとね。それで宗教に関係のない戦争犠牲者の霊園みたいなものにすればいいと思うの。

戦争犠牲者といえ、沖繩のひめゆり部隊も今みんな靖国神社に祀ってあるんだってね、宗教にとらわれずにお参りできるでしょ。

「故人として国のために亡くなった人を弔うのは何が悪い」と言うけど、国のために亡くなった人だけがね、誰も死にたくて死んだんじゃないんだよ。日清日露で何十万の人が死んでるでしょ。そういう人は死ねば靖国神社へ祀って神様にしてあげるってことだね。死んで神様になるよりも生きていた方がいいよね。

西郷隆盛も維新にはずいぶん功劳があつたんだって、弟子たちに持ち上げられて官軍と戦って切腹して賊軍というんで靖国神社へ入れない。

### 子どもたちとゴムまり

わたしが横浜へ行ったとき、長女が七歳になつていたと言つたでしょ、そのとき、仏印進駐記念といつて、こんなゴムまりをもらったの。その頃ゴムまりなんて見たことなかった。それは昭和一八年か一九年頃かしら。あの頃、近くにあつた掃部山公園へ子どもを連れて行ってね、近いから。今思い出したけど、あそこは井伊掃部頭の銅像があつた。それが海の方を向いていたんですよ。つまり横浜の開港には井伊直弼の功劳があつたわけでしょ。勅令を待たずに開港につながる

仏印進駐  
第二次大戦下における仏領インドシナへの日本軍の進駐。

和親条約を結んじやったというので、あの桜田門外で水戸の浪士に撃たれちゃった。そういう人たちは靖国神社へは入っていない。

## 学童疎開で南足柄市へ

学童疎開は、ご存知のかたもあるみたいだけれど、大都会は必ず空襲があると、空襲っていうのは今の爆弾じゃないんですよ焼夷弾。だから隣組でバケツリレーの練習なんかやらされたけど、あんなもので消えるわけがない。火の海になっちゃうんだからね。そういう前に被害にあう少国民を安全な場所へ移しましょうというので学童疎開が行われた。うちの連れ合いはね、横浜の小学校にいたんですよ。それで全部の先生が行ったわけじゃない。希望者だけ行っただけど、亭主が行ったからわたしたちも行かなきゃならないって、でもいっしょに住んだんじやないの。

学校は町内別にその町にあるお寺に分宿したんですよ、南足柄市の長福寺の本堂に。そして本堂の畳の敷いてあるところに布団を敷いて寝て、朝は起きて公会堂ってところが隣にあって、そこへ行ってご飯を食べて、戻ってきて勉強もした。大雄山、道了山ね、あそこが近かったから、杉っ葉取りや焚き木取りに行ったりなんかもしたんだけどね。お寺さんだから、こんな大きな太鼓があるのね、そうするとね、それをドンドンドンドンドンたたいてね、般若心経という短いけど、有り

### 学童疎開

一九四四年七月、方針を決定。翌八月から大都市の国民学校初等科の児童を農村地帯に移動させた。縁故疎開、集団疎開があった。

### 長福寺

南足柄市関本にある臨済宗円覚寺派寺院。

### 大雄山最乗寺（道了尊）

南足柄市にある寺院。一三九四年草創。福井県の永平寺、神奈川県鶴見の総持寺に次ぐ格式のある曹洞宗のお寺。

難いお経があるの。それをね、みんなで唱えて、それがすむと子どもたちは宮城きゆうじょうの方を向いて「おとうさん、おかあさん、おはようございます」ほんと哀れなもんですよ。

面会の日があつて父兄が来るでしょ、みんなない材料で何か食べ物を持つて来られるわけね。お菓子なんて売っていないから、家でカレントウを作るとかして持つてくる。みんなにはやれないから布団をかぶつて夜ね、ボンボンと音のしないように食べたなんて…。今でもその頃の生徒さんで級長していた人と文通してんのよ。今、七三歳くらいでしょう。そのとき、うちには七歳と二歳の娘がいて、この幼い子がいたから、横浜にいたら逃げられなかったわよ。近くに掃部山というのがあつて、そこへ逃げて助かった人もあつたと聞くけど。東京も横浜も川崎も太平洋沿岸全部焼け尽くされたの。無差別爆撃ですからね、あれはね。空襲になる前はサイレンが鳴るんですよ。警戒警報発令つてね。そして空襲警報のサイレンが鳴るの。警戒警報はウー……と長いのが一つ、空襲警報はウー、ウー、ウー、ウー嫌でしたね、あの音は。電気の灯かりがあると、そこをめがけて爆弾を落とされるからつて暗くして、灯火管制ね、だから毎晩夜は真つ暗にした。だから敗戦になつて一番良かったことは、ああ、今夜からは明るくなつて電気消さないですむんだつて、それが一番有り難かつた。

灯火管制  
夜間敵機の来襲に備え、減光、遮光、消灯すること。

## ポツダム宣言受諾

ラジオはあったけど、新聞なんて読んだかしら。いいとこ、大本營発表。大本營発表しか、新聞だつて、検閲制度があったから書けないんですよ。ほんとうはどんなことしていたなんてぜんぜん耳に入らなかったのよ。今と違って非合法だったからね。自分たちのただ感覚でね、こんな生活が続くのは…とても勝てないと感じていたでしょうよ。言論の自由なんかないから、ちよつと変なことを言えば「ちよつと来い」だから。それで結局日本はポツダム宣言で「負けました」と認めたわけだけど、ポツダムというのはドイツにある町なんですつて。そこで連合国一か国が集まつて「日本にあんな戦争続けてもらつちやあ困るから」つて申し合わせをして宣言を出したのが、一九四五（昭和二〇）年七月。無条件降伏をするつてことをのんだでしょう。そうしているうちに原爆が落ちたわけ。二〇年でしょ。二二年には新憲法ができて…。

## 八月二五日

天皇の玉音放送ですか、八月二五日の、あれ聞いてみんな泣いたつていうけど涙なんかぜんぜん出なかった。「忍び難きを忍び…」というところだけは分かったけど、あとは分からなかった。でもみんな「もう戦争はおしまいだつてよ」つて

### ポツダム宣言

一九四五年七月二六日に米・英・中の政府首脳の名に於いて日本に対して発された全一三カ条で構成される宣言。日本への降伏要求の最終宣言。

### 大本營発表

一九三七年一月から一九四五年八月までの期間、日中戦争および太平洋戦争において、大本營が行った戦況の公式発表。戦時に際して設置された最高統帥機関。

### 無条件降伏

軍事的意味で使用された言葉。すべてを無条件で敵の権力に委ねること。

### 玉音放送

一九四五年八月二五日正午、昭和天皇が国民に対してポツダム宣言受諾を自らの声で伝えたラジオ録音放送。

言うから、ああ、良かったなあつて、今夜から電気真つ暗にしなすむつて、それがうれしかったですよ。みんな泣いた泣いたつて言うけど、わたしの見る限り農家の土間に立つてラジオを囲んでいた隣組の人たちは、誰も泣かなかつたけど。負けて良かったんで、あのとときまだ抵抗していたら、もう皆殺しになつちやつただろうし、足柄山だつて危ないから東北方面へ再疎開だなんて話も出てたよ。

負けたおかげで参政権ももらえなし、家族制度からも解放された。女にとつてはとくに良かったんじゃないのかね。でも今、もう慣れちやつてるから言われてみりゃほんとうにそうだつてことで当たり前になつちやつた。

### 憲法九条は譲つちやダメです

憲法九条、あれは押し付けだから、あんなものに縛られないなんていう人もいるけど、九条だけは譲つちやダメですよ。

今年の正月の新聞にね、パロディ百人一首つていうのが載つていてね、わたしどこかに書いておいたんだけど、「もろともに哀れと思えアメリカのポチよりほかに生きるすべなし」。あまりよくできているからね、忘れないよう貼つてあるのよ。相模原の何とかつていう人が書かれたんだよ。女たちは敗戦でせつかくよいものを得たんだから。憲法九条だけは大事にしましようよ。

#### 日本国憲法第九条

日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇または武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。②前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

## 今の暮らし

お仏壇にお茶やお花、珍しいものがあると、あげて話している。

おじいさんが元気な頃、買い物やお食事作りは、前にはミロードまで連れてってもらって買ったか買っていたけど、おじいさんを置いて留守番させるわけにはいかないからね。連れて行ってね、「ここで、コーヒーを飲んでいなさいよ」ってコーヒー好きだったから。落ち着いてそこにいなくなっちゃうの。目を離すと迷子になっちゃうの。生協で注文したものを一週間分届けてくれるから、だいぶいいです。一週間先の注文だから同じもの頼んじやったりして「また頼んだ」なんて娘に叱られてるよ。

野菜は三番目の娘がああ通りきれいに作っているから、サヤエンドウとかスナップエンドウとか買ったことないよ。もらってるから。もうじきキュウリかなんか採れるんじゃないかな。娘は仕事で週に何回か出るけど、朝、畑をやってから出かけるよ。草一本出てない。きれーいに畑をやってるよ。肥料も及川にある農協へ行って、作り方は本など読んでね。昨日も大きいカボチャみたいなの、ズッキーニとか持つてきて、雌花が咲かないうちは、これ置いといてもだめだからつて。あまりきれいだからおじいさんのところへあげておいたらすぼんじやった。もうカサブランカなんか作らないよ。あんまりきれいだから買って球根を売ってたから横へ置いてみたの。そしたらね、ニョキニョキ出てきて壁が汚れちゃう

本厚木ミロード  
小田急線本厚木駅直結の複合  
商業施設。ファッション・雑  
貨・レストラン・食料品などの  
店がある。

から。だから人工的に去勢した花なんかもう買わない。とくに歩いたりの運動はしていないけど手紙をポストに入れに行く。坐骨神経が痛むから葉塗ったりしますけど、柱につかまってね、腰を出したり、ひねったり、そういう運動はしますよ、ストレッチっていうかね。ご飯は一合半くらい炊いておいてね、二度分、あとはうどんやおそばを茹でるとかやりますよ、稲庭うどんなんか大好きよ。

聞き取り

二〇〇五年五月三〇日

聞き手

「さねさし」会員

## 小島すみ詩集より

### 敗戦前後

足柄山麓、学童疎開の寺では

若い寮母が毎日出刃包丁を磨いでいた

相模湾から敵が上陸したら

自分ののどを突くために

ガソリンがないから車は走れない

馬方のおじさんもひっぱり出された

山の中の陣地構築に材木を運ぶために

偉い人たちはひそかに  
相模ダムをぶちこわし

県央を水浸しにする計画をたてていた  
敵の上陸を阻むために

逃げ場も隠れ場もない人々の

灯火管制で暗い夜

働き手を奪われた山里では

水車だけが回っていた

そして静かになった空に

赤トンボが飛び交うころ

軍がトンネルにしまっておいた

缶詰や木綿糸が放出され

「欲しがりません、勝つまでは」と

飢えに耐えていた国民を啞然とさせた

(ポケット詩集 2 押し車より 一九九五年九月)

高梁の記憶

こうりやん

実家に帰ってきた娘と

久しぶりで土手を歩く

紅いすかんぼの花が咲いている

ザラザラした粒状の花を折とって

何か思い出すーと首をかしげていたが

そうだ、コーリヤンに似ているのだと

あの戦争で疎開したころ

米が買えなくて持たせたコーリヤンの弁当

「おまえんちは毎日赤飯かよ」

とからかわれて泣いた娘

孫も若者になった今

海外派兵などマツピラだが

国会ではPKO法案を通そうと躍起な人々

牛馬の餌になる

コーリヤンなど食べたことないんだろう

（ポケット詩集「鳩笛」より 一九九三年四月）

## 余話

### 「敗戦で女たちが得たもの」を読んで

まつもと あつこ  
松本 渥子

今、改めて読んでみて母の力強さを感じています。わたしが学校で学んだ歴史を、母は自力で勉強していました。現在では当たり前のように取り沙汰されている女性の権利や、ジェンダーの問題なども敗戦後の日本が得られた大事な事柄ですね。娘の立場から言えば、これだけの文を書けた母を誇りに思っています。

当時の女学校で終わった母ですが、大学へ行きたかったようです。でも両親との縁が薄かったので諦めたんですね。女性もこれからは専門職について、夫に何かあっても生きていけるようにと、わたしたち三姉妹を厚木高校、さらに大学へと進学させてくれたわけです。

とにかく勉強の意欲が強かった母は、カナオのことも詳しく調べに国会図書館まで行ったそうです。行動力があつたんです。さらには図書館の司書の資格を得ようと鶴見女子大まで通ったようです。父と結婚してからも子育ての合間に小説を書いたり、地域の問題にも取り組んだりしていました。わたしと違って決断力、行動力があつたので、父とはよく口げんかをしました。

父の戒名も「文翁喜永信士」と覚えやすく、母のおかげです。わたしは母のような文才はなくて不肖の子ですが、お墓は守っていきます。

# メッセージは平和

うちやま よしこ  
内山 良子

「さねさし」会員のなかで学童疎開を体験した人は内山良子さんひとりです。平和への熱いメッセージを二〇一四年に聞いていました。ご子息、順造氏のご協力もあり、掲載させていただきます。

(「さねさし」記)

厚木での生活は、約半世紀になりました。戦争がわたしの人生八〇年の一番大きなショックだったんですよ。だから疎開のことなどを話したいと思いました。

最大のつらい思い出は戦争です。川崎、横浜、東京は大変な爆撃にやられたのに、横須賀は何も被害はなかったんです。きつとアメリカは横須賀を上陸後、利用しようとしていたのかもしれないと思いますね。わたしの育った上町うわまちのあの商店街も、今もあのままです。当時の子どもたち、暗い青春を過ごした青年たち、あんな日々は二度と体験したくないです。でも運よく今まで生きてこられた。せめて戦争で命を落とした人たちの声と同じ体験をして生き残ったわたしたちが大きな反省の声として残していかなければならないと思うんです。一度しかない人生を戦争で奪われないようにと叫びたいですね。



一九三四（昭和九）年  
二月三日  
横須賀市上町生まれ  
厚木市愛甲在住

## 海軍の町、横須賀生まれ

生まれは、昭和九年二月三日。出生地は横須賀市上町。うちは酒屋なんですよ。父は荒井英蔵えいぞう、母は千代。わたしは四人きょうだいの長女。妹と二人の弟がいます。弟が三代目ね。米穀酒類商っていうのが正式な名前なんです。今はどうか分らないけどその頃はね、お米もお酒も普通のところでは売れなかつたんです。免許が必要でした。

小学校は、豊島としま小学校。横須賀は海軍の町でね、海軍の大將、中將もいて、その家族が住んでいたから子どもたちはみんな優秀でした。昭和一五年に入学。二月三日生まれだから、入学するときは八年生まれといっしょでした。クラスはたくさんあったので何クラスくらいあったか覚えていません。入学してすぐ戦争になったので、すぐばらばらに疎開することになりました。

## 大本営発表

ラジオから「臨時ニュースを申し上げます。大本営陸海軍部、一二月八日午前六時発表。帝国陸海軍は今八日未明、西太平洋においてアメリカ、イギリス軍と、戦闘状態に入れり」とアナウンサーの興奮した声の流れ、軍艦マーチの威勢のいい曲が同時に響いたんです。そのとき、近所の人々が道路に飛び出してきて「万歳、万歳」って叫んでいた。昭和一六年一二月八日の朝、突然の放送で、国民学校二年生だったわ

### 米穀酒類商

一九四二(昭和一七)年、食糧管理法が制定され、酒造米は配給制となった。四九(昭和二四)年、酒類の配給制が解かれ、酒類販売の自由化がなされた。

### 豊島小学校

一八七三(明治六)年、教育令に基づき寺子屋だった公郷村浄蓮寺本堂を公郷村学舎として開校。

たしは、算笥の上に置かれたラジオにしがみついて父や母と聞いたのを鮮明に覚えて  
います。あちらこちらから提灯行列の人の波が続いた。そうこうしているうちに、そ  
の三か月後、昭和一七年三月に三七歳の父にも赤紙（召集令状）が来たんです。父は  
すべての仕事を絶って、七日後の朝、町内の人たちの日の丸の小旗の波に見送られて  
出征しました。町内会長さんの送別の言葉のあと、父は「銃後をよろしくお願いま  
す。あとを頼みます」と挨拶した。母とわたし、妹や弟も横に並んでぞろぞろと町内  
の人と行列して横須賀駅の近くにあった海兵団の入り口まで送ったんです。

その後、<sup>ひみつり</sup>秘密裡に父たち出征兵士たちは戦地に赴いたんです。あとで、父から手紙  
が届いて、母は手紙の黒塗りにされていたところを電燈にかざして「ニューギニア  
マノカリ」と読み取ったから分かりました。すぐに地図を開いて調べました。カンガ  
ルーの座っているような姿のパプアニューギニア、あの頭のあたりにマノカリがあっ  
た、一年後、帰国して内地に戻り、終戦のときの任地は北海道でした。父はつらい苦  
しい話は、いっさいしなかった。上陸したパプアニューギニアでは、現地人と撮った  
写真もあつたくらいでした。戦況が悪くなつて残った兵士たちはみな玉碎<sup>たまつぶ</sup>したそう  
です。

## 学童疎開

昭和一九年、わたしは国民学校五年生になりました。ある日、担任の先生が「今日

パプアニューギニア



## 学童疎開

一九四四（昭和一九）年七月か  
ら東京都（二〇万人） 神奈川県  
横浜市（二万四九〇〇人） 川崎  
市（八一〇〇人） 横須賀市（七  
〇〇〇人）の児童が、学童疎開  
をした。

は、大事な話をします」と言つて、黒板に縁故疎開組、集団疎開組、残留組つて書いて「みんなのなかで、田舎に親戚のある人は手をあげて。いまに爆弾が落とされて、将来の大事なあなたたち子どもが死んでしまう。だからいまのうちに田舎に移つてしまわないと日本は滅びてしまうんです。みんなどこかに分かれて疎開するように決まりました。家に帰つて、どうするかすぐにお母さんと相談してください」つて言われました。わたしは遠足に行くよううきうきした気分です。家に帰つたのを覚えていました。一か月くらいの中に、みな疎開先を決めて、学校は一、二年生だけが残つたんです。わたしの疎開先は、遠い親戚の秦野に決まりました。

前もつて柳行李一つに衣類をつめ込んで、チツキで送つておきました。駅に着くと田舎のおじさんがリヤカーに行李を乗せ、母とわたしと三人で一里の道を歩きました。おじさんとはそのとき初対面だったし、田舎の家も初めてでした。家に着くとすぐ、母と北秦野小学校に行きました。教室ではちょうど音楽の時間で、先生のオルガンに合わせて、「揚子江」の歌を歌っていました。今でもこの歌は悲しく聞こえます。先生の紹介で教壇に立つて挨拶しました。

それから、「じゃあ、お母さんは帰るからね、おじさんやおばさんの言うことをよく聞いてね」と言う母の言葉に「えっ、もう帰っちゃうの」。分かっているつもりでも悲しくなって泣き出しそうでした。「五年生だから」とか、「おねえさんでしょう」といつも長女として母に言われているので、涙をぐつとこらえました。さつき来た一本道を母は振り返り立ち止まり、手を振つて、だんだんと小さくなつたんです。わたしはずつと立っていて涙で見えなくなつて我に返つておばさんの家に帰りました。

チツキ

陸海の運輸業者による「託送手荷物」のうち、鉄道による手荷物輸送、またはその手荷物のことである。出発駅で切符を見せ、荷物を預け、到着駅で荷物を受け取る。

### 「揚子江」の歌

国民学校三年生唱歌

作者・作曲不明

水は揚々流は洋々、

わたつみか岸辺も見えず

その流れ昼夜を……。

横須賀の学校に通っていたようにスカートで通学したら、「町っ子、町っ子」って通学の往復に男の子に石を投げつけられました。先生に泣きながら話すと、母に手紙を書いてくださったようで、数日後に、母の銘仙の紺色の着物がわたしのもんぺになつて届いたんです。それを着て学校に行ったら、「やつと田舎の子になつたね」って先生に言われてホツとしたのを覚えています。

## からむしと大豆

疎開生活に慣れてきた頃、今思えば日本の戦況は負けの方向になつてたんでしょね。硫黄島玉砕の放送で、教室では硫黄島の地図を描くという宿題や、からむしを山から採ってくるという宿題がありました。からむしの繊維が当時は、落下傘の紐に使われるからと言われていました。山に入ってもすべて男の子が採ってしまったんですよ。でもね、知恵をしぼって、「わたしが硫黄島の地図を描くから、からむしを採ってきて」と交換条件を出したのよ。そして朝、起きたら田舎の家の前庭にからむしの束がいくつも積んであったんです。その分、地図は何枚も描きました。

昭和二〇年の四月、妹も三年生になつて、疎開をしなければならなくなつた。近所の友だちといっしょに集団疎開組に入つて疎開先は寒川だったんです。この年は、わたしの家族は四つに分断されて、母は横須賀で祖母や弟と、父は軍隊で北海道に、わたしは秦野、妹は寒川と別れ別れでした。秦野と寒川はあまり離れていないけれど、

からむし

山野に自生するイラクサ科の多年草。茎の皮から丈夫で弾力性のある繊維をとる。

硫黄島 (話者の手描き)



その頃は遠いところに思えました。母はその頃、妊娠中で大きなお腹をかかえていて、わたしのいた秦野までは、ときどき面会に来てくれました。夏の暑い日に、あの一里の道をとぼとぼと歩いてきてくれたのかと思つたら、あの母のもんべ姿が浮かんで今でも胸がキューンとなるんです。

ある日、秦野のおじさんに寒川に連れて行ってもらつたんです。妹に面会するためだったの。帰りに駅で妹が小さな手に大豆を二、三粒握つてわたしに、そつとくれたのよ。「おねえちゃん、これ、わたし食べないでおねえちゃんにあげようと思つて」と言つて。手に握らされたまま、わたしは思つた。こんなに食べる物がないのかしらとね。わたしは田舎の家だったから山盛りでざるいっぱい蒸かしたさつまいもが、いつも囲炉裏の横に置かれていました。毎日のお弁当は梅干しだけなのよ。麦飯ですよ。でもお弁当を持つて行けるだけでもありがたかつた。

申し訳ないけど、食べきれなくてお便所に捨てたことがあるの。残すと叱られると思つてね。そしたらあの頃は汲み取りでしょう。おじさんに「誰だ、便所にめしを捨てたの」って言われたのを強烈に記憶しています。お便所だったら分からないと思つたんです。外に捨てて知恵がなかつた。

卵なんか、一度も食べたことがないつて言つたら、母がいつものときより増して生活費をおじさんに届けてくれた。母が持つてきてくれた小瓶のブルドックソースが、みんな田舎の家族のおかずだったんです。たらたらとちよつとご飯にかけて美味しかった。お互いにぼたぼたかけないように「少しずつだよ」と見つめ合つたことがあります。ましたね、今では貴重な思い出です。

### 硫黄島玉砕

一九四五（昭和二〇）年二月、太平洋に浮かぶ小さな火山島硫黄島で、アメリカ海兵隊六万人、日本軍守備隊二万一〇〇〇人が激突した。五日間で占領できるとふんだ米軍に対し、日本軍は激しく抵抗、戦いは一か月以上続いた後、日本軍は全滅。米軍は太平洋戦争以来最悪の、二万八〇〇〇人の死傷者を出した。

補給もないまま戦つた日本軍は、持久戦の果てに悲壮な最期を遂げ、硫黄島は玉砕の島となった。地下壕に充満した飢えと乾き、玉砕の美名に隠れた現実。二万一〇〇〇人のうち、生還したのはわずか一〇〇〇人だった。

## 玉音放送

昭和二〇年八月一日、「天皇陛下のお言葉がある」と伝言が回りました。田舎の家の前の道路で、その真んかに台を置き、一台のラジオが置かれて、近所の人が集まりました。ガーガーしてよく内容は聞き取れなかったけど、おじさんたちが「負けた、負けた、戦争は負けた」と叫んだり、わあっと泣き出したりして。わたしも悲しい顔だけをしていたんだけど、心のなかでは「やった、うちに帰れる」と、とび上がりたい気分を抑えて、おばさんと家に戻りました。そのときのおばさんの冷めた言葉は「みんな泣いているけどさ、明日からまた生きていくんだべえ、だったら畑のことをやんなきゃ」と、さつさと一人家に向かった。そのときは、みんなに悪い気もしたけれど、わたしもおばさんに付いて行っただけです。

八月の末になって、父は幸いにも復員していて、わたしを迎えに来てくれました。自転車にリヤカーをつけて、わたしと荷物を乗せて秦野から横須賀まで自転車をこいで帰ったんです。そして一週間くらいしてから集団疎開組の妹たちがぞろぞろと衣笠駅に帰って来ました。駅前で見童たちの頭髪のシラミを殺すため立っている上からDDTを浴びせられたんです。

とにかくこの戦争は終わった。その後も、食糧不足は続きました。横須賀には、今までの海兵団のあとに、進駐軍がぞろぞろと上陸してきました。子どもたちは「ギブミーチョコ、ギブミーガム」と手を出したりしていました。戦後の横須賀はほかの地域とは、異なった風景になりました。「英文を書きます」とか「翻訳します」という

### DDT

戦争直後の衛生状況の悪い時代、アメリカ軍が持ち込んだDDTによる、シラミなどの防疫対策として初めて用いられた。外地からの引揚者や、一般の見童の頭髪に薬剤（粉状）を浴びせる防除風景は、ニュース映画として配給された。

紙がどぶ板通りにあちこちと貼ってあったんです。アメリカ兵と歩いている女性も「パンパン」と言われたりしたけど、母はわたしに「よっちゃん、あの女の人のなかには、戦地で夫を亡くして乳飲み子を抱えている戦争未亡人もいてね、生活が大変なのよ。戦争の犠牲者なんだからね」と。

海兵団のあった汐入の町は大きく変貌しました。上町のわたしの家の店にも進駐軍が休日にとろとろやってきました。お店に出ないようにと娘たちはみな言われたんですよ。ところが父はお店に米兵がやってくると、わたしに英語で話して「あらんとそばで言っていました。わたしは怖くて奥に入っていて出たくなかったです。でも戦時中、鬼畜米英と教え込まれたけれど、みんな優しい普通の青年やおじさんでした。

近所の人のなかには、子どものお雛様をアメリカ兵に高い値段で売ったという人が何人もいたようです。祖母は「うちにはない」と言っておきませんでした。だから八〇年前の七段の雛は今もこの家に持って来て大事にとつてあります。

### 大津高等女学校から青山学院へ

横須賀に戻ってきたのが六年生の夏でした。翌年、神奈川県立大津高等女学校へ入りました。

母も大津を出ているから、進路希望を書くとき、第二志望、第三志望って書くでしょう。「第二も大津って書くの」「第三も大津って書くの」って言われたの。自分が出

#### どぶ板通り

横須賀市中心部にある全長三〇〇メートルほどの通り・商店街である。第二次大戦前、この通りには道の中央にどぶ川が流れていたが、人やクルマの通行の邪魔になるため海軍工廠より厚い鉄板を提供してもらい、どぶ川に蓋をしたことから「どぶ板通り」と呼ばれるようになった。

#### パンパン

戦後、進駐軍の兵士を相手にした街娼。語源未詳。

#### 鬼畜米英

太平洋戦争中に、アメリカとイギリスを敵視し鬼畜米英と呼び蔑視していた。

たところ、絶対に行つてほしかったんでしよう。

二七年四月に青山学院へ。ヒアリングの試験でね、「Who is the prime minister of Japan?」が最初の質問で、「Mr. Shigeru Yoshida is.」って書いたのを覚えています。吉田茂首相の時代でした。わたしは教会に行つていたから聴き取れたと思います。ただ英語を聴くために。神父様の英語をね。天津高校のそばにカトリック天津教会があったんです。生まれて初めて外国人の英語を聴くのがあそこだったんです。終戦直後でしたから。

## 商人の娘で

わたしの家は荒井商店で、屋号はまるい屋といひます。結婚の理想はしもた屋で、玄関入つて「ただいま」って言いたかつたんです。お店のところから入るしかないでしょう。そうするとお店はお客さんが来ているから、わたしがつつつて入つていくと母に叱られてね「いらつしやいませ」って言うのが嫌だったんです。それで、電信柱の陰に隠れて、お客さんが帰るまでそこでぶらぶらして、いなくなったのを見計らつて「ただいま」って帰つていくの。妹はすうつと挨拶して入つていくの。愛想がよかつたし商人向きだったから手伝いはよくやつていました。

戦争中はお酒やお米もみんな配給制度だったんです。一番困つたのはね、お塩がなかつた。マツチとお塩がね。考えられないでしょう。マツチ一本が大事だったの。

近くにほかの酒屋はあるのよ。池之端つていう通りには、ここにも、ここにもつて

## 青山学院

一八七四(明治七)年に創設されたプロテスタント・メソジスト派の学園。一九二七(昭和二)年女子系と男子系の学校が合同し、現在の青山学院の土台が作られた。

いうくらい酒屋があつたの。もうほんとうにお客さんとの大変でした。

戦争が終わって、進駐軍が来るようになって、お客さんも変わっちゃつたんです。ところが、うちの父は、とにかく今までは大して売れなかつたのが、料亭小松から毎日、「ビールお願いします」って注文があつた。自転車の後ろにリヤカーをつけて父が配達しました。ひと月に一回、母が夜、その集金に行くんです。進駐軍のお陰で商売が順調になつたんですね。

## 父の父

父は戦争中ですら、「良子、こんな戦争はやっちゃだめだよ。日本は資源というものがなかったので、それを取ろうとして戦争が起るんだけど、話し合いをすればこんなことにならなかつた。大勢人が死んじゃうんだよ」。わたしは「お父さんそんなこと言つたら憲兵が来るから、言つちやだめ」って父の口を押えたことがあるんです。父はね、海軍の一兵卒でも、大正時代に遠洋航海に行ったことがありました。海軍は訓練として世界をずっと廻るんですよ。それはすごい教育なんです。船の上で毎日、ガリ版刷りの新聞が出るでしょ、父はね、きちんとしていたから全部とつてあつたんです。

父は海軍が終わって、酒問屋さんに勤めました。おじいさん（母の父）が、あんな真面目な男はないと、推薦してお婿さんに入つたそうです。あの通りでも有名な働き者でね。それでね、勉強でもなんでもずっとわたしを見ていてくれました。大津女学

### 料亭小松

一八八五（明治一八）年創業。横須賀海軍の将校たちが常連だったことから「海軍料亭」と言われていた。二〇一六年火災により全焼。

父と歌舞伎座前で



校を受けるときなんかは、朝、起きると全部新聞を開いて、「この字とこの字は同じ読み方だけど、違う」なんて熱心に教えてくれました。「これからは世界を見なきゃいけない」って言うてました。「日本のこんな考え方じゃだめだ」ってね。分かる人は分かっていたんですね、あの戦争。ニューギニアに行つて帰つてきたけど、「こんな戦争していたら、日本はだめになっちゃう」。女学校を卒業する頃になつて「これからは英語だ」って、父が誘導していた感じですよ。

青山を出てから清泉女学院の先生になりました。ほんとうは英語を教えたかったんだけど、教員になつて最初から五、六年を受け持つたんです。マドレーに「あなたならできます」って言われました。

でも英語を教えようと思ひ、学校から帰つてくると二階に座卓を置いて、一人二人つて教えていました。個人レッスンつていつてね。英語にこだわっていたんです。清泉には四年ほど勤めました。

## 結婚と子育て

主人は昭和三年一月一日生まれ。名前は内山剛一こういち。結婚は知り合いの人の紹介でした。足立原茂徳さんが仲人でした。主人は、あの頃は伊勢原高校の教員でした。

結婚式は昭和三七年二月一日。昔で言えば、紀元節。披露宴は横須賀の料亭小松でした。母と小松のおかみさんは大津高女で親友でしたので、母がそこでやつてもらいたいつて言ったんです。

### 清泉女学院

一九四七（昭和二二）年、横須賀清泉女学院小学校開校。五三（昭和二八）年、鎌倉清泉女学院小学校開校。六三（昭和三八）年、合併された。

### マドレー (madre)

スペイン語で母の意、スペイン系修道院の修道女で教師でもあった。

### 足立原茂徳

（一九二二—二〇〇二）  
「教育文化都市」を掲げて一九七九年から四期厚木市長を務める。

見合いするまで、わたしの周りは全部女性でしょ、お兄さんと歩いている人がうらやましかったんです。お兄さんがいたら、堂々といっしょに歩けるでしょ。男の人と歩いたことがないって言っても嘘だって言われるけれど、結婚してからはじめて男の人と歩いたわ。

主人は東京大学で国史学科卒ですが、厚木東高等学校の先生になって、英語を教えています。一年しないうちに県の教育センターに転勤。神奈川県史の資料調べをしていて神奈川県史に名前が載っています。

本人はね、教えるほうが好きでした。次に秦野高校に行きました。英語を教えても帰ってくると歴史ばかりやっていた。ほんとうは歴史を教えたかったんでしょね。

長男、順造はね、三七年一月に生まれ。今、五二歳です。その次が女の子の双子。母がね、「うちには双子なんかいない」、そう言われて涙が出たことを覚えている。変な話だけど、その当時、トイレは和式しかなかったので、大きなお腹ではしゃがめないの。ビールの箱があるじゃない、あそこの真んなかを開けておいて、そこに座らないとだめだった。夜なんか、主人は寝ているんだけど、わたしは座椅子に座って寝ていました。

## 姑、貞子のこと

おばあちゃんが「剛ちゃんは、ほんとうに生きていてよかった」って言ってました。

というのは、予科練で戦争にとられた人がいたけど、ちよっと年下だったから、それ



結婚式

は免れました。東京は、ものすごい火の粉を浴びたような焼夷弾が落ちてみんな逃げ  
るんだけど、男の人なんかいないでしょう、剛ちゃんは、鉾石ラジオで聞いて、「こ  
っちだよ、こっちだよ」ってみんな助けたんだって。本人は言わないんだけど、おば  
あちゃんが「あれがいなかったらわたしたちみんな死んでいた。剛ちゃんのお陰で助  
けられた。文京区には住んでいても逃げられたから今があるのよ」と。

おばあちゃんは、文京区で小学校の先生していました。袴をはいて学校に行ったと  
聞いています。恩給があるでしょう。生活費が足りないときは、よくもらいました。  
おばあちゃんは八八歳まで生きて、昭和五年七月六日に亡くなりました。グチグチ  
言わない人だけど、「大変でございますね」って言って。わたしが出かけるときに「寝  
ている子ども見せて」って言うのと見てくれ、「このミルクをあげて」って言うのと、ミ  
ルクあげてくれました。男の子二人だったから男っぽい人だったわね。

おばあちゃんは市川房枝に似ているの。ご飯でもなんでも「おいしゅうございまし  
たよ」って。何にも言わないし、わたしが、主人にうるさく言っても「そんなこと言  
うんじゃない」なんて言わないでね、「ほんとうに剛ちゃんはね」って息子をたしな  
めるのよ。耳がちよつと聞こえなかったからね。寝た振りしたときもあつたかなあつ  
て今になって思うの。

あるときテレビ局の人が来て、「小川宏ショーに出てください」と言われました。  
家族は、その日のテレビにくぎ付けでした。何を言うのかしらと、ハラハラしていま  
した。雛壇には大勢の人が並んで座っていました。おばあちゃんは、その前にアナウ  
ンサーと向き合っているんです。おばあちゃんは「今の政治は」と政治について語っ

#### 市川房枝

(一八九三—一九八二)

日本の婦人運動家、政治家。参  
議院議員。戦前と戦後にわた  
って、日本女性の政治参加の運  
動を主導した。

たのです。新聞の投稿覧に記事が載って、それが取り上げられたからです。

## 主人との別れ・そのち

定年退職間際、主人のからだに癌が見つかりました。腎臓癌でした。学校からつらそうにやつと歩いて帰って来る姿が今も焼きついていきます。息子が「今だったらこんなとつくに分かった」って言うんです。医学部の入学式には主人が出席しましたが、卒業式には、もういませんでした。

平成二年三月六日に六二歳で亡くなりました。自宅でお葬式のととき、息子の友人がぞろぞろみんな来てくれたんです。最近「親父生きていたらなあ」って、ひとり言を言ってます。

あの頃は、まだどこでも自宅での葬儀でした。本人の望みでヴェートーベンの交響曲第六番「田園」を流したんです。

あれから二五年、三人の子どもたちは、それぞれ独立、結婚と続きます。息子は現在、わたしの家の近くで内科医院を開業しています。二人の娘たちは英語、中国語を専攻し、卒業後、ロンドン、北京に留学。そこで伴侶に出会い結婚しました。娘たちは最初のお産のときには帰国しましたが、それ以後は、わたしのほうが、その都度一か月くらい手伝いに行きました。北京、ヴァージニア、ロンドン郊外、モナコと。中国語、英語圏そしてフランス語圏でした。孫の学校の送り迎え、買い物など言葉の緊張はありましたが、必要に迫られての体験はツアーでは味わえない貴重な体験をさせ



子どもたちが祝ってくれた  
銀婚式

てもらえたと思っています。

主人が亡くなってから、三人の子どもの体験は、結婚、出産とおめでたいことばかりなのに主人には見てもみえず、わたし一人独占でした。

## 平和を

現在、孫たちは全部で八人になりました。アメリカの孫は七人です。ワシントンDCの郊外に住んでいます。二〇一四年四月、二人の娘が日本に来てくれて親族たちと一泊旅行をして、みんなでわたしの傘寿を祝ってくれました。娘たちが帰国するときに、わたしを連れて帰りアメリカの二人の娘の家に一か月間滞在して、そのとき、孫たちからもお祝いを受けました。大きくなった孫たちに空港で見送られて、帰国してすぐに仏壇に手を合わせて主人に報告しています。平和であればこそと思います。

今まで振り返ってつらかったことは戦争中の疎開ですね、たった一年だけど胸がきゆうんとするの。だから今、戦争をしている国の子どもの話を聞くとかわいそうだなあつて涙が出るんです。

頑張つて生きてきて、ほんとうに幸せです。戦争の体験だけが真つ黒です。

子どもや孫たちへのメッセージは「平和」です。幸せは自分の努力次第ですよ。あの一年間の生活は、子どもや孫には味わせたくないと思っている。

数年前、娘家族がモナコに住んでいたとき、孫がね、モナコの学校で先生が日本の戦争の話をしたんですって、「おばあちゃん、ボン（原爆）を落としたのはアメリカ



八〇歳を記念にアメリカへ娘家族と一緒

が日本に一番先に落としたんだってね。おばあちゃん大変だったね、おばあちゃんどうして死ななかつたの」って言うの。それから英文の『ガラスのうさぎ』をいっぱい買ってモナコに送りました。その先生から御札の手紙が届きました。

子どもたちになだって言うのよ。戦争なんか知らない若い先生を褒めたかったのよ。孫モナコで聞いたって言うのよ。戦争なんか知らない若い先生を褒めたかったのよ。孫にとっても、戦争の話は印象深かったようです。江刺先生もよく言われるけれど、体験できないけれども想像してもらおうしかありません。

『ガラスのうさぎ』

児童文学作家・高木敏子によるノンフィクション文学である。作者自身の経験を元に執筆され、戦争で家族を失った少女を描いている。

聞き取り

二〇一四年八月二十九日

九月十九日

一〇月二二日

聞き手  
神谷 智子

## 余 話

一九九八年一二月、「地域を支えた女性たち」の講演会の後、内山さんの女性史の会へのお誘いで、わたしはお仲間に入れていただきました。「さねさし」の初代表として、「さねさし」の土台をしっかりと築いてくださいました。

内山良子さんは、横須賀で生まれましたが、結婚と同時に厚木市民になり、近隣の大勢の方々に英語を教えておられました。ご主人を見送られてから、厚木市の人権擁護委員を二五年間、務められました。

一九九五年に、北京の第四回世界女性会議に出席されてアフリカの女性と同室に泊まったこともあるそうです。

お話を聞かせていただいて分かったことですが、お父さまの気持ち、そしてお母さまの思いをしつかりと受け継いで生きてこられたように感じました。二人のお嬢さまも良子さんの思いを十分に受け継いでアメリカで生活しています。

戦争の頃の学童疎開は、忘れられない思い出で、その体験があるから、「平和」に対して人一倍強い思いを持っておられました。

九一歳になられた現在も、お元気にお過ごしでいらつしやいます。貴重な聞き取りをする機会に恵まれたことに感謝の気持ちでいっぱいです。

(神谷 智子)

# 北京女性会議に参加して

内山 良子

一九九五年九月、第四回世界女性会議に個人参加の内山良子さんが翌年、母校、県立大津高女（現、県立横須賀大津高校）の機関誌『越えて来た道』に寄稿された文章です。当時の会場の臨場感が伝わる貴重なものでしたので、紹介させていただきます。

（「さねさし」記）

「カアイシイー」（升始）という司会の女性の声が一きわ高く響きわたると、ざわめいていた五万収容の競技場は、しばし静寂に包まれた。私の両隣は、白髪も美しい英国の女性とモンゴルから来たという健康美溢れるにこやかな女性。インドやアフリカからとわかる民族衣装も目立つ。ここは北京のオリンピックピククスポーツセンター。

今、第四回国連世界女性会議NGO開幕の時間である。ベートーベン「第九」の調べがグラランドから観客席に響き互ると、肌も言葉も違う百五十以上の国から来た女性達が同じ興奮と感動に思わず皆総立ちとなり絹の白いハンカチを振り手を繋ぎ合いそして大きなうねりとなって競技場は熱気に包まれていった。自治体から派遣されたり、JTBにお任せの団体が多い中で、私は全くの個人参加を試みた。早々とニューヨークと北京へ直接申し込んだが、最近の米中関係冷却化のためか、両国の事務手続きに手間どりビザを取得したのは出発二日前であった。北京での入場券も現地での事務方との押し問答の末、やっと入手できただけに、「遂に来たぞ！」という思いは格別だった。

北京二週間の滞在中、現地のテレビはこぞって「抗日战胜（戦勝）五十年」を記念して当時の生々しい戦争映画や劇などを一日中放映していた。日本兵役の「バカヤロー」「ヨーシ」等荒っぽい日本語が耳に残る。若者達に徹底して伝えようという意図ではあるが、北京で、今あの戦争を見るとは複雑な思いだった。

終戦のあの日、私は縁故疎開の神奈川県秦野で「玉音」を聞いた。六年生の夏だった。父はニューギニアの戦地に、祖母、母、二人の弟達は横須賀に残り、三年生の妹は集団疎開で寒川にいた。「戦争に負けた」と大人達が泣く中で、私は「うちに帰れる！」といううれしさを密かにかみしめた日であった。食糧すらままならぬ翌年の四月、母の使い古しの黒布のズック靴に墨を塗って履いていた横須賀高女の入学式だったが「民主主義」が高らかに叫ばれ、全ての指標となり、昨日までとは、打って変わった明るい未来に、乙女の胸はときめいていた。初めての婦人参政権で、近くの小学校へ投票に行く母について行ったのもこの頃だったか。

あれから五十年、母達の時代に比べ私たちはともかくも平和の中に生きてこられた。しかし今回いくつかのテントを廻り、世界各地からの、実に率直で切実な生の声を多く聞くうちに、我々そしてアジアの人々も経験した戦争の悲劇は今でも消えていないと実感すると共に、地球環境のような人類生存に直接結びつく深刻な問題を解決する鍵は、女性が握っている！という思いを強くした。そして子育ても終り、社会へ、地球へと目を向ける余裕もでき経験も豊かな我々と同年代の女性達に特にパワーを感じたことも頼もしい限りであった。

## 魂の記憶を伝えること

うちやま じゅんぞう  
内山 順造

時は二〇二三年新春、世界はまだ、新型コロナウイルスによるパンデミックの中にいる。医師として発熱外来を開いている私は、三年ぶり、行動制限なしの年末年始の第八波感染流行で、湧いて出るような発熱患者の診療に忙殺されている。感染による死亡者は過去最高を記録しているが、世界の雰囲気は「見て見ぬふり」だ。理性よりもパンデミック疲れの雰囲気政策を決めている気がしてならない。亡くなる方は昭和ひとけたで第二次世界大戦の記憶をとどめる世代が世界から消えようとしている。先の見えない診療の合間に、母・内山良子を訪ねると、彼女は笑顔で良くしゃべり私を和ませてくれる。あとひと月で八九歳だ。この笑顔が消えてほしくない。

昨年の初頭に始まったロシア・プーチンによる余りにも常軌を逸した残忍なウクライナへの武力侵略は、世界で国家間の猜疑心を高めている。日本の首相は、軍事費倍増のための増税を空前の不景気、世界的競争力低下の中で公言する。母が敬愛し同世代である黒柳徹子さんのテレビ番組で「来年はどんな年になるでしょう」の質問にタモリさんが思わず「新しい戦前になるんじゃないでしょうか」と答えたが、杞憂に終わってほしい。

私は一九六二年生まれ、高度成長期の申し子で日本での戦争体験は無いが米国での戦争体験がある。

ボストンに博士留学中、米国で始まったイラク戦争の開戦前夜を経験した。二〇〇一年のとても日差しが強い晴天の夏の朝、私が顕微鏡を覗いている最中にボストンから飛び立った航空機がニューヨークの貿易センタービルに激突しビルが崩壊した。立ち上がれなくなるような衝撃だった。それから自由の国米国のすべてが変わっていった。悪の枢軸、テロ国家、大量破壊兵器の言葉が独り歩きし、「撃つべし」がいつの間にかマスコミの論調に変わっていった。「戦争は絶対だめだ」の私の信念の核心には、母の体験談があった。

私は目を瞑ると情景が浮かぶ。灯火管制で窓ガラスにはバツテンが張られている。ちゃぶ台の上の裸電球にも覆いの布が掛かっている。私の祖母・千代のはがきをその明かりに透かして検閲で黒塗りされた戦地、祖父からのハガキの文字を解説している。祖母の手を下から覗き込んでいるのは小学校高学年の母とちびっこ弟の正義おじさんだ。「マノクワリ、って読めるね」出征を横須賀駅で見送って以来、母が大好きだったお父さん、英蔵の居場所がニューギニア島と初めて知れた瞬間だ。この場面を私は母から何度も聞いていたうちに、そこにいたような生々しい実体験として私の脳裏に刻まれている。

もう一つ鮮明な映像。それは集団疎開の小学校低学年の妹を母が訪ねた時の事。寒川の田舎の田圃道を母が帰る。別れ際にやせ細った妹・孝子おばちゃんが走り寄ってきて姉である母の手に何かを握らせる。孝子おばちゃんが、自分のおやつのお豆の豆粒をお姉ちゃんのために取っておいて渡したのだ。私には小さい子供の手に握られてふやけた豆がどんなに愛おしい味だったか解るのだ。

ボストンで留学生の間で、イラク戦争開戦の是非について研究の合間の実験室ラウンジで議論にな

ったことを覚えてゐる。いつも笑顔で人気者のカナダ人のピーターは、私の「戦争はダメだ。」の言葉に、同情するような優しい気な眼差しで「順造、大丈夫だ。ピンポイント作戦だ。爆弾一個で、フセインが消えればお終いさ」と言った。「そんなことは絶対あり得ない」と断言する私。ずるずると戦争に巻き込まれていった母の鮮烈な記憶が私の中で有無を言わせなかった。結果、イラク戦争は八年にもおよび、大量破壊兵器は見つからず、両国で兵士だけで三万人以上の人が亡くなった。声高にピンポイント戦争を煽ったテレビコメンテーターは忘れたように仕事を続けている。

今、笑顔で私を癒してくれている母もいずれいなくなる。母の肉体と一緒に母が経験した喜び、怒り、淋しさ、慟哭、自由の解放感も消え去っていく。それは、世界中でこれまでも繰り返されてきたことで、今も世界で進行中だ。しかし、私の中に残る母から受け継いだ生き生きとした体験は私が消えるまでこの脳裏に残り、生きる原動力となってくれる。そして私も追体験した母の記憶を娘に伝えそして、世界に暮らす母の孫たちに生き生きと語って行こうと思う。魂が震えた瞬間を伝え続けること、これが我々にできるささやかではあるが、希望と勇氣に満ち溢れた作業ではないだろうか。

今、母も携わった歴史の中の体験を掘りおこし形にする「さねさし」の活動に対して心から敬意と感謝の思いを伝えずにはいられない。きっと、世界中でこの作業を弛まぬ努力と明るい希望を持って続けている人々がいると私は確信している。

(二〇二三年一月 記)

# 国破れて山河在り

いしい  
石井 はつ

わたしが小学校五年生の年は昭和二〇年で、八月一五日は終戦の日でした。その頃のことをお話しします。こちら辺でそのことを知っていて、今も話せる人はほとんどいません。

今になって思えば九月に学校に登校したら、先生がたが終戦を境にコロッと変わっていたことでした。当時はそのことを当たり前だと思っていた。ありがたいななんて思わないし、嫌とかも感じなかった。そういう風に仕向けちゃう教育、それは恐ろしいです。朝礼で勝利を報告していた先生が、戦後、GHQから指令が来ているからそれに従わないといけない、そんな時代でしたね。

わたしは大学卒業後、英語教師になりました。戦後受けた教育で、教科書に墨で塗ったこと、南毛利中学校の飯塚満夫先生の「国破れて山河在り」、また同じ南毛利中学校の池田泰三先生の優しさは忘れることができません。

一九三五（昭和一〇）年

三月一八日

厚木市生まれ

厚木市愛甲在住



GHQ

英語 General Headquarters 略

連合国軍最高司令官総司令部、

第二次世界大戦終結に伴うポ

ツダム宣言を執行するために

日本で占領政策を実施した連

合国軍機関。

## 妹は終戦の日に

戦争中は、祖母と両親と、きょうだい三人だった。わたしは長女で昭和一〇年生まれです。父が戦争に行っていたときに生まれたのが弟で昭和一三年生まれです。終戦の日に生まれたのが妹、昭和二〇年八月一五日生まれ。戦争が終わってから昭和二五年に下の弟が生まれました。

お産のときはとにかくお産婆さんが来るんです。自転車で来たのかなあ。自宅で出産です。産気づいてから厚高の下の、山下さんっていうお産婆さんを迎えに行きました。そこ一軒しかなかったの。みんなその人にお世話になりました。その人が来て生まれました。妹が生まれるとき、みんな母の側そばにいたの。産声も聞いたのよ。妹は木陰たらいの盥たいで産湯をつかつてね。

## 疎開の人のお弁当は

南毛利国民学校では、学級は男女で二クラスでした。その当時、都会から空襲をよけて、わたしたちの小学校にも疎開して来る人がいました。疎開の人は紹介されることもなく、近くで遊んでいると見たこともない人がいると、あの人は疎開の子かもしれないかと思っていたの。疎開の人はクラスに馴染めなかったみたいです。疎開の人は親戚の家うちを頼って来ていたようです。集団疎開ではなく縁故疎開です。馴じめない人

厚高 現、神奈川県立厚木高等学校

一九〇二年、県立第三中学校として設立される。一九一三年、県立厚木中学校、一九四八年、県立厚木高等学校となる。

南毛利国民学校(現、南毛利小学校)

一九四一年の国民学校令によって改組され一九四七年まで南毛利国民学校。

## 疎開

空襲、火災などによる被害を少なくするため、都会に集中している住民・工場などを地方に分散すること。学童疎開、縁故疎開など。

もいたけども、仲良くしていましたね。クラスに一〇人くらいいたんじゃないでしょうかね。終戦になって、たちまち帰つちやう人もいたし、ずっとこつちへ残っている人もいたみたいね。わたしたちは、前から住んでいた者なんだけれども疎開の人は食事が貧しいわけ、お弁当にサツマイモなんか持つてくる人が多いんです。わたしたちは農家だからご飯を持つていくの。先生からは、「サツマイモを持つてきている人もいるんだからサツマイモにしなさい」ってね。家に帰つて言うでしょう、そうすると「家にあるんだからいいんだ」って、また怒られちゃうの。そういうことありましたね。ほとんどが農家なんだからね。

### 児童の仕事など

世間の誰もがみんな勝つつもりでいたから、学校に行つても、朝礼のとき先生が「どこどこを占領しました」と言われたの。その間にわたしたちの仕事は、桑の木の皮剥き。農家が蚕を飼っていたから蚕から絹糸を獲るんです。それで兵隊さんの服を作っていたんです。桑の木の皮を剥くんです。簡単な道具を作つて剥くんです。繊維を集めて学校に持つていくの。だつて「何キロ持つて来なさい」って先生に言われたのよ。それが夏休み中の課題なの。

だから子どもたちがみんな集まつてね、桑の木がある農家に頼みに行くんです。「や

らせてください」ってね。桑の木の皮を取っちゃうと虫がつきやすいんです。だから農家は嫌がるの。皮剥いてもらっちゃ困るらしいの。だから「あその家は剥かしてもらえるよ」って。行く前に挟む道具を作るんです。皮を剥きやすいようにね。剥いた皮を学校に持っていくのね。木が古くなったとか、余裕がある家に行きました。

野原にはカラムシがあるでしょう、カラムシを何キロ持って来なさいってそういう宿題なの。カラムシも衣類にするんです。それからイナゴ、イナゴは食料にするんです。イナゴを干して持っていくの。その頃、勉強なんていくらしなかったね。戦争のときは勉強よりも作業をすることが多かったんです。

## 玉音放送

玉音放送は、隣り近所に一軒だけ、ラジオがある家があったの。そこへ聴きたい人だけ集まったの。その家には誰がいたかも覚えていないけども、廊下にみんな座って、ラジオを聴きました。その家はお勤めだったの。お勤めの人の家でなかったらラジオはなかったの。農家ではラジオないですよ。買う余裕もなかったんです。

その家には、わたしなんかよりちよっと上の娘さんがいて「聴きに来ていいよ」って言われてね。みんなお昼に行っただけです。わたしの家からは、わたし一人でしたけどね。

「ワーワー」言っているだけで放送内容は分からない。電波が悪かったんですね。

カラムシ

山野に自生するイラクサ科の多年草。茎の皮から丈夫で弾力性のある繊維をとって織物にする。

イナゴ

イナゴ科の昆虫、水田や湿地に夏から秋に多く見られ、稲などの害虫、佃煮などにして食べる。

玉音放送

一九四五年八月二五日正午、天皇が終戦の詔書を読んだラジオ放送。

誰か分からないけどどこかのおじさんが言ったんですね。「戦争が終わったらしいよ、日本は戦争に負けたらしいよ。北海道と本州と四国と九州とだけになってしまいうんだって」「日本の領土はこれだけになりました」っていうのを言ったんです。

聴いて家に帰って父親に言ったたら、「そんなことあるか」って言われてね。父親なんかぜんぜん信用しなかったですよ。わたしは天皇陛下からのお言葉があるらしいと聞いたから行ったんだけど、世間の人々は放送内容を信じられなかったようです。

### 教室では墨塗りを

戦争中は南毛利国民学校、今の南毛利小学校でした。その頃、男の人は戦争に行っていたから、男の先生が少なかったんです。代用教員っていつでも子どもたちには分からなかった。

「終戦だとよー」って言ってみんなが信用し始めるかどうかというときにマツカーサーが飛行機に乗って厚木飛行場に來たんです。九月になつて学校に行ったらね先生がピシツと変わつちやつて、「ここんとこ墨で塗りなさい」って言われて。黒板に書かれたのが、「父は戦争で戦地に行っています」なんて文章があるじゃない、そこんところを削つて、その横へ「父は転勤で、どこどこへ行っています」と書き直させられたんです。

わたしがしつかり覚えているのは、書き直させられたとき、習字の墨を磨る時間すもあつたの。磨りながら先生が黒板に書かれるのを待つていたの。

### 代用教員

戦前の小学校などに存在した。教員資格を持たない教員。

### 厚木飛行場

神奈川県綾瀬市と大和市にまたがる軍用飛行場で、アメリカ海軍と海上自衛隊が共同で使用している軍事基地。

一九四五年八月三〇日、ダグラス・マツカーサー連合軍総司令官の乗った輸送機「バターン号」が厚木飛行場に着陸。



厚木飛行場に降り立つ米軍

教科によって違うからね。国語がすごく印象に残っているの。「転勤で」っていうのはすっかり覚えてる。

だからね、わたしは今になって思うのね、先生がたがよくそんなにコロツと変わるかってね。それ慣らされたんでしょね。

朝礼で先生が、多分、教頭さんか誰だったかな、「日本は今、どこどこに攻撃しました」とかね。全部そういう話だったの。前は「勝っています」とかそういう話。それなのに九月になって学校へ行ったら「負けました」です。まあみんな静かに聞いていましたね。なんの疑問もなかったですよ。先生がたの声は、職員室でどうだったかは、わたしたちには聞こえてきませんからね。そういうときだったから、黒板に先生が書かれてそれを自分の教科書に「墨塗り」って言って、それだけはしっかり覚えていきます。

### 間借りしていた南毛利中学校

終戦は小学校五年生でした。六、三、三制になったから、すぐ六年で中学生になるんだけど、中学校の校舎っていうものがないですから、小学校にいるままで中学生になった。南毛利小学校で南毛利中学校として間借りをしていました。

厚木中学校に行った人もいました。わたしたちの先輩は厚木中学校へ通いました。わたしたちは南毛利中学校二期生。南毛利中学校は、南毛利村が近隣で一番先に中学校を作ってくれました。わたしたちは三年生の四月から新校舎に入りました。光が丘

つてところに校舎ができたの。光が丘つて校長先生が喜んでいましたね。

そこでは、机も椅子もない。校舎だけしかない。男の子も女の子も同じクラス。男の子はどこへ座るか、カバンをどこへ置くか、女の子はどこへ座るか、「学級会で話し合いなさい」って言うのね。そのときに「話し合い」っていうのが初めてあったの。これが学級会のステップです。それで窓側の半分が男、北側の半分、廊下側の半分が女。そこへカバンを置いて座って授業を受けました。

誰がどうしてそうなったんだか覚えていないんだけど、でも諸星先生っていう男の先生が担任だったの。「話し合い」って言ったの。みんな黙っていたの、そしたら、「話し合いもできないのか」って言われたのは覚えている。

あるとき、理科の先生がその先生は昔の青年師範、青年師範っていう学校があつて、そこを出た先生で、教員資格がある先生。その先生が自分のカバンを持って教室に来られたの。教卓へそのカバンを置いて、そのカバンの手が取れていたのを覚えてます。カバンを置いて、まず黒板に書かれたの。一番大きに書かれたのはね、「国破れて山河在り」。それがすごく印象に残っています。「これ、分かるか？」って言うの。それは飯塚満夫先生。そのときに先生は二、三歳でしょう。そのときに初めて教室へ来て、黒板にまず書かれたの。「国破れて山河在り」、いまだに覚えている。

わたしたちが英語を教わったのは大学生ですよ。だって英語を教える中学校の先生っていなかったのよ。敵の国の言葉なんつて、教える人がいないんだからね。野球でね、ストライクが、「良し」だったんですよ。「アウト」なんて言っちゃいけないんですよ。

国破れて山河在り

中国の詩人、杜甫の詩「春望」の一部、意味は

国は戦乱によってぼろぼろに破壊されつくしたが、山や川はもとの姿のまま存在している。

春望

国破山河在  
城春草木深  
感時花溅泪  
恨别鸟惊心  
烽火连三月  
家书抵万金  
白头搔更短  
浑欲不胜簪

国破れて山河在り

城春にして草木深し

時に感じて花にも涙を濺ぎ

別れを恨んで鳥にも心を驚かす

烽火三月に連なり

家書萬金に抵る

白頭搔いて更に短かし

渾べて簪に勝えざらんと欲す

すよ。

教室のなかで座って授業を受けているうちに机と椅子ができてきたの。今までは二人がけの机だったのが、一人ずつの机と椅子になったんです。

朝礼のとき、その机と椅子を一組持つてきて、校長先生がね、「これで五五〇円、大事に使いなさい」って言われたの。あの頃の五五〇円は高く感じました、それを先生が言いたかったんだと思います。しっかり覚えていきます。

そのころから部活動が始まって、バレーボールと、野球と。わたしはバレーボール部に入ったんですけど。野球はスパイクなんかないから裸足でした。

### 世田谷から買い出しに

その頃、農家は優勢だったんです。裕福だったの。農家にもたくさんの人が買い出しに来ましたよ。わたしの家にもたくさん来ました。食べ物があったからね。世田谷の人が来ていましたね。世田谷のおばさんが来て、買い出しで仕入れたものを向こうで闇市で売っているらしかった。捕まっ取られちゃうときもあつたようです。愛甲石田駅まで電車に来て、そこから歩いてね。

結局、物々交換だからね。帯だとか、着物だとか。けっこう長く買い出しは来ましたね。「また買い出しが来たね」なんて言ってるね。お米が大事ですからね。あとはカボチャだとかね。農家が楽に暮らせたのは何年くらい続いたかしら、そのうちにあちこち会社ができ始めました。

### 愛甲石田駅

一九二七年に開通した小田急線の駅。神奈川県厚木市と伊勢原市の境に位置していて、国道二四六号線沿いにある。

## アメリカ兵はニコニコして

厚木の町から県道をジープが走ってくる、おばあちゃんなんかは「絶対に近寄るんじゃないよ」って言うてね、「悪いことする奴らだから」って言うてね。だけど車を止めて降りてくるでしょう。向こうはガムをくれたりしてね、もらったのを見たことはありますね。ニコニコして来るよ。言うてることと違うじゃないの。ニコニコして砂利道を降りてくるの。初めの頃はアメリカ兵が来るって、「ヤンキーが来る」って言われていたのよ。みんな恐怖心だけだったのよ。付き合ってみたらそうではなかったっていうことです。アメリカ兵はニコニコとチュウインガムやチョコレートなんかをくれたりしていました。

## わたしが教師になるなんて

昔はね、農家の子女が先生になるなんていう時代ではなかったです。

その当時は、南毛利中学校から高校に進学する人はあまりいなかった。わたしの父もわたしを東校に進学させるつもりもなかったんですけど、中学の担任の池田泰三先生が高校への進学を勧めに家に来てくれたんです。先生が帰るときに、いっしょにあげ道を歩いたんです。

わたしが卒業するとき、先生が自分の写真の裏に短歌を書いてくれました。

「道草の穂草を指に絡ませてともに語りし進学のこと」

中学から東校に受かったときに、お祝いのお赤飯を差し上げたこともあります。

農家だから高校に行ってもどんな本を買ったらいいか分からないでしょう、そしたら先生が本を買って持ってきてくれました。ありがたかったです。

高校卒業まじかのことです。父が地域の会合に出たりして、わたしに「これからは英語が大事な世の中になるから英語を勉強しなさい」と言ったのです。わたしは慌てましたよ。自分の進路は多分、農業をやるんだろうと思っていましたから。父から大学まで指定されたんです。

大学卒業後、就職については会社も受けたんですが、他にも英語の教師の話があったんですね、それで南毛利中学校の英語の教師になりました。それから定年まで勤めあげました。

わたしが池田泰三先生から受けた教えは、わたしが教師になってから生徒に教える基本になりました。大変なこともありましたが、同僚の先生、保護者のかたがた、生徒からも勉強させていただきました。ありがたいことですね。

東校（現、神奈川県立厚木王子  
高等学校）

一九〇六年、愛甲郡立女子実  
業補習学校として開校、一九

五〇年県立厚木東高等学校、

二〇二四年厚木東高等学校と  
厚木商業高等学校の再編・統  
合により厚木王子高等学校。

石射はつは一九五三（昭和  
二八）年、県立厚木東高等学  
校を卒業。

聞き取り

二〇二三年九月一三日

二〇二四年三月二七日

五月二九日

聞き手

深沢 かをる

神谷 智子

## 余 話

二〇二三年の「さねさし」の定例会で、聞き書きをすることになり、その話者の候補に石射はつさんのお名前が挙がりました。はつさんは、わたしの家から近いということもあり、わたしが、はつさんにお願いのお電話をしたところ、「この地域のことでしたら、お話しできる方が少なくなってきたので、わたしでよろしければお話しさせていただきます」と快く受けてくださいました。

定年まで教職を勤め上げ、今もお元気で楽しく有意義に生活しておられる姿、学ばせていただくことが多いです。ありがとうございます。

(深沢 かをる)

石射はつさんは「さねさし」の第四集『あつぎの女性―愛甲郡女子青年団のあゆみと聞き書き』(二〇二〇年刊行)の聞き書きの話者、有賀綾子さんの先輩です。石射はつさんを尊敬していらつしやるということをお聞きできましたらと思いました。是非とも、はつさんから戦争の頃の厚木の学校の様子などをお聞きできたらと思いました。

当時の厚木のことは何も知りませんでしたので、はつさんのお話に、まるで映画を見ているように引き込まれてしまいました。

二十五周年記念の本が、前回刊行した本の聞き書きの話者から続いていること、とても不思議な縁を感じました。有賀綾子さん、石射はつさんに感謝の気持ちでいっぱいです。

(神谷 智子)

# 養徳寺と疎開児童

とりやま ようこ  
鳥山 洋子

わたしは五人きょうだいの下から二番目でね、生まれたのは昭和一七年です。現在は厚木市三田に住んでいます。母のヲヨとは晩年の六年間、いっしょに暮らしました。両親がこの荻野村（現、厚木市中荻野）の養徳寺に越してきたのは、はつきり分かりませんが姉が生まれたのが昭和三年ですから、その前、昭和の初期ですね。

父は山内法嶽という僧侶で、母はヲヨといいます。父はここへ来る前、長野の上松にある玉林院というお寺で修業していました。その後、無住だったここ養徳寺へ来ました。ただここで住職をするだけでは食べていけないから、横浜の久保山円覚寺（現、天池庵）に住み込みで働いていました。何年かのちにもどり、住職として亡くなる平成二年まで六二年間、養徳寺を守ってきました。

疎開児童のことは生まれたばかりの頃なので残念ですが、くわしいことは分からないんですよ。母から聞いた話がほとんどですね。



一九四二（昭和一七）年  
愛甲郡荻野村生まれ  
厚木市三田在住

## 養徳寺

宗派は臨済宗で鎌倉円覚寺の末寺。山号百丈山。  
一三七六（永和二）年、舟菴開創。二〇〇六（平成一八）年、現、本堂再建。  
現住職は一四世進藤秀雅。  
二〇二六（令和八）年、六五〇年遠忌

## 廃墟寸前の寺で

母たちが来たとき、ここは無住だったそうです。ものすごくボロボロで、本堂の西側の壁は外れてるし、鶏を飼っていた跡があったくらいで、何しろすごいところだったらしい、この本堂そのものが。とにかく庫裡もないところでした。

最初の頃は父が横浜の寺の住職をしていたので、母一人で住むことになったわけね。檀家さんがね、一人では物騒だからって、現在総代さんの小野勝明さんのお父さんの時代、その家族のかたがたが交代で泊りに来てくれたの。その写真はたしかあるんじゃないかな。だからみんな村の人が支えてくれてね。雨漏りはするし、廃墟寸前のこへ来て母を守ってくれたっていうこと。檀家のかたがたの温かい気持ね、すごいよ。

## 厳格だった父法嶽和尚

母がよく言っていたの。「うちのお父さんには妻子は泣かされた。でも世間を泣かしてはいないから大手を振って歩けるのよ」って。家族に対しては厳格で、やはり戦前の封建主義の色が濃かったもので、きょうだい五人いるなかで、長男、長女はほんとうに父の顔もろくに見ないで育つたと、厳格過ぎて。会話もないと。わたしたち下の三人は戦後の自由主義の時代でしたが、それでも父親との会話はなかったですね。すべて母がなかに入って橋渡しをしたっていう家庭でしたね。

荻野村役場に在籍中は荻野小学校、荻野中学校の式典には、祝辞の挨拶など携わっ

## 庫裡

寺の台所のところ。

養徳寺は庫裡がなく、本堂が住職や家族の生活の場。居間。

昭和初期の養徳寺庭で、長男誕生と鯉幟。



## 山内義道

養徳寺第一三世和尚

一九二八（昭和三）年二月一

四日就任

一九九〇（平成二）年二月一日入寂

ていました。当時の父の姿を思い出します。役場でお昼休みつていうと職員たちとテニスをしていた姿はめずらしいので、家庭内と外の行動に違いが多くわたしは横目でビクビクして見ていました。

家のなかでは「白って言ったら白、黒って言ったら黒」、それを曲げるようなことはいつさいなかったです。絶対っていう父でした。子どもながらに「何でお母ちゃんはこのとき反論しないの」と心のなかで思っていました。が、母は反論しないで引き下がってやっています。父は封建的な亭主関白。その最たるもの。

子煩悩な面もあってね、弟とわたしを連れて友人宅によく伺うこともありました。鎌倉の円覚寺で行事があったときも、兄とわたしと弟と三人その席に招かれて、大勢の和尚さんたちの居るなかでお食事をしたの。帰るときに本厚木で終バスがなくなつて三人が黙って父のあとをトコトコ歩いて家に帰つたなんてこともありました。

父が体調を崩して大変なときがありました。病人だからじゃなく、いたわることはいたわって人間として父とは向き合っていましたね。子どもの頃からちよつと片方の眼が不自由だったみたい。「物が見えなくても見えるのよ、お父さんは変わりののよ」、母のそういう対応、精神的なものはずいくなって今も感じています。

## 母の思い出

母は父を支えて戦中戦後、寺と檀家さんとの間で気遣いをしていたことは子ども心に覚えています。

若かりし頃の両親



例えば行事がある前、世話人さんとの打ち合わせがありますよね。集まってきた世話人さんたちが暇をかって来てくださるんだからと言って、手料理と仕出しのお刺身と酔の物を振舞いました。「皆さん、忙しいのにお寺のことと言えれば来てくださって、お陰でここは成り立っているの」とよく言っていました。だから父も口には出さなかったけれども、同じような気持ちでいたんだと思います。

子育てをしながらお寺を守るとい生活でしたから大変でした。父にとつて母の支えは大きかったと思います。疎開児童が来る何年前、ここに釣鐘もあつたんですけど。その釣鐘も供出、強制供出。そんななかで地域のかたの力は大きかったかもしれない。生徒さん（疎開児童のこと）たちがこの寺に来たときも地域の人の協力なしではできなかつたと思う。食料の面からしてもね。みんな周りの人が支えてくれたから六〇年間もつたのよ。雨漏りするお寺で、廃墟寸前のここへ来てね。「ご本尊さんが守ってくれているのよ」って。

父は晩年病気でしたから、母はその介護も大変でしたが、やり通しました。介護にかかわるなかで住職の行事の手配などこなし、睡眠時間は三時間ぐらい。「わたしのからだは不思議だわ」と笑顔で言っていました。

### 疎開児童がやってきた

疎開児童が来たのは昭和一九年。上荻野の松石寺、中荻野の戒善寺、智恩寺、養徳寺、全体で三〇〇人くらい受け入れたって聞いています。



母、フヨ（八五歳）  
洋子（四九歳）の頃

生徒さんの服装はモンペでね、防空頭巾を持ってきていた。

生徒さんの電話連絡網の資料が今も残っているけど、それによると衣笠の小学校が二人。それから近いところでは東京、神奈川では茅ヶ崎とか藤沢から一人、二人来ていて、養徳寺では三〇人が生活していたことが分かります。男女半々くらいじゃなかったかしら。三年生から六年生までね。母から聞いた話ですが、うちは庫裡がなくて本堂が住まいになっていたからそりや大変だったみたい。つまりお寺の家族と生徒さんたちはいっしょに生活したってわけ。

### 疎開児童のお寺でのくらし

勉強部屋なんてないでしょう、本堂の入口に廊下があつてね、そこが教室に早変わり。三〇人くらいだったからみんないっしょにしていたでしょうね。先生は一人かな。男の先生と女の先生。

それで、お寺の入口のところに物置があつてね、あそこが炊事場と食堂になつていたので、お風呂は近所の農家へ生徒が行って使わしてもらった。当時お寺にはお風呂がなくて、近所の小野さんと共同のお風呂だったと思う。もらい風呂。井戸もいっしょ、小野さんと養徳寺が。つるべ井戸で。毎日ではないけれど地域の人の協力や恩恵があつて生徒さんたちは救われたと思うよ。食料品からお風呂のことからね。食事は生徒が交代制でやっていたんじゃないかしら。細かい話はあまり聞いていない。

寝るときのお布団は子どもたちがめいめい持ってきたんでしょね。子どもだから

養徳寺全景



### 疎開児童

太平洋戦争の末期、空襲の被害を避けるため、大都市の国民学校初等科児童（三年から六年）を個人、または集団で農村へ移住させた。

### もらい風呂

昔の日本でよく行われていた風習。よその家の風呂に入れてもらうこと。

### つるべ（釣瓶）井戸

井戸で水を汲み上げるために使われる道具のこと。桶を縄の先に取り付けたものを滑車にかけて使う。

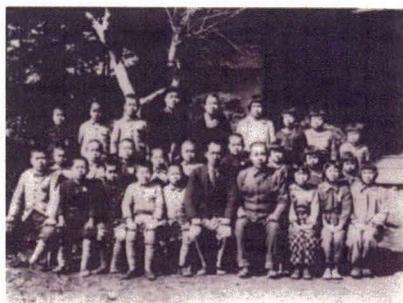
小さいお布団でも用が足りるでしょう。

## 親が恋しい児童たち

まれには親がお料理を作って子どもに食べさせようと思ってお弁当を持ってきたというのを母から聞いています。生徒さんはね、夕方になると寂しくなつて本堂の中央に階段があつたんですけれど、そこにみんなで座つて、恋しくなるんでしょうね、泣いている子がいたつて。家族を思い出して。

母は、批判的なことを言う人じゃなかったけど、戦後かなりたつてから初めて言ったことがあるの。「戦争つていうものはね、人の心を変えちゃう。ね、それで自分主義になつちゃう。子どもさんの親が、折話を作つて持つてきて、子どもが喜んで食べると思ふ気持ちで運んでくるでしょう。それを子どもが寝静まつた頃に、先生が食べていた」つて。めつたにうちの母は言わない人だけど、「戦争はむごいね、人の心も変えちゃうし、人情もなくなつちゃう」。食べ物が無いということはいかにつらいか、ね。親にしてみれば子どもが喜んで食べていると思うよ。それを先生が食べていた。その現場をうちの母が見て、「あれは可哀そうだった」つて。親の心が子どもに届かないじやん、子どもに、ね。

近所の農家の人たちからはお芋とか貰つて。だから勉強だけじゃない、労働しながら子どもたちも自分たちの食べ物確保し、それも教育の一つということでしょうね。



お寺 本堂の前の児童たち

## 疎開児童と寺の家族

その頃、お寺のわたしの家族は両親と子どもが五人でしょう。母は自分の子どもを見ながら、生徒さんを預かっていたわけでしょう。すぐ上の兄はヤンチャ坊だったから、生徒さんに石を投げてけがさせつちやったり、フッフ、そういう大騒ぎもあつたみたい。きょうだいもこういう状況を受け入れるのは大変だったんでしょね。母もそういう間に挟まって大変だった。

わたしはまだ赤ちゃんだったでしょう、おしめを換えるとノミとかがヒーンと跳ねるんだって。そういう時代だから、分かるでしょう。白い肌着からノミが飛び跳ねてね、赤ちゃんのときにね、生徒さんもめずらしくってみんな集まってくる。そうするとノミが跳ねるのよ。今の子どもはノミとかシラミなんて分からないんじゃない。でもわたしたち、「DDT」やったよね。

## 敗戦後

敗戦の日のことはあまり聞いていないわ。生徒さんはおそらくすぐに帰ったんでしょ。ただその後、暑中見舞とか、年賀状とかのお付き合いが続いて、世の中が

## DDT

一九三八（昭和一三）年に米国で開発された有機塩素系殺虫剤。戦後の衛生状態が悪い時期、伝染病予防に果たした役割は大きかったが、薬害もあり、日本では一九七一（昭和四六）年農薬登録が失効。現在、日本や先進国では、製造、使用はしていない。

落ち着いてから訪ねてきた人が何人かいましたね。そういう交流はありました。個人的に来た人もね。お寺で同窓会みたいなのが何度か行われていましたね。そのときはみんなもう成人になって家庭を持って。二〇人くらいでしたね。そこに父も母も居たと思う。写真が残っているけども。

生徒さんがここで暮らしたことは強烈だったんじゃないかしら。家族と離れて。だからこの暮らしは印象が強かったと思いますよ。

### 見えないところが大事

母からときどき聞いた話から「目に見えることは人の目にとまる。でも目に見えないところ、心が大事」ということを教わった。見えるところは評価しやすい。でも見えないところの心が大切だと。そういうなんて言うかな、いろんな意味でトータルするとわたしは母の生き方に学ぶものが多かった。

戦争を直接体験した記憶はないけど防空頭巾を持って遊んだのは覚えている。ただ母がほんとうに言った一言は、印象に残っている、あのお弁当の話。「あれは可哀そうだった」って。いかに戦争というものはむごいかっていうことですよ。それ以外にもいろいろあったとは思いますがね。

生徒さんが来ていた頃はもちろん遊具なんてなかった。そのあと、昭和二六年頃に

お寺での同窓会



養徳寺山門



ブランコ、滑り台、鉄棒、砂場などを作りました。その頃母はいっしょうけんめい勉強していたのよ。遅くまでやっていたわ。これはわたしの憶測ですけど、いずれ幼稚園みたいなものを作りたいと思って、遊具も置いて申請したけど、許可が下りなかったのでしょうね。母はここで自立して生活していくのは大変だと思ったんでしょね。そういうことも考えていたんじゃないかな。

生徒さんのことも母のことももっとくわしく分かればいいけれど、みなさんはすでに亡くなっているし、今はもう聞けない。そういう時代があったってことね。

### わたしの青春は七〇歳からよ

余談ですけど、母のことをもう少し話させてくださいね。

戦中、戦後のことですけど、お寺のこと以外にも下荻野の馬嶋医院から「難産なので来てください」と連絡があつて、自転車で近所のかたが迎えに来てね、昼夜問わず出向きお手伝いをしたことなど聞いています。また近所の人が病氣、火傷、けがなどしたときは治療をしてね。「乳児が窒息寸前のところ、一命を取り留めた」、「おれはお寺のおばさんに病氣を治してもらったんだ」という人の話など、今も耳に残っていますね。というのはね、母は看護婦とお産婆さんの資格を持っていたんです。

戦後、わたしが子どもの頃、中荻野の本郷の桑畑のなかを懐中電灯の明かりを頼りに母のお供をして夜道を歩いて治療に出かけるの。いろいろなお宅に伺ったのを覚え

ています。手をつないで歩いた母の手の温もりが今でも忘れられない。

「わたしの青春は七〇歳からよ。」と言ってね、母は、七〇歳になってから父の世話をする傍ら水彩画教室、俳句教室へ入って、仲間に恵まれて有意義な生活を過ごしていました。

平成七年三月、このときはすでに父は亡くなっていました。市内で「母娘絵画作品展」を開きました。ひ孫の成長が何より楽しみで、穏やかな人生を送りました。声を荒げたりすることはけつしてなかったですね。

亡くなったのは平成一二年七月二七日、九四歳でした。亡くなる前の六年間、いっしよに暮らしました。「おばあちゃん、見るところの手抜き（掃除など）はするけれど、心の手抜きはしないからね」これはわたしの持論でした。

母が父を介護する日常生活から介護の姿勢を学びました。のちに母は介護される側になりましたが、介護される立場の生き方も学びました。

当時私はホームヘルパーの仕事しながら、母の介護をしていました。母に「ホームヘルパーを一時休むようにしようかしら」と伝えたところ、「辞めないで続けてほしい、先方のかたもあなたが来るのを待っているでしょう、続けてあげて」その言葉に背中を押され続けることができました。

## 今、わたしの暮し

今、わたしは古布のリメイクをしたり、水彩画教室へ通ったりと忙しいなかにも楽しい時間を過ごしています。人と人との出会いから道ができ、生かされています。お陰様で息子の家族、娘の家族、孫家族に恵まれ、わたしの心の居場所があることに感謝しています。八〇歳を過ぎた今でも好きなことに向き合う日々を過ごせることは喜びです。上荻野のもりや亭のご夫妻のお陰で古服展を開催させていただいたことも忘れられない思い出です。

今、わたしは未来を背負う子どもたちのために、養徳寺の六地藏さんに赤い頭巾と涎掛けとを心を込めて作っています。

母が言った言葉「戦争はむごいね、人の心を変えちゃうし、人情もなくなっちゃう」は、戦争を体験した人の言葉として大切です。心に刻んで置きたいです。

聞き取り

二〇二三年一月一日

二〇二四年三月六日

七月三日

八月一八日

聞き手

中村 碩子

## 余話

「お寺のおばちゃん」フヨさん、懐かしいですね。養徳寺はわたしの家の隣りにあり、まだこの荻野の地に慣れないわたしは、フヨさんに大変お世話になりました。

特に子育ての頃、昭和四〇年代から五〇年代、まだお寺に遊具が置いてある時代、子どもたちの遊び場として庭のように使わせていただきました。夏休みの子ども会「ラジオ体操」に始まり、蟬取り、元気の余る子どもたちは大人が昼寝をする頃にもよく遊ばせていただき、「うるさい」と和尚さんに叱られたこともありました。今となつては懐かしくいい思い出です。

当時、鳥山さんとはお会いする機会もなく、数十年前「お念仏講」へのお誘いをいただき、仏縁とでもいましょうか、お付き合いさせていただくことになりました。高校も同じで同級生だという偶然も重なり、現在は親しくお付き合いをさせていただいております。

今回『二五周年記念誌』を刊行するにあたり、戦争をテーマとして聞き書きをすることになり、お聞きしたら養徳寺は学童疎開していた子どもたちがいたことを知り、あまり記憶にないとのことですが、分かる範囲でお話をお聞きすることができました。

太平洋戦争の末期、この里山のお寺にも戦争のために寂しい想いや慣れない環境の中で一時期過ごした子どもたちがいたことを知り、改めて「戦争は知らない」「平和は大切」ということを強く感じました。

(中村 碩子)

# 「さねさし」誕生まで

なかむら  
ひろこ  
中村 碩子

中村碩子  
一九四三（昭和一八）年三月  
高座郡有馬村生まれ  
厚木市中荻野在住

一九九九年に「さねさし」が誕生するまで凡そ一〇年かかっています。

当時、厚木市長だった足立原茂徳氏は社会教育に力を入れており、とくに女性の社会進出、活動に前向きでした。一九八二年に活動拠点の婦人会館が厚木市中町に開館しました。一九八七年「厚木市婦人問題懇話会」発足。その委員になったのが初めての社会参加です。以後の活動については詳しく後述します。

その後、市と連携した「あつぎ女性プラン策定委員会」などにかかわり、学びと出会いを経験。江の島の県立婦人総合センターへも通い講座、講演会と参加。貴重な出会いが今に繋がっています。無意識に時代の流れと呼応していたのです。自分が求めていたものは「女性史」の掘り起こしと確信し、仲間づくりのため厚木市で活動をともにした人に声をかけました。

一九九八年、厚木市に企画書を提出。市主催の「地域を支えた女性たち」（講師 江刺昭子氏）の講演会が開催されました。講演後「女性史の会」発足を提案し、会場の参加者に呼びかけました。「さねさし」誕生です。

足立原茂徳

（一九二一—二〇〇二）

昭和から平成時代の政治家、  
一九七九年から四期、厚木市長「教育文化都市」を掲げる。

## 婦人会館ができて

一九七五年が国際婦人年。厚木市に婦人会館ができたのが、七年後の一九八二年。初代館長は鈴木花枝さんです。市は女性たちが社会参加できる足がかりを作るための施設を作りました。一九八六年、雨宮やゑ子さんが二代目の館長になりました。雨宮さんは一九八五年、国際婦人の一〇年最終年世界会議「NGOフォーラム」(ナイロビ)に出席され、その帰朝報告をされています。

一九八七年に「婦人行政元年」と位置付け、一〇月に「厚木市婦人問題懇話会」(七六人)が設置され、五部門の一つの教育専門部会で、コーディネイターになりました。市と民間を繋ぐ役割を持つていたんですね、会長、副会長、コーディネイターが市と調整会議をしました。そのときにいろいろ話し合い、各部会を持ち帰り、それをみんなで検討するという作業をしたんです。わたしはここで初めて厚木市のなかでいろいろな活動をしている女性たちと交流し、仲間づくりができました。教育専門部会では、部会長は中倉マキ子さん、コーディネイターがわたし、委員のなかには清水三重子さんと、内山良子さんがいました。そこはすごく意味があるの。なぜ「さねさし」が誕生できたかっていうと、その繋がりがあったから。四四歳でした。

一九八八年、厚木市は「婦人行政計画年」と位置付けて「婦人問題懇話会」から「男女共同参加型社会」の形成を目指した一〇〇の提言の答申、その一〇〇の提言に基づき、「あつぎ女性プラン21」を女性プラン策定委員会に諮問しました。

### 婦人会館

一九八二年、開館。保健センターとの複合施設。初代館長、鈴木花枝。

### 鈴木花枝

元、厚木市会議員。一九五五年～八二年、厚木市婦連会長。八二年、婦人会館初代館長となる。

### 雨宮やゑ子

元教員。厚木市婦人問題懇話会会長。一九八六年、婦人会館二代会長。

わたしは策定委員になりました。翌年、あちこちでセミナーをしたり、勉強会が行われました。

一九八九年、市は「婦人行政推進年」として「女性プラン21」を策定し、各地区に「あつぎ女性プラン21」推進協議会を作りました。荻野にも協議会ができて委員になりました。

一九九〇年は「婦人行政動年」と「女性プラン21」推進会議ができて理事として活動しました。女性たちは基本的には主婦層が多く、行政指導の下に行動しながら勉強しました。わたしもまったくそのうちの一人で、女性の社会進出や地位向上などの言葉は新鮮でした。

年間七〇日くらい出席した時期もありました。家事をこなし多くの会議に出席して、エネルギーを注ぎました。

## 江の島塾一期生に

世のなかの勉強をしながら、さあ、わたしはどうするって思ったんですよ。もっと勉強したいと思つて江の島の県立婦人総合センターへ通いました。

一九九七年、江の島塾の応募があり、論文なんていうようなものじゃないけど、簡単な文章で受講したい理由を書いて江の島塾の一期生になりました。

一九八八年ごろから江の島に年に何回か講座を受講したり、講演を聴きに行ったり、フェスティバルに行ったりしています。そのときに、江刺さんは講師とし

### 江の島塾

一九九七年（九月二〇日～一月一三日）、県立婦人総合センターで開催した女性の社会参加推進をするための学習講座。

て来られています。わたしは江刺さんの考え方、感性に共感しました。

江の島塾で学んだこと「理想は高く、腰は低く」、村瀬春樹さんの講座のときです。それは今でもわたしの基本になっているかもしれません。「男の人と肩を切つて渡り合うのはベストではない。自分は腰を低くしてするほうが大切」と。

当時、金森トシエさんが館長でした。わたしは彼女に質問したことがあるんです。「男の人たちと同じように何かをやつていくためにどんなふうになされていたんでしようか」。そして、「けつして偉そうな口を利用してはいけません。それから、腰を低くね」。そういうことがあつて、何か立ち上げようと自分のなかでは固まつてきたの。「自分の現在から過去を振り返り、それを学習することによつて、今の自分の進むべき道がはつきりするんじゃないか」つて。学んできた一番の原点なんですよね。

### 森山敬子さんに会えて

江の島塾は、一九九七年九月二〇日から一二月三日まででした。その三か月のあいだに森山敬子さんに会いました。

森山さんとは一期生同志でした。すでに「史の会」のメンバーで、江の島塾の方にも勉強にいらして、話のなかから厚木市の婦人相談員を五年していたということを知りました。厚木を身近に感じてくださったんでしようね。厚木に来てもらつて、どうやつて会を作つたらいいのか、アドバイスをしてもらいました。主

### 金森トシエ

(一九二五—二〇一一)

一九五二年、読売新聞社女性記者第一号として入社。一九八二年～一九九〇年県立婦人総合センター（現、県立かながわ男女共同参画センター）の初代館長。一九九五年、男女共同参画社会づくり功労で、内閣総理大臣賞受賞

### 史の会

一九八七年刊行の『夜明けの航跡—かながわ近代の女たち』を機に八八年に創立された女性史研究会。代表は江刺昭子。

婦が学ぶっていうことにはそれだけ時間がかかるんですね。

森山さんが史の会に所属していること、指導者が江刺先生だということも聞きました。「じつは、わたしは厚木で女性史の会を作りたいと思うんですけどね、森山さんたちがご指導受けている江刺先生にいろいろ教えていただけたらいいんだけれど」とお話ししたら、即答で「いいわよ、わたしが江刺先生に話してみましよう」と言われたの。

とくに森山さんとの出会いは、江刺先生にご指導を受けるきっかけになるわけですから感謝ですね。

## 内山良子さんとのこと

一九九八年、江の島では「第七回全国女性史研究交流のつどい in かながわ」がありました。そのとき、さつき言った清水さんや内山さんも参加したんです。お二人とは厚木市の婦人問題懇話会の教育部会でも活動しました。内山さんはご自宅で英語を教えていて経済的にも自立し、お連れ合いとも対等に暮らしていらした。共感することが多々ありました。「歴史を勉強したいんだけど、いっしょにやれませんか」って。内山さんも何かしたいって、英語の塾も縮小しようという時期だったようですね。

## 厚木市女性政策課に企画書を提出

一九九八年五月、厚木市女性政策課に「女性セミナーに女性史の企画を（お願  
い）」を提出しているんです。

「四月より新総合計画『あつぎハートプラン』、女性行動計画『あつぎパー  
トプラン』が実施されるとのこと、市民として誠に喜ばしい限りです。  
これからは、まさに市民、行政がパートナーとしての新しい時代の構築が  
要求されることでしょう。私たちは女性問題をささやかに学習していくう  
ちに、現在わたしたちが在るのは過去の女性たちの忍耐と知恵と努力があ  
ったからこそと思ひ至りました。有史以来の女性の生き方のなかに多くの  
学習ができることを信じております。その学習が新しい展望を生み出すと  
思います。聞くところによると県央にはいまだ一つも女性史研究グルー  
プはないそうです。地域女性史の掘り起こしもこれから取り組む必要があり  
ます。厚木市の女性のなかにもそう考える人は少なくないと思います。そ  
こで、市民からの意見として女性史のセミナーを開催していただけたら、  
市民と行政のパートナーシップとしてすばらしいことではないでしょうか。  
企画書を添えてお願いいたします。山口市長様の『市民が主役』とは、こ  
ういうことと思います。行政の方々の時流を見る目とご賢察を心より期待  
しております」（原文のまま）

それですぐ返事が来たってことね。

厚木市女性政策課

一九九六年、教育委員会企画  
部に女性政策課設置。

山口巖雄

四代目厚木市長

三期（一九九五年二月二二日  
～二〇〇七年二月二二日）

## 江刺昭子氏講演会と呼びかけ、そして準備会

セミナーは二月一九日。場所は厚木市総合福祉センターの五階視聴覚室。テーマは「地域を支えた女性たち」、講師は江刺昭子さん、六〇人くらい参加されていたと思う。セミナーが終わってから内山さんが「わたしたちは厚木に地域女性史の会を作りたいと思いますので、もし興味のあるかたは参加しませんか」と呼びかけました。聴衆のなかに、現在の「さねさし」の会員である神谷智子さんがいました。

準備会の会場は内山さんのお宅で行いました。二月二七日にグループ名の検討、役割分担、世話人、曜日の調整、今後の活動について意見交換など。指導者は江刺昭子さんをお願いすることができました。その日に内山さんと鹿野政直・堀場清子著『祖母・母・娘の時代』を注文。

図書館、女性政策課に挨拶に行きました。市も協力を惜しまない。来年度は機構改革により女性政策課が女性センターへ名称が変更になるということを聞きました。いろいろな活動の方法や協力の仕方などご意見をいただきました。

長田かな子さんは地域女性史研究者で、『母たちの時代』を出版しているかたです。厚木まで来ていただき話を伺うことができました。

会を立ち上げるまでは一〇年かかっているの。でもやったことは、タイミングとしてはすごく良かった。厚木で女性史を研究するために、森山さんとの出会いがなかったら、江刺先生との出会いもなかったことでしょう。わたしと内山さん

長田かな子

(一九二四～二〇〇四)

女性史研究者、出版物『ひたむきの年輪』『相模野に生きた女たち―古文書にみる江戸時代の農村』など。九六年相模原文化賞受賞。

が中心になってね。「さねさし」メンバーの亀井喜美子さんは内山さんが誘われました。最初は内山さんが代表、わたしが涉外係になりました。メンバーは九人です。始まりました。

## 北京で開催の世界女性会議

一九九五年九月四日から一五日までの一二日間、北京で「第四回世界女性会議」が行われました。わたしは厚木市の活動で友人になった人たちと一般参加しましたが、内山さんは個人で行かれました。初めての北京の地で約五万人が一堂に会したイベントは圧巻でした。何もかも珍しく、バスで会場へ行く途中、信号機が赤でも状況によっては突っ走る中国はすごいなあと思いました。高速道路の両端を中国の人が箒で掃いている光景も見ました。会場のうねり、熱気はすごかった。意識はまだ低いながら好奇心は旺盛でしたから、その雰囲気味わっている程度でしたけど、貴重な経験でした。一時、ミャンマーのスーチーさんが来るなんという噂も飛びました。

行政とのパイプもできたし、勉強もさせてもらったし、協力してもらえました。

「さねさし」発会後に何かと協力していただいた文化財保護課（現、産業文化スポーツ部文化魅力創造課文化財保護係）とも現在もお付き合いが続いています。とくに伊従保美さんには感謝しています。

### 「第四回世界女性会議」

一九九五年九月四日～一五日、中国の北京市で開催。終了後、北京宣言及び行動綱領が採択された。

## 「さねさし」誕生当時の協力者

参加した初期の婦人行政推進時代には、一女性市民として教育委員会社会教育部長の故、黄木勝氏や婦人会館副館長の会田孝氏、また「さねさし」の誕生後は、企画部女性政策課の三橋弘美氏や、会報作りにご協力いただいた森住幹生氏など、行政のかたがたには大変お世話になりました。今も感謝しています。

厚木女性史研究会で候補になった会の名前がね、「たまゆら」「まほろば」「ふみあと」「さねさし」「紬の会」そんなのがありました。そのなかで「さねさし」が、いいっていうことになりました。二〇年以上前の話。清水さんが提案されてね。

古事記「さねさし相模さがむの小野をのに燃ゆる火の 火中ほなかに立ちて問ひし君はも」

市とはバートナーシップでやろうと最初から考えていました。「理想は高く、腰は低く」が座右の銘。江の島塾で学んだ、もう一つ一番大事なことは「無理、できない」ということは考えない。どうやったらできるかを考えてやっていくべき。守りに入ったら負けです。攻めの姿勢で行きなさい」という言葉も大切にしてきました。

一九七五年、「国際婦人世界会議」が開催され、世界が動き出し、歩んできた道は、地域の一女性が自覚はないながらも、その動きに触発され歩んできたのだと今、思います。

「さねさし」誕生の二年後、深沢かをるさんが新しい仲間になりました。現「さねさし」メンバーです。

## 「さねさし」の誕生、その後

「さねさし」の誕生の経緯を述べてきましたが、誕生によって新しい繋がりができました。江刺先生は、ご自分が関係しているグループやイベントがあれば連絡してくださいました。

全国では地域女性史研究会があり会員です。会報が送られてくるので全国の情報を得ることができます。

地域で今までお付き合いしたグループは神奈川のグループ史の会、小田原女性史研究会、かまくら女性史の会、平塚市人物史研究会など。東京のグループでは、千代田区女性史編集委員会、八王子女性史サークル、その他、やまなし地域女性史プロジェクトなど。今は以前と比べて交流も限られてきましたが、「かまくら女性史の会」からは、その都度会報をいただいています。

「全国女性史研究会交流のつどい」開催地の神奈川県の島、奈良、岐阜、東京、岩手など参加しました。他グループの活動は勉強になりました。

「最初の一步はひとり」それが二重、三重の輪に広がり、切磋琢磨することの大切さを学び、そして完成の喜びがありました。ひとりでは成しえない「ご縁とお陰様」を改めてかみしめる日々です。

聞き取り

二〇二三年四月一九日

五月一六日

聞き手

神谷 智子



## 大矢寛子書簡を載せるにあたって

この書簡は大矢寛子さんから大畑哲先生に送られたものです。寛子さんの父、大矢正夫は自由民権活動家でしたので、荻野の自由民権家の発掘に尽力された大畑哲先生とご子孫の寛子さんとは、そのご縁で交流があったということでしょう。

二〇〇一年一〇月、「さねさし」は大畑先生を講師に「自由民権の道を歩く」（荻野）を企画しました。その折この厚木には民権家子孫が生活されていることを聞き、取材をすることができました。八年後の二〇〇九年、『続・あつぎの女性』—民権家子孫の聞き書きと女性史年表—（指導者、江刺昭子）に話者一〇人の聞き書きを載せることができました。

二五周年の記念としてこれまでの資料を整理していたところ、民権家子孫のかたからの書簡が見つかりました。寛子さんは一九八一年に亡くられていますので現在より四〇年以上前の書簡です。

思い起こしてみますと内山良子（当時、「さねさし」代表）宛に送られてきたこれらの書簡を代表が全部コピーして大畑先生にお返ししたという記憶があります。恐らく大畑先生は貴重な民権家子孫のかたからの書簡を何らかの方法で生かしたいとお思いだったのでしょうか。

現、大矢家の当主逸郎さんにこの書簡をお見せしたところ、掲載を快諾してくださいました。寛子さんの誠実なお人柄が文中から滲み出ています。世に出す機会をいただきました大畑先生や寛子さんも鬼籍に入られています。ご冥福をお祈りするとともに、感謝申し上げます。

（中村 碩子）

# 民権家、大矢正夫の二女寛子から

## 大畑哲宛書簡

おやおひろこ  
大矢寛子

昨夜は御丁寧なお返事を頂きまして誠にあり難く繰り返し拝見致しました。数ならぬ亡父の爲めに皆様がいろ／＼御研究下さる事は誠に／＼感謝の至りで、亡父も嘸かし地下で喜んでゐる事と存じます。今後共、宜しくお願い申し上げます。

扱、伊藤痴遊氏は二、三ヶ月前、たしかラヂオのNHKで政事講談を聞きまして、たから多分今も御丈夫でいられる事と存じますが、先生の御友人から勝本先生に御問ひ下されば幸いと存じます。尚ほ、先日お目もじ致しました時にお話洩らした事も御座います。呉の兄から送つて来ました三多摩政戦史と一所（マ）に父の獄中の詩と亡父自身で書きました大矢家系譜も来て居りましたが、系譜などお見せしてもと思ひ政戦史丈、純夫に届けた次第で御座いますが、折角先生がいろ／＼と御研究の事ですから詩になつてゐるかどうか知りませんが御参考までに記しましたから御覧下さいませ。

大矢寛子・歌人

(一九四一—一九八二)

鶴川村野津田の石坂昌孝宅生まれ

厚木市中荻野に終生居住

一九四六年、第一回歌会始詠

進歌「新はりの畑起こさむと

ひと夜ねし小舎にさしくる

あけぼのの色」が選ばれる。

六六年、歌集『あけぼの』出版 新星書房。

大畑哲

(一九二九—二〇一〇)

自由民権運動研究者・教育者。

神奈川県内の多くの自治

体史編さんに携わる。伊勢原

市の雨岳文庫初代館長。「さ

ねさし」へ助言、資料提供。

伊藤痴遊

(一八六七—一九三八)

講釈師。星亨に師事。第一回

衆議院議員に当選。

自作の政治講談を行う。

大阪獄中之作

大矢蒼海

去年今夜墨堤ノ畔

壯士相約シテ志盟成ル

今年今夜浪花ノ獄

月照ニ鉄窓ニ寂ニタリ金聲一

敗衄ノ歎楚因ノ恨

終宵轉側眠難レ就

明年今夜果シテ何処シ

將ニ有リテニ北海ニ哭ス下月明ニ上

右の詩は兄が暗記して居たものです。尚ほ、兄の手紙には大正時代に平沼騏一郎元主相の編纂して居られた雑誌国本にも大阪事件の記事が連載され父の事もくわしく記載してあるとの事で御座いました。

次に大矢家系譜を見ますと、亡父は初名保太郎、明治十五年に天野政立の媒酌にて荻野村中荻野の森甚太郎の妹、森きくを娶る。同十七年時事に感ずる所ありて、家を辞し妻子を森甚太郎に托して、有志家の群に投じ東西南北の人となる。

後、大阪事件に連坐して入獄、明治廿四年、特赦を以て出獄すと書いてあります。亡父は文久三年十一月六日生、栗原の生家を弟にゆずりました。死去の日は昭和三年七月十三日で御座います。

そして私の兄弟は呉に居ります兄が明治十七年三月森家で生れ、姉保子は明治十九年七月生。二人共荻野小学校を出て居り、私、寛子は明治二十七年五月鶴川村野津田の石坂昌孝様の家で生まれたと聞いて居ります。三人兄妹で御座います。之れで考えますと、父が下荻野の山中の陣屋跡（大久保長門の守）の学校で教師をしていたのは、この頃かと思えます。そして母や兄を森の（母の実家）へ預けて、八王子の近辺の川口村上川口森下の秋山国三郎方へ寄隅し其の近くの学校

大矢蒼海（大矢正夫雅号）

（一八六三—一九二八）

高座郡栗原村生まれ。教師で民権活動家。一八八一年、荻野村山中学校の教員となり、八二年、森きくと結婚。八四年、神田静修館で北村門太郎（透谷）と親交を温める。翌年大阪事件に連座。九一年、特赦で出獄。九四年渡韓、九六年帰国。その後、実業界に転身。一九二八年没す。『大矢正夫自徐伝』を残す。

天野政立

（一八五四—一九一七）

愛甲郡中荻野村生まれ。一四歳で、荻野山中藩焼討事件に遭遇。一八八〇年、国会開設運動に参加し、自由民権運動に傾倒していく。八二年大矢正夫の結婚に際し、妻八重とともに媒酌人を務める。八六年大阪事件に連座、逮捕。

森甚太郎

（一八五四—一九一六）

愛甲郡中荻野生まれ。一八七九年、山中学校の学務委員。村会議員、村長など。きくの兄。

で、又教員をしていたのではないのでしょうか。

北村透谷やおみなさんなど、言う名は私も子供の時、聞き覚えて居りました。

父が出獄後の事はよく知りませんが、石坂さんで私が生れてから一時母と一緒に私を父の友の家へくれる事に行つて行ったが、石坂さんの母上の口きよで、又戻り其の後、母は私を連れ荻野へ帰り私も荻野小学校へは入りました。

父の私生活は私としても誠に世話するのもお恥かしいのですが、何でも私が三、四才の頃、或友人の紹介で、京都出身の横山貴美というのを妾にして横浜市神奈川下台町に尚文堂という本屋を開店して居りました。私が十一、二才の時は、横山がどこか外へ行き私と母を父が呼び、続いて本屋を営んで居り、私は神奈川の学校へ入りましたが、母は中々かたくな、性格で自分の強性(ツツミ)をどこ迄も通すという人なので、父ともうまく行かなかつたのでしよう。父は荻野へ土地を買い、只今私達の居る家を作り、又母と私を住ませました。横山には子供が流産か何かして一人もありませんでしたので、しまいには私達とも付き合ひ京都で父が死ぬ時は、横山が看病致しました。次にいつ頃か知りませんが、父が勤務しましたのは日本橋兜町の株屋栗生武右衛門のお店でした。信用されて富山の支店の責任者になって富山へ行っていた事も御座います。

子供に対しては親の責任を感じてか兄、正巳が小学校を終ると、藤沢市の平野友輔さんが医者を開業して居られたので、ここへお願いして医業を手伝わせて中学の課程を終え、後、上京させて父の友人の瀬脇寿雄氏の家から慈恵院に入学し卒業すると二十八年の日清戦争に少しの間召集されましたが、除隊して呉の共済

秋山国三郎(生没年不明)

八王子在の川口村(現、八王子市川口町)が住居。八四年、大矢正夫はここで療養中、秋山と知己を得て親密な交際をする。

北村透谷(門太郎)

(一八六八—一八九四)

小田原生まれ。評論家・詩人。石坂昌孝の娘美那と結婚。大矢正夫の親友。透谷は文学の道へ進み、日本の近代文学に足跡を残す。九四年、自宅の庭で溢死。

平野友輔

(一八五七—一九二八)

民権家・医師。一八七九年、東京大学医学部別課に合格。このころ民権運動に参加。八三年、医師開業免許を取得し、八王子で医院を開業。八六年、藤沢に移りこの地で医院を開く。

会病院に奉職、外科の担当でしたが、五年の後、自分で家をたて開業し荻野から母を呼んで落ちつき、只今は自分も博士、息子二人も博士号をとりました。次に姉は荻野小学校を卒業するとすぐ大磯に居られた天野政立様の奥様が裁縫を教えていられたので、ここで御厄介に成り、後、横浜の平沼女学校で講習を受け小学校教員に成り荻野出身の田口という元小学校長の妻となり目下本牧に居ります。

私はやはり小学校を出ると平野友輔さんの奥様がしつかりしている人だから、ここで修業せよと父に言われ二年近く居りましたが、父の友、森久保作蔵氏の内々の妾と言われた秋間為子さんの経営して居る本郷（目下真砂町）の錦秋実用女学校へ入り卒業して神田の共立女子職業学校へ入り、卒業しました。兄が呉へ落ちついたので、折角建てた荻野の家があるので、私がいやおうなく荻野へ帰り、すぐ近所の中村家から人の世話で純夫達の父を養子にした様なわけで御座います。今、考えて見ますと明治の終りか大正の始め頃でしょうか東京の市会を村野常右衛門と森久保作蔵の二人が牛耳っているなど、言われましたが、多分其の頃でしょうか、自由党が開散して伊藤博文か誰かが政友会を起してから政友会が盛んで父も院外団の幹事をして居った事が御座います。そして純夫が生れる前に呉で母が亡くなり、父も病を得て京都に行ったり呉に行ったりして、昭和三年に京都で亡くなり、遺骨を当地へ持って来て盟友と戒善寺に落ちついたので御座います。父は生存中よく、話しましたが大矢の祖先は源の頼義の家臣、其の二十三代の子孫に国任あり甲斐の武田が亡び、国任戦死し其の子の国忠が高座郡の栗原に落ちつき農耕に従事して今に到ったとの事、其の荊棘を拓く時、巨きな猪を射殺した

#### 秋間為子

(一八六一—一九三三)

南多摩郡平山村生まれ。一八八七年、帝国大学医科大学の第一回見習生に応募。翌年卒業。一八九〇年、東京本郷に看護学校を開講。一九〇一年、石阪昌孝の援助を得て錦秋女塾（のち錦秋学園）を開設。女子教育に尽くした。

#### 村野常右衛門

(一八五九—一九二七)

野津田村（現、町田市）生まれ。政治家。八二年自由党に入党。八五年大阪事件に参加。八八年出獄後、再び政治活動を開始。九二年、鶴川の凌霄館（私塾）に苦境にある大矢正夫を迎え、支える。

#### 森久保作蔵

(一八五五—一九二六)

農業経営者・自由民権家・政治家。八五年、大阪事件に連座し入獄。出獄後政友会に所属し政治活動をする。

ので大宅を大矢と改めたという話があると聞きました。其の後裔は只今の太矢弥市氏、私の方は分家から両分家したとの事で御座います。

又同志の胎中楠右衛門という人は多分、石坂公歴さんと一所に米国(マ)へ行かれたのでしよう。私が小石川春日町に父と同居の折、共立へ通つて居りました時、米国から何十年ぶりに帰られ私の家のすぐ隣りの宿屋に居られ、其の後高座郡に家を持たれ、たしか父の葬式の時は代議士だったと思ひます。立派な花輪を頂きました。兎に角、何もろくに知らなかつた私が先生のお蔭で、たとえ少しでも父の名が書物に出た事を知りました事を深く感謝致します。

父は私生活は兎も角として私慾を離れ人の爲めなら己れを犠牲にしてもやり遂げるといふ性質と正直といふ事は私達もみとめて居ります。こんな事とは知らず鼠(ネツミ)に痛められた父への書簡を燃やした様な記憶を思うと残念でなりません。永々とつまらぬ事を書きつらねましたが、どうぞお許し下さいませ。私も多少短歌を志して居りますが、この頃は大した歌も出来ずに居りましたが、おかげ様で今度の事で少しは歌材になるかと考えて居ります。では、亡父の事何卒宜しくお願い致します。筆末ながら御奥様にもよろしくお伝え下さいませ。

大矢寛子

十月二十四日

大畑哲先生 みもとに

## 二伸

お心にかけてさせられ、この度は福田英子の本を御貸し下さいましてあり難う御座いました。前の本もまだ読みきれませんから少し遅くなるかもしれませんが、必ずお返し致します。

尚、前に書き忘れましたが、横山貴美は父の死後、自分の姪夫婦の世話になり戦時中その者等と満州に行きましたが、終戦の直前にあちらで亡くなり骨を分けて必らず荻野の父の側に葬ってくれと遺言したそう、二十四年の夏頃、其の姪が私宅へお骨を持つて参りましたので、私の母ももう大正十一年に死去して居りますので心よく葬りました。お話の序でついで、したからいろ／＼とお恥かしい事迄記してしまいましたが、お読み下さる事を感謝しつつ、ペンを置きます。乱筆お許し下さいませ。

## 三伸

尚、まだよく書物を読みませんので、父が朝鮮の王妃暗殺の目的で朝鮮に渡つたのは明治幾年か分かりませんので、お教え下されば幸甚と思ひます。

注 基本的には原文のままだが、旧漢字は新漢字に旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。読みやすくするため句読点を用いた。

### 閔妃事件

一八九五年一〇月八日、親日派の政権を作るため、大陸浪人たちが朝鮮王妃を暗殺した。大矢正夫は前年一月二四日、仁川に到着。日本語学校の官舎におり参加できなかった。翌一九九年八月日本に戻る。

## 資料 II

あつぎの女たち「さねさし」・国と県の女性史年表

- 一、「国際婦人年」 「さねさし」 誕生前（1975年～1999年）
- 二、「さねさし」 発会～現在（1999年～2025年）

凡例

一、本年表は1975年の国際婦人年（または国際女性年）から2025年までの50年間の期間を扱った。「国際婦人年」「さねさし」誕生前（1975年～1999年3月）と「さねさし」発会～現在（2025年4月）の二つに分けた。

二、上段は「さねさし」の活動記録で、他団体主催の講演会や研究会への参加も項目に加えた。中段は神奈川県と厚木市の女性関連の動向と、県内の女性史グループのあゆみを記載した。下段は国連と国の女性関連の動向と国内の女性史研究のあゆみを記載した。

三、中段、下段ともに女性関連の動向は青字で、女性史研究のあゆみは黒字とし、年表の余白に、本やチラシなどの写真を掲載した。

「さねさし」誕生前

1975 (昭和50) 年

1976 (昭和51) 年



『横浜のおんなたち』

1977 (昭和52) 年

1979 (昭和54) 年

県・厚木市の(女性関連の)動向と  
県内女性史研究のあゆみ

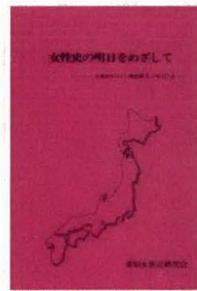
1975 (昭和50) 年

長洲一二、神奈川県知事就任。国際婦人年を契機に県政の課題として「婦人の自立と社会参加の促進」に取り組んだ

県内女性団体・グループ「県の女性プラン」「女性会館の建設」等を要望

1976 (昭和51) 年

10 逗子道の辺史話の会結成、会員は主に主婦で逗子の史話を探る



『第1回全国女性史研究交流のつどい報告集』

1977 (昭和52) 年

3 『逗子道の辺史話』第1集刊行、逗子道の辺史話の会編集・発行

5 県、県民総務室に「婦人班」設置

9 横浜市婦人会館オープン

10 「横浜のおんなたち」横浜市中区編集・発行

1979 (昭和54) 年

11 笹りんどうの会発会、会員30人、35人  
県内女性を中心とする「わたしの現在を問う会」、『銃後史ノート』一号刊行

国連・国の(女性関連の)動向と  
国内女性史研究のあゆみ

1975 (昭和50) 年

6 国際婦人年。国際婦人年世界会議開催。  
1985年まで「国際婦人の10年」と宣言(メキシコシティ)

1976 (昭和51) 年

5 『愛媛の婦人戦後三〇年のあゆみ』刊行、女性史サークル編著・発行

6、81・7 『日本婦人問題資料集成(人権・政治・労働・教育・家族制度・保健衛生・生活・思潮上下・歴史年表)』全10巻刊行、ドメス出版

国連、国際婦人規約発効

女性史総合研究会、関西の研究者主体で設立

1977 (昭和52) 年

7 国立婦人教育会館開館(埼玉県比企郡嵐山町)

8 「第1回女性史のつどい」開催、愛知女性史研究会主催、159人参加

国、国内行動計画策定。以後、各都道府県で女性行動計画づくり開始

1979 (昭和54) 年

6 国際人権規約批准  
6 日本女性学会設立

1980 (昭和55) 年



1981 (昭和56) 年

『母たちの時代―聞き書き さがみ野の女』

1982 (昭和57) 年



『かながわ女性プラン』

1980 (昭和55) 年

- 5 神奈川婦人運動史研究会結成、会社員、公務員など働く女性たち、婦人運動史を研究
- 9 『母たちの時代―聞き書き さがみ野の女』長田かな子著、相模原市郷土懇話会

1981 (昭和56) 年

―小田原女性史研究会発会

1982 (昭和57) 年

- 4 県、かながわ女性プラン策定。基本理念「人権尊重と平和」「地域社会の自治と連帯」「女性の自立と社会参加」
  - 5 かながわ女性会議創立。県の男女共同参画プラン推進。県立かながわ女性センターの運営に参画。県内の婦人団体、関係団体、グループと連携
  - 7 『かながわの婦人』創刊号刊行、神奈川婦人運動史研究会編集・発行
  - 11 県立婦人総合センター開館。「かながわ婦人元年」とする。初代館長に金森トシエ就任
  - 12 厚木市婦人会館開館。初代館長に鈴木花枝就任
- ―横須賀女性史の会発会

1980 (昭和55) 年

- 4 総合女性史研究会設立「総合的な女性史研究の向上・発展・普及に寄与する」ことを目的とする。初代代表は永原和子、年1回機関誌『総合女性史研究』刊行

1981 (昭和56) 年

- 7 第2回世界女性会議(コペンハーゲン)
- 8 「第2回全国女性史研究のつどい」開催 北海道女性史研究会主催、317人参加
- 9 国連、女子差別撤廃条約発効
- 10 12 『近代熊本の女たち(上下)』刊行、家族史研究会編著、熊本日日新聞社

1982 (昭和57) 年

- 4 6 『日本女性史(原始古代・中世・近世・近代・現代)』全5巻刊行、女性史総合研究会編、東京大学出版会



『第2回全国女性史研究のつどい報告集』

1983 (昭和58) 年



『第3回全国女性史研究  
交流のつどい報告集』

1984 (昭和59) 年

1985 (昭和60) 年

1986 (昭和61) 年



『第4回全国女性史研究  
交流のつどい報告集』

1983 (昭和58) 年

- 1 県立婦人総合センター、『かながわ女性ジャーナル』創刊、以降年1回発行
- 3 グループ江藍 発会12人。神奈川の女性史を学習し、女性たちの生きざま、自分たちの生き方探る

1984 (昭和59) 年

- 4 かながわ女性史編集委員会発会
- 4 サークル女性史プリズム発会（藤沢市善行公民館）
- 厚木市初の小学校女性校長就任

1985 (昭和60) 年

- 6 『かながわの婦人』2号刊行、神奈川婦人連動史研究会編集・発行
- 7 国連婦人の10年最終年世界会議（ナイロビ）に市より雨宮やゑ子参加、帰朝報告

1986 (昭和61) 年

- 10 厚木市婦人会館二代目館長に雨宮やゑ子就任

1983 (昭和58) 年

- 3 『日本女性史研究文献目録』刊行、女性史総合研究会著、東京大学出版会
- 8 〔第3回全国女性史研究交流のつどい〕開催、実行委員会主催、（神奈川県立婦人総合センター）、524人参加

1984 (昭和59) 年

- 5 国籍法、戸籍法改正、父母両血統主義を採用
- 6 厚生省、日本が世界一の長寿国と発表

1985 (昭和60) 年

- 7 女子差別撤廃条約批准
- 7 国連婦人の10年最終年、第3回世界女性会議（ナイロビ）

1986 (昭和61) 年

- 5 男女雇用機会均等法施行
- 8 〔第4回全国女性史研究交流のつどい〕開催、実行委員会主催、愛媛県松山市、延べ800人参加
- 10 国民年金法改正施行、（サラリーマンの妻に年金権確立）

1987 (昭和62) 年

1987 (昭和62) 年  
4 市、婦人行政元年

4 読書会の六会文学サークル発会(藤沢市)

10 厚木市婦人問題懇話会設置、76人

11 『夜明けの航跡』かながわ近代の女たち』刊行

神奈川県立婦人総合センター・かながわ女性史編集委員会編著

1988 (昭和63) 年

1988 (昭和63) 年

3 市婦人問題懇話会は男女共同参画社会の形成にむけ、婦人問題解決の方向について100の提言

100の提言を受け「あつぎ女性プラン」を女性プラン策定委員会に諮問

4 市、婦人行政計画年

史の会発会、『夜明けの航跡』の編纂に関わった14人。神奈川県的女性史をテーマに小論文にまとめ、研究誌を発行するのが目的

1989 (昭和64) 平成元年

1989 (昭和64) 平成元年

1989 (昭和64) 平成元年

3 『あつぎ女性プラン21』刊行、厚木市教育委員会編集・発行

4 市、婦人行政推進年

各地区に「あつぎ女性プラン21 推進協議会」発会(11地区440人)

『あつぎ女性プラン21』



『あつぎ女性プラン21』



『夜明けの航跡』

1987 (昭和62) 年

6 『ヒロシマの女たち』刊行、広島女性史研究会編著、ドメス出版

6 『山陽路の女たち』刊行、広島女性史研究会編著、ドメス出版

6 『山陽路の女たち』刊行、広島女性史研究会編著、ドメス出版

所得税法改正施行(配偶者特別控除)

1988 (昭和63) 年

12 『日本女性史研究文献目録Ⅱ』刊行、女性史総合研究会著、東京大学出版会

1989 (昭和64) 平成元年

3 『葦笛のうたー足立・女の歴史』刊行、鈴木裕子編・足立女性史研究会著、ドメス出版

ク舎



『葦笛のうたー足立・女の歴史』

1990 (平成2) 年  
8 厚木市友好都市訪中団、亀井喜美子参加

1991 (平成3) 年



1992 (平成4) 年

『多摩の流れにときを紡ぐ  
—近代かわさきの女たち』

1990 (平成2) 年

3 『よこはまを生きる女たち』 刊行、「よこはまを生きる女たち」 刊行委員会企画・編集 横浜市教育委員会婦人会館発行

4 市、婦人行政行動年

8 厚木市友好都市訪中団派遣 (揚州12人)

11 『多摩の流れにときを紡ぐ—近代かわさきの女たち』 刊行、川崎市中小企業婦人会館・川崎市女性史編さん委員会編著、ぎょうせい

1991 (平成3) 年

4 市、女性行政行動年 (’92)

4 県立婦人総合センター、県立かながわ女性センターへ改称 (以後、かながわ女性センターとする)

8 『史の会研究誌』大正の響きをきく』創刊号刊行、史の会編集・発行

— 萌黄の会発会

1992 (平成4) 年

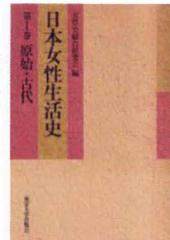
9 『かながわの婦人』 3号刊行、神奈川婦人連動史研究会編集・発行



『史の会研究誌～  
大正の響きをきく』

1990 (平成2) 年

5 9 『日本女性生活史』全5巻刊行、女性史総合研究会編、東京大学出版会



『日本女性生活史』

1991 (平成3) 年

— 緒方貞子、日本初の国連難民高等弁務官に就任

1992 (平成4) 年

3 『日本女性の歴史(性・愛・家族、女のはたらき、文化と思想)』全3巻刊行、総合女性史研究会編著、角川書店

4 育児休業法施行



『第5回全国女性史研究  
交流のつどい報告集』

1994 (平成6) 年



『厚木市婦人会館  
10年のあゆみ』

1993 (平成5) 年



『共生への航路』



『第6回全国女性史研究  
交流のつどい報告集』

1994 (平成6) 年

7 『明日を拓く―歴史の中の女たちからの問いかけ』 刊行、小田原女性史研究会編集・発行

11 よこはま女性史研究会、写真展「国際交流のハイオニア」横浜の女性群像」開催、(フォーラムよこはま)

1993 (平成5) 年

10 『史の会研究誌』時代のうねりを見つめて』 2号刊行、史の会編集・発行

11 『厚生市婦人会館10年のあゆみ』刊行 厚生市教育委員会 社会教育部婦人会館編集・発行

11 『共生への航路』かながわの女たち'45〜'90』刊行、神奈川県立かながわ女性センター・かながわ女性史編集委員会編著、ドメス出版

1994 (平成6) 年

3 『椎の木の下の―区民が綴った中野の女性史』刊行、中野区・中野区女性史編さん委員会編、ドメス出版

5 『日本女性史研究文献目録Ⅲ』刊行、女性史総合研究会著、東京大学出版会

9 「第6回全国女性史研究交流のつどい'94やまがた」開催、実行委員会主催、山形市800人参加

― 高校家庭科の男女必修化

1993 (平成5) 年

4 『光をかざす女たち―福岡県女性のあゆみ』刊行、福岡県女性史編纂委員会著、西日本新聞社

― 中学校家庭科の男女必修化

9 「第5回全国女性史研究交流のつどい」開催、実行委員会主催、沖縄県那覇市、延べ880人参加

― 『風の交叉点・豊島に生きた女性たち』全4巻 豊島区児童女性部女性青少年課編(2巻〜4巻は豊島区立男女平等推進センター編)

1995(平成7)年

9 第4回世界女性会議に  
山良子、中村碩子参加



第4回世界女性会議—北京—

1996(平成8)年

1 厚木市女性海外研修団に  
神谷智子参加

1995(平成7)年

12 『女の性と働き』・『女の学問と運動』刊行、生涯学級・旭女性史の会編集



『北京会議報告書』

1996(平成8)年

1 厚木市女性海外研修団員派遣(シドニー、ゴールドコースト、6人)

5 『横浜に生きる女性たちの声の記録 第1集』第4集』刊行、横浜市女性協会・横浜女性フォーラム企画・発行(2000年)

7 『史の会研究誌』時代の目覚めをよむ』3号刊行、史の会編集・発行

1995(平成7)年

3 『いばらき女性のあゆみ』刊行、いばらき女性史編さん事業委員会編、茨城県発行

4 育児・介護休業法改正('99・4まで介護休業は努力義務)

9 第4回世界女性会議開催、北京宣言及び行動綱領採択(北京市)

10 『花ひらくーならの女性生活史』刊行ならの女性生活史編さん委員会編著

10 '96・7 『女と男の時空ー日本女性史再考』全6巻刊行、鶴見和子監修、藤原書店

12 「女性史研究東京連絡会」発会、第1回例会をおおた女性センターで開催、おおた女性史をつくる会担当、10グループ32人参加

1996(平成8)年

9 優生保護法一部改正、母体保護法施行

9 '99・3 『もうひとつの北区史』全3集刊行、北区総務部女性政策課編

1997 (平成9) 年

9 「江の島塾」に中村碩子参加

10 市企画部女性政策課、「ウイメンズ・華カレッジ」中村碩子・神谷智子参加



『新ミレニアムへの伝言』  
—第7回全国女性史研究交流のつどい—

1998 (平成10) 年

9 「第7回全国女性史研究交流のつどい in かながわ」開催 (かながわ女性センター)

子・亀井喜美子・中村碩子・清水三重子参加

10 女性政策課発行、女性情報紙「ハーモニー」の編集委員に神谷智子参加

12 厚木市主催講演会、講師 江刺昭子「地域を支えた女性たち」(市総合福祉センター)

1997 (平成9) 年

9 かながわ女性センターで「江の島塾」開催  
10 市企画部女性政策課、「ウイメンズ・華カレッジ」開講



『かみふらの女性史』

1998 (平成10) 年

6 『ひたむきの年輪—ぬくもりの相模原近代女性史』刊行、長田かな子著、相模経済新聞社発行

8 『横須賀の女性たち—近代女性の年表』刊行、地域女性史の会編集・発行  
9 「第7回全国女性史研究交流のつどい in かながわ」開催、実行委員会主催、延べ1200人参加 (かながわ女性センター)

10 厚木市婦人会館を女性センターと改称  
10 婦人会館だよりを「スマイル」に変更  
10 市、女と男が共に輝く情報紙「ハーモニー」創刊号発行

1997 (平成9) 年

3 『新宿女たちの十字路—区民が綴る地域女性史』刊行、新宿区地域女性史編纂委員会編、ドメス出版

3 『伝えたい想い 枚方の女性史』刊行、京都橘女子大学女性歴史文化研究所編著、ドメス出版

10 『日本女性史論集(女性史の視座・政治と女性・家と女性・婚姻と女性・性と宗教・女性の暮らしと労働・文化と女性・教育と思想・性と身体・女性と運動)』全10巻刊行、総合女性史研究会編、吉川弘文館

1998 (平成10) 年

3 『かみふらの女性史』刊行、かみふらの(北海道)「女性史をつくる会」編集・発行

9 「第7回全国女性史研究交流のつどい in かながわ」開催、実行委員会主催、延べ1200人参加 (かながわ女性センター)

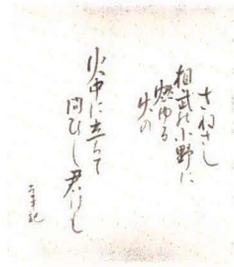
9 『なは・女のあしあと 那覇女性史』全3巻刊行、那覇市総務部女性室・那覇女性史編纂委員会編、ドメス出版・琉球新報社

1999 (平成11) 年

2・22 女性史研究会発会の準備会、アドバイサーに森山敬子

3・12 女性史研究会発会の準備会、さがみ女性史研究会「さねさし」に決定。「さねさし相模の小野に燃ゆる火の火中に立ちて問ひし君はも」(古事記よ

り)



「さねさし」色紙

1999 (平成11) 年

3 「スマイル」と「ハーモニー」を合併して「ハ

あモニイ」として発行開始

3 『新ミレニアムへの伝言』第7回全国女性史研究交流のつどい in かながわ』刊行、ドメス出版



「ハーモニー」創刊号



『第7回全国女性史研究交流のつどい報告集』

1999 (平成11) 年

3 『江東に生きた女性たち―水彩のまちの近代』刊行、江東区・江東区女性史編纂委員会編、ドメス出版

3 『里から町へ―100人が語るせたがや女性史』刊行、世田谷区・世田谷女性史編纂委員会編、ドメス出版

3 『せたがや女性史―近世から近代まで』刊行、世田谷区・世田谷女性史編纂委員会編、ドメス出版

3 『江東に生きた女性たち―水彩のまちの近代』刊行、世田谷区・世田谷女性史編纂委員会編、ドメス出版



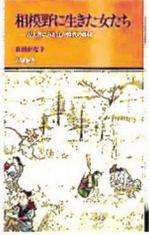
『江東に生きた女性たち―水彩のまちの近代』



『せたがや女性史―近世から近代まで』

<p>1999（平成11）年</p> <p>4・9 さがみ女性史研究会「さねさし」発会、9人（内山、中村、亀井、中倉、清水、飯田、神谷、椎名）発会記念講義、講師江刺昭子「女性史研究の歴史と学習の方法」</p> <p>5・21 定例会、鹿野政直・堀場清子著「祖母・母・娘の時代」の読書と女性史資料の収集</p> <p>6・18 定例会、年表作成・資料収集の方法検討カード利用資料収集作業（かながわ女性センター図書館）</p> <p>8・20 江刺昭子指導、資料収集（神奈川県立図書館かながわ資料室）</p> <p>9・17 定例会、箱根対岳荘研修旅行（18日）</p> <p>11・7 町田市主催講演会、講師江刺昭子「景山英と大阪事件」に参加（町田市立自由民権資料館）</p> <p>11・25 史の会・グループ江藍主催講演会、講師江刺昭子「21世紀を共に生きる」に参加（かながわ女性センター）</p> <p>12・17 定例会、指導江刺昭子、「新聞記事カード化と整理の仕方」</p> <p>2000（平成12）年</p> <p>4・1 会報「さねさし」創刊号発行</p> <p>5・19 定例会、聞き取りの状況報告、「横浜貿易新報」のカード化</p>	<p>「さねさし」のあゆみ</p>	<p>1999（平成11）年</p> <p>― 市、初の女性消防士採用</p> <p>― 市、女性センターと女性政策課を統合して市民部女性政策課になる</p> <p>県・厚木市の（女性関連の）動向と 県内女性史研究のあゆみ</p>
<p>2000（平成12）年</p> <p>5 『阿夫利嶺にこだまして―厚木高女学徒動員の記』刊行、厚木高女青葉会記念誌実行委員会編集・青葉会発行</p>	 <p>『さしわたの女たち』</p>  <p>『祖母・母・娘の時代』</p>	<p>1999（平成11）年</p> <p>4 介護休業の義務化</p> <p>4 育児・介護休業法施行</p> <p>6 男女共同参画社会基本法施行</p> <p>国連・国の（女性関連の）動向と 国内女性史研究のあゆみ</p>
<p>2000（平成12）年</p> <p>3 『千代田区女性史』全3巻刊行 千代田区・千代田女性史編集委員会編、ドメス出版</p> <p>4 介護保険制度施行</p>	<p>11 子ども買春・子どもポルノ禁止法施行</p> <p>9 『さしわたの女たち―市民がつづった女性史』刊行、岸和田市立女性センター・さしわたの女性史編纂委員会編著、ドメス出版</p>	<p>1999（平成11）年</p> <p>4 介護休業の義務化</p> <p>4 育児・介護休業法施行</p> <p>6 男女共同参画社会基本法施行</p> <p>国連・国の（女性関連の）動向と 国内女性史研究のあゆみ</p>

- 6・4 千代田区主催『千代田区女性史』完成記念報告会に参加（いきいきプラザ一番町）
  - 7・19 定例会、聞き書き 資料収集  
史の会主催講演会、講師山口美代子「資料収集について」（かながわ女性センター）
  - 9・13 箱根研修旅行、定例会（14日）
  - 11・1 「広報あつぎ」で聞き書き話者募集掲載
  - 11・15 「公民館だより」で聞き書き話者募集掲載
  - 11・26 フリーマーケットに内山良子と中村碩子、出店（厚木市森の里若宮公園）
  - 12・8 定例会、指導江刺昭子「テープ起こしの方法」
- 2001（平成13）年
- 2・17 『武相の若草』を津久井郡郷土資料館（現・相模原市立津久井郷土資料室）で見つける
  - 4・20 定例会、玉川地区散策（小野神社、小町神社、間修寺、龍鳳寺）
  - 5・1 会報「さねさし」2号発行
  - 6・15 「広報あつぎ」の「すてきな仲間たち」に「さねさし」紹介
  - 6・20 勉強会、指導江刺昭子「処女会・女子青年団について」

- 1 2001（平成13）年  
『相模野に生きた女性たち―古文書にみる江戸時代の農村』刊行、長田かな子著、有隣堂
  - 2 『史の会研究誌』女たちの物語を再生する』4号刊行、史の会編集・発行
  - 6 『消したくない史実―地域新聞に見る西湘の女性』刊行 小田原女性史研究会編集・発行
- 

『相模野に生きた女性たち』  
古文書にみる江戸時代の農村



『阿夫利嶺にこだまして一厚木女学徒動員の記』

- 3 『石川の女性史 戦後編』刊行、編纂委員会著、石川県各種女性団体連絡協議会発行
  - 4 介護保険制度施行
  - 10 『岐阜の女性史―まん真ん中の女たち』刊行、岐阜県・岐阜県女性史編纂委員会編、岐阜県広報センター発行
  - 11 ストーカー規制法施行
  - 12 『史料にみる日本女性のあゆみ』刊行、総合女性史研究会編、吉川弘文館
- 2001（平成13）年
- 1 国立婦人教育会館、国立女性教育会館に改称
- 

『消したくない史実―地域新聞に見る西湘の女性』



『史料にみる日本女性のあゆみ』

- 7・5 史の会主催シンポジウム「地域女性史交流のつどい in かながわ」に5人参加（かながわ女性センター）
- 9・1 「第8回全国女性史研究交流のつどい in ぎふ」に4人参加（2日）
- 10・22 「自由民権の道を歩く」講師大畑哲（荻野）
- 11・22 史の会主催講演会、講師折井美耶子「オーラル・ヒストリーイギリスの場合」5人参加（かながわ女性センター）
- 12・13 定例会、指導江刺昭子「テープ起こし原稿の読み合わせ・今後の指針」忘年会
- 2002（平成14）年
  - 4・11 話者大下トシに聞き取り（富士吉田）
  - 5・1 会報「さねさし」3号発行
  - 6・21 定例会、箱根研修旅行（22日）
  - 11・25 山川市郎墓碑を訪ねる（厚木飯山金剛寺）
  - 12・10 目黒区主催、『坂のある町でー聞き書き集・通史』目黒区・目黒地域女性史研究会出版記念会に参加
- 2003（平成15）年
  - 1・7 定例会、原稿の経過報告
  - 5・16 定例会、指導江刺昭子「聞き書き原稿について」

- 7 「女と男、ともに拓く地域の歴史研究発表と地域女性史研究交流のつどい」史の会主催、12団体・130人参加、かながわ女性センター（かながわ女性センター）
- 2002（平成14）年
  - 1 「アンサンブル21」かまくら女性史部会発表



『杉並の女性史―明日への水脈』

- 9 「第8回全国女性史研究交流のつどい in ぎふ」開催、実行委員会主催、岐阜市
- 10 D V 防止法施行
- 2002（平成14）年
  - 10 『杉並の女性史―明日への水脈』刊行、杉並区女性史編さんの会編著、ぎょうせい
  - 11 『坂のある町でー区民が綴った目黒の女性史』全2巻刊行、目黒区・目黒地域女性史研究会編、ドメス出版
- 2003（平成15）年
  - 1 オーラル・ヒストリー総合研究会創立、以後、定期的な例会開催、機関紙『Oral History Workshop News』を発行
  - 3 『日本女性史研究文献目録 IV』刊行、女性史総合研究会著、東京大学出版会



『第8回全国女性史研究交流のつどい 報告集』

10・17 定例会、話者20人の原稿の読み通し  
 12・28 『あつぎの女性20人―聞き書き集―』入稿



『あつぎの女性20人  
-聞き書き集-』

2004 (平成16) 年

4・1 『あつぎの女性20人―聞き書き集』刊行  
 4・21 出版記念の集い開催、山口巖雄厚木市長、江刺昭子、大畑哲、話者など出席(あつぎパートナーセンター)

10・31 自由民権120周年建碑実行委員会主催、自由民権碑建立除幕式5人参加(厚木市中荻野戒善寺)

12・3 会報「さねさし」4号(特集号)発行  
 12・15 定例会、指導江刺昭子「年表、聞き書きについて」忘年会(厚木市七沢福元館)

2005 (平成17) 年

2・1 「広報あつぎ」会員募集  
 2・18 定例会、『あつぎの女性20人―聞き書き集―』出版後の反響について話し合い。  
 勉強会、講師大畑哲「厚木・愛甲民権家子孫の状況について」

2・27 映画鑑賞「草の乱」(厚木市文化会館)



聞き書き集  
 『かまぐらの女性史―  
33人が語る大正・昭和』

2004 (平成16) 年

3 聞き書き集『かまぐらの女性史33人が語る大正・昭和』刊行、かまぐら男女共同参画市民ネットワーク「アンサンブル21」女性史編纂部会編集、鎌倉市人権・男女共同参画課発行

2005 (平成17) 年

9 『地域女性史研究文献目録』刊行、折井美耶子・山辺恵巳子著、ドメス出版  
 9 「第9回全国女性史研究交流のつどい in 新潟」開催、実行委員会主催、新潟市

9 『第9回全国女性史研究交流のつどい報告集』

2004 (平成16) 年

3 『武蔵野市女性史』全2巻刊行、武蔵野市女性史編纂委員会編、武蔵野市発行



『第9回全国女性史研究  
交流のつどい報告集』

2005 (平成17) 年

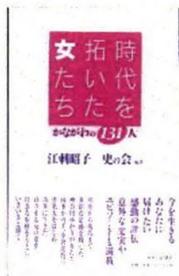
- 4・17 史の会主催出版記念会『時代を拓いた女たち』かながわの131人』出席
- 5・30 小島すみ談話「敗戦で女たちが得たもの」
- 6・4 「第7回女性史研究東京連絡会」に参加（目黒区緑ヶ丘文化会館）
- 6・12 「秩父困民党史跡めぐり」大畑哲指導に参加
- 9・3 「第10回全国女性史研究交流のつどい in 奈良」に4人参加（4日）
- 10・13 町田市主催町田市民大学講座、講師江刺昭子「町田の女性の民権と女権」に参加
- 11・3 六会文学サークル主催、「大磯文学散歩」に参加
- 11・5 町田市立自由民権資料館講座、講師江刺昭子「平塚金目の自由民権運動とキリスト教」参加
- 11・12 自由民権研究所主催、自由民権120周年東京フォーラムに中村碩子出席（早稲田大学国際会議場）

2006（平成18）年

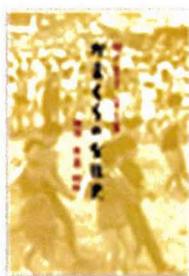
- 3・17 定例会、講師内藤佳康「厚木・愛甲の民権家たち」
- 5・1 会報「さねさし」5号発行
- 5・22 神奈川新聞社より「埋もれた史実発掘」の取材を受ける（6月4日掲載）
- 8・1 「広報あつぎ」街角伝言版で会員募集

- 4 「時代を拓いた女たち かながわの131人」編著 江刺昭子＋史の会、神奈川新聞社

7 市に初の女性消防団員誕生



『時代を拓いた女たち かながわの131人』



聞き書き第2集 『かまぐらの女性史 明治・大正・昭和』

2006（平成18）年

- 3 聞き書き第2集『かまぐらの女性史 明治・大正・昭和』刊行、かまぐら男女共同参画市民ネットワーク「アンサンブル21」女性史編さん部会編集、鎌倉市人権・男女共同参画課発行

- 6 「第7回女性史研究東京連絡会」開催（目黒区緑ヶ丘文化会館）
- 9 「第10回全国女性史研究交流のつどい in 奈良」開催、実行委員会主催、奈良市

9 「新宿 歴史に生きた女性100人」刊行、折井美耶子・新宿女性史研究会編、ドメス出版

- 9 「新宿 歴史に生きた女性100人」刊行、折井美耶子・新宿女性史研究会編、ドメス出版



『第10回全国女性史研究交流のつどい 報告集』

2006（平成18）年



『新宿 歴史に生きた女性100人』

- 8・3 六会文学サークル20周年記念講演会、講師江刺昭子「中里恒子の世界」3人参加  
(藤沢市総合市民図書館ホール)
  - 10・15 NPO「雨岳文庫を活用する会」設立を祝う会に2人出席
  - 11・2 六会文学サークル主催文学散歩「中里恒子の足跡を訪ねて」に参加
  - 11・14 資料収集、(横浜中央図書館・横浜開港資料館)
  - 11・19 厚木市郷土資料館主催、第30回収蔵資料展 講座「県央の繭集散地・繭の山から厚木が明けりゃ」に参加
- 2007(平成19)年
- 1・19 定例会、講師飯田孝「厚木市の民権と養蚕について」
  - 2・9 観梅会、伊勢原市上粕屋「雨岳文庫」(民権家山口左七郎旧宅)
  - 5・1 会報「さねさし」6号発行
  - 5・12 「第8回女性史研究東京連絡会」に参加  
(千代田区民ホール)
  - 11・11 かながわ女性センター主催講演会、講師江刺昭子「かながわの女性史を振りかえる」に参加(かながわ女性センター)
  - 12・6 第100回記念定例会、典拠文献リストの検討  
研修旅行(熱海伊豆山)(7日)



「かながわの女性史を振りかえる」資料



「さねさし」会報6号



『しぶや女性の群像』

2007(平成19)年

- 3 『中央区女性史―いくつもの橋を渡って』全2巻刊行、中央区・中央区女性史編さん委員会編・江刺昭子著
  - 3 『しぶや女性の群像』刊行、渋谷地域女性史をつくる会編集・発行
  - 5 「第8回女性史研究東京連絡会例会」開催、(千代田区役所区民ホール)千代田区女性史サークル担当、28グループ121人参加
- 2007(平成19)年



『中央区女性史―いくつもの橋を渡って』

2008 (平成20) 年

2・22 「横浜貿易新報」から年表初稿見直し

5・1 会報「さねさし」7号発行

9・8 『教育会雑誌』関係資料収集、(横浜国立大学図書館)

9・27 諸資料収集、(横浜市中心図書館)

2009 (平成21) 年

4・28 『続・あつぎの女性―民権家子孫の聞き書きと女性史年表―』入稿

7・1 『続・あつぎの女性―民権家子孫の聞き書きと女性史年表―』刊行

7・23 厚木市長訪問『あつぎの女性20人―聞き書き集―』『続・あつぎの女性―民権家子孫の聞き書きと女性史年表―』進呈

8・28 厚木市提供番組「あつぎ元氣Wave」収録

9・28 『続・あつぎの女性―民権家子孫の聞き書きと女性史年表―』出版記念の集い開催(あつぎパートナーセンター)

10・3 「第9回女性史研究東京連絡会」に出席(武蔵野市スイングホール)

2008 (平成20) 年



『続・あつぎの女性―民権家子孫の聞き書きと女性史年表―』

2009 (平成21) 年

3 明治・大正・昭和『かまくらの女性史年表』刊行、かまくら男女共同参画市民ネットワーク「アサンブル21」女性史編さん部会編集、鎌倉市人権・男女共同参画課発行

5 『西さがみ女性の歴史―原始・古代から現代へ』刊行、服藤早苗・宇佐美ミサ子著、夢工房



『西さがみ女性の歴史―原始・古代から現代へ』

2008 (平成20) 年

3 『府中市女性史―この道は明日につづく』刊行、府中市・府中市女性史実行編さん委員会編、ドメス出版

3 『東京タワー、伝統と先端の街―聞き書き みなどの女性史』刊行、みなど女性史をつくる会編著、港区スポーツふれあい文化健康財団・港区立男女平等参画センター発行

2009 (平成21) 年

10 「第9回女性史研究東京連絡会」開催(武蔵野市スイングホール)『あの頃、そのとき 女性たちの草の根の運動』刊行、むさしの市女性史の会編集・発行



『あの頃、そのとき 女性たちの草の根の運動』

- 10・21 「地域女性史交流 in かながわ」鎌倉・小田原・厚木の女性史刊行を記念して」シンポジウム開催、中村碩子発表、展示（かながわ女性センター）
- 12・1 会報「さねさし」8号発行
- 12・21 江刺昭子との懇親会（ホテルモントレ横浜）

- 2010（平成22）年
- 3 総合女性史学会会報『総合女性史研究』第27号、新刊紹介に「さねさし」第二集『統・あつぎの女性―民権家子孫の聞き書きと女性史年表―』
- 6・19 定例会、小田原女性史研究会30周年記念講演に参加（小田原箱根商工会議所）
- 9・4 「第11回全国女性史研究交流のつどい」 in 東京」中村碩子発表「厚木・愛甲の自由民権と女性たち」国立オリンピック記念青少年総合センター（5日）7人参加
- 10・16 小田原女性史研究会30周年記念講演に参加（小田原市民会館）
- 10・22 飯田孝のお別れ会に参列（8月15日逝去）（厚木市寿町長福寺）
- 11・3 江刺昭子の神奈川文化賞授章式に出席（神奈川県民ホール）

10史の会・かまくら男女共同参画市民ネットワーク「アンサンブル21」女性史編さん部会・小田原女性史研究会・さがみ女性史研究会「さねさし」主催シンポジウム「地域女性史交流 in かながわ」鎌倉・小田原・厚木の女性史刊行を記念して」開催、かながわ女性センター・鎌倉市共催



シンポジウム  
「地域女性史交流  
in かながわ」チラシ



シンポジウム  
「地域女性史交流  
in かながわ」資料



『時代を生きた女たち  
新・日本女性通史』

- 2010（平成22）年
- 4 『時代を生きた女たち 新・日本女性通史』総合女性史研究会編著、朝日新聞出版
- 9 「第11回全国女性史研究交流のつどい in 東京」開催、（国立オリンピック記念青少年総合センター）



『第11回全国女性史研究  
交流のつどい報告集』

11・13 やまなし地域女性史聞き書きプロジェクト

ト講座、色川大吉「聞き書きの意義と今後の展開について」に参加（山梨県立男女共同参画推進センター）

11・25 江刺昭子『樺美智子 聖少女伝説』出版を祝う会 参加（横浜）

2011（平成23）年

3・18 定例会中止 3月11日 東日本大震災発生

5・1 会報「さねさし」 9号発行

10・15 史の会主催『時代を拓いた女たち』かながわの111人』第2集出版記念、山崎洋子・小柴俊雄「講演会とパネルディスカッション」に参加（横浜開港記念会館）

10・22 NPO法人日本自費出版ネットワーク主催 第10回日本自費出版フェスティバル授与式に出席（市ヶ谷私学会館）

10・31 「第23回オーラル・ヒストリー総合研究会例会」出席（文京区民会館）

11・4 会員中倉マキ子逝去  
2012（平成24）年

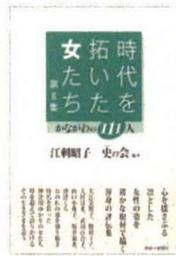
2・17 NPO法人横浜シテイガイド協会主催、横浜市民講座「講演会とミニガイド」講師 江刺昭子『時代を拓いた女たち』について」参加（横浜開港記念会館）

5・1 会報「さねさし」 10号発行

9・8 『かまぐらの女性史 通史』出版記念講演会、参加（鎌倉生涯学習センター）

2011（平成23）年

6 『時代を拓いた女たち』かながわの111人』第2集刊行、江刺昭子＋史の会編著、神奈川新聞社



『時代を拓いた女たち』かながわの111人

2012（平成24）年

3 『明治・大正・昭和 かまぐらの女性史 通史』刊行、かまぐら男女共同参画市民ネットワーク「アンサンブル21」女性史編さん部会編集、鎌倉市人権・男女共同参画課発行

2011（平成23）年

2012（平成24）年



『明治・大正・昭和 かまぐらの女性史 通史』

- 10・7 「第25回オーラル・ヒストリー総合研究会例会」に出席（文京区民センター）
- 11・17 「第10回女性史研究東京連絡会」に出席（練馬区男女共同参画センター）

2013（平成25）年

- 2・9 厚木市「公共施設最適化基本方針及び中心市街地の公共施設再配置計画に関する意見交換会」に出席

7・1 会報「さねさし」11号発行

10・18 定例会、『月刊社会教育』より原稿依頼

11・16 「日中韓女性史国際シンポジウム」に参加

11・17 平塚人物史研究会主催講演会、講演江刺昭子「神奈川の女性と民権」に参加

2014（平成26）年

10・23 横浜文芸懇話会主催講演会、講師江刺昭子「ノンフィクションと女性史」に参加（横浜市開港記念会館）

11・9 平塚人物史研究会主催講演会、講演江刺昭子「自分らしく生きるために奮闘した女たち」に参加（ひらつか市民活動センター）

11・20 史の会主催「江ノ島・かながわ女性センター」とのお別れ会」に参加

2013（平成25）年

3 『学びの道程』刊行、小田原女性史研究会編・発行

5 かまくら女性史の会 会報第1号「Newsletter」発行、「かまくら女性史の会」として再スタート

9 『平塚ゆかりの先人たち』平塚人物史研究会刊行

2014（平成26）年



『聞き書き証言集 伝えたい山梨の女性たち』

11 「第10回女性史研究東京連絡会」を開催（練馬区男女共同参画センター）、担当は練馬区女性史を拓く会、このうち2016年度で「女性史研究東京連絡会」は終了し、地域女性史研究会へ発展的解消

2013（平成25）年

3 総合女性史研究会、総合女性史学会に名称変更



『平塚ゆかりの先人たち』

2014（平成26）年

3 地域女性史研究会創立、全国の地域女性史研究会の交流、情報交換の場。以後、定期的に「地域女性史研究会会報」を発行

3 『聞き書き証言集—伝えたい山梨の女性たち』第2集刊行、山梨県立大学・やまなし地域女性史「聞き書き」プロジェクト編集・発行

11・29 講座「やまなしの女性史を学ぶ」講師江刺昭子「等身大の女性像を描くことの意味―「樺美智子」の検証を例に―」シンポジウム―地域女性史研究の意義と課題私たちの活動をふり返って―報告者亀井喜美子（山梨県立男女共同参画推進センター）

2015（平成27）年

7・21 『続々・あつぎの女性―聞き書きと資料―』

入稿

9・1 『続々・あつぎの女性―聞き書きと資料―』

刊行

9・18 厚木市長訪問、『続々・あつぎの女性―聞き書きと資料―』を小林常良市長に進呈

10・9 「第12回全国女性史研究交流のつどいin岩手」4人参加（11日）

10・25 平塚人物史研究会講演会 講師 江刺昭子

「平塚らいてうと与謝野晶子」に参加

12・1 会報「さねさし」13号発行

2016（平成28）年

6・30 「さねさし」主催講演会、講師江刺昭子『武相の若草』にみる農村女子・自治と支配のはざままで』約100人参加（アミューあつぎ）

9・9 第9回楽しくて、わかりやすい江戸里神楽公演に参加（さいたま芸術劇場）

12・1 会報「さねさし」14号発行



『続々・あつぎの女性―聞き書きと資料―』

2015（平成27）年

4 かながわ女性センター、藤沢合同庁舎内に移転、かながわ男女共同参画センター（愛称、かなテラス）付属図書館は県立図書館の「女性関連資料室」に移転

『史の会研究誌』「武相の若草」を読む』5号刊行、史の会編集・発行

『武相の女性・民権とキリスト教』武相の女性・民権とキリスト教研究会・町田市立自由民権資料館 編著・発行、中村碩子「聖公会の相州伝道の跡を歩く」掲載

2016（平成28）年

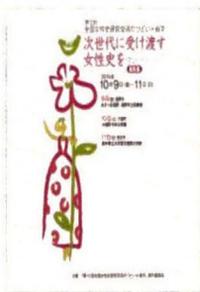
『歴史と自己の再発見―オーラル・ヒストリ総合研究会10年の記録（2003～2013）』刊行、オーラル・ヒストリ総合研究会編・発行

『聞き書きで綴る―八王子の女性史』刊行、八王子女性史サークル編・発行

『第12回全国女性史研究交流のつどいin岩手』開催、実行委員会主催・遠野市共催・大槌町教育委員会共催・宮古市後援、300人参加

2016（平成28）年

『第12回全国女性史研究交流のつどい報告集』



『第12回全国女性史研究交流のつどい報告集』



講演会「『武相の若草』にみる農村女子 -自治と支配のはざままで」チラシ

2017 (平成29) 年

1・15 総合女性史学会主催「地域女性史例会『武相の若草』」報告者江刺昭子 会員 4 人参加

5・19 定例会、指導江刺昭子「郡女子青年団のまとめ方」

6・10 六会文学サークル主催 30 周年記念講演会 講師江刺昭子「女性作家の時代―明治から現代まで―」に参加 (藤沢市総合市民図書館)

8・25 厚木市主催講演会、講師内藤佳康「市史を讀む」に参加 (アミューあつぎ)

2018 (平成30) 年

2・14 愛川町歴史散策、菁莪小学校跡地 (あつぎ郷土博物館建設地) さがみ飛行場 (通称中津飛行場) 跡地 史跡三増合戦場

3・7 清川村宮ヶ瀬歴史散策、案内 落合清春

5・1 会報「さねさし」15 号発行

5・17 愛川町歴史散策、(中津の箒博物館・愛川町郷土資料館)

2017 (平成29) 年

「かながわ女性史研究会」のホームページをアップ、神奈川県的女性史関連グループの活動、過去のデータも掲載、かながわ女性史研究会会員の星賀典子が作成



『武相の女性・民権とキリスト教』

2018 (平成30) 年

2018 (平成30) 年  
10 『地域女性史研究』創刊号刊行、地域女性史研究会編集・発行



『地域女性史研究』創刊号

2017 (平成29) 年

5・27 雨岳文庫主催第3回「湘南社」民権講座 講師江刺昭子「かながわの女性史から見る自由民権の時代」に参加

11・30 荻野の歴史を学ぶ会主催講演会 講師江刺昭子「自由民権と女性―荻野の女性たちの意気込み―」に4人参加

2019 (平成31・令和元) 年

1・26 あつぎ郷土博物館開館式に中村領子出席

27日、神谷智子出席

2・18 江刺昭子さんと「きさらぎの会」に4人出席 (馬車道十番館)

2019 (令和元) 年5月1日一元号を令和と改元

5・22 勉強会、指導江刺昭子「郡の処女会と女子青年団」の原稿完成

8・29 史の会主催「『武相の若草』を読む会」―グループ江藍・萌黄の会・六会文学サークル・「さねさし」出席 (県民サポートセンター)

2020 (令和2) 年

―新型コロナウイルス蔓延で厚木市の公的機関は全面閉鎖

2月から5月まで定例会ができず

5・20 定例会、Zoomミーティングで実現

8・5 『あつぎの女性―愛甲郡女子青年団のあゆみと聞き書き―』入稿 全原稿オンライン

送付

10・15 『あつぎの女性―愛甲郡女子青年団のあゆみと聞き書き―』刊行

第三回湘南社民権講座  
かながわの女性史から見る  
自由民権の時代



日時 2019年 5月27日(日) 午後2時00分～4時00分  
会場 雨岳文庫(厚木市厚木7-1-10 雨岳会館2階文化館)  
参加費 500円



第3回「湘南社」民権講座 チラシ

2019 (平成31・令和元) 年

7 『時代を拓いた女たち―かながわの112人』3集、江刺昭子+かながわ女性史研究会編著、神奈川新聞社



『時代を拓いた女たち―かながわの112人』

2020 (令和2) 年

7 『史の会研究誌〜振り返りつつ今をよむ』6号刊行、史の会編集・発行



『あつぎの女性―愛甲郡女子青年団のあゆみと聞き書き―』

2019 (平成・令和元31)



『史の会研究誌〜振り返りつつ今をよむ』6号

2020 (令和2) 年

6 育児・介護休業法施行

10・19 厚木市長訪問、「あつぎの女性―愛甲郡女子青年団のあゆみと聞き書き―」を小林常良市長に進呈

10・23 愛川町小野澤豊町長訪問、清川村岩澤吉美村長訪問、「あつぎの女性―愛甲郡女子青年団のあゆみと聞き書き―」を進呈

10・25 女性史を学ぶ会主催講演会「明治150年、女性差別は続く」に参加（平塚中央公民館）

12・16 史の会主催『史の会研究誌』第6号発刊記念シンポジウム「神奈川の女性の明日を拓く」とグループ報告会「さねさし」からは神谷智子が活動報告3人参加（横浜市開港記念会館）

2021（令和3）年  
1月12日から2月7日の期間「緊急事態宣言」延長3月7日―

2・15 Zoomミーティング会報「さねさし」編集（16日、22日、24日）

3・1 厚木市教育委員会より感謝状受賞  
3・27 兩岳文庫主催、湘南社「民権散步」3人参加（秦野市）

4・1 会報「さねさし」16号発行  
5・1 『Edu Navi』（厚木市教育委員会だより）12号に「さねさし」寄稿「女性の生きた足跡を後世へ」  
5・19 定例会、新代表中村碩子



『Edu Navi』

12 『グループ江藍の歩み』刊行  
12 『m・yの軌跡』刊行、山口美代子聞き書きの会編集・発行  
2021（令和3）年



『グループ江藍の歩み』



『ジェンダー分析で学ぶ 女性史入門』

2021（令和3）年  
3 『ジェンダー分析で学ぶ 女性史入門』刊行、総合女性史学会編、岩波書店  
3 『総合女性史学会のあゆみ』刊行、総合女性史学会発行

11 『地域女性史研究』第2号刊行、地域女性史研究会編集・発行  
10・12 「企画展示 性差（ジェンダー）の日本史」開催、国立歴史民俗博物館



シンポジウムチラシ「神奈川の女性の明日を拓く」

10・20 定例会、「さねさし」25周年記念誌検討  
『総合女性史研究』より「地域女性史グループの紹介」執筆依頼

11・27 「地域女性史研究会第16回例会」（神奈川県）に参加、報告者横松佐智子、江刺昭子、（男女共同参画センター横浜フォーラム）

11・28 歴史散歩前日の報告を歩く「山手散策」に参加、共催史の会・かまくら女性史の会、2022（令和4）年

1・19 定例会、25周年記念誌 小島すみ、内山良子聞き書き「さねさし」あゆみ、大矢寛子書簡編集

3 総合女性史学会会報『総合女性史研究』第39号 女性史グループ紹介に「さねさし」中村碩子寄稿

5・18 定例会、新年度体制確認 25周年記念誌編集

8・26 海老名「温故館」を見学

10・15 『横浜連合婦人会館史100年のバトンを受けとる』刊行後、江刺昭子報告会に参加（横浜指路教会）

11・16 清川村「せせらぎ館」企画展見学

11 「地域女性史研究会第16回例会」を開催（横浜市男女共同参画センター）、共催史の会・かまくら女性史の会

2022（令和4）年

3 『横浜連合婦人会館史100年のバトンを受けとる』刊行、横浜市男女共同参画推進協会 男女共同参画センター横浜南編集・発行

10 史の会・神奈川県女性史研究会、『時代を拓いた女たち』1（3集の資料を国立女性教育会館女性アーカイブセンターに寄贈「資料群46 史の会資料」で閲覧できる）

11 『千代田区女性史（1996～2020）』刊行、千代田区地域振興部国際平和・男女平等人権課発行

5 『千代田区女性史（1996～2020）』刊行、千代田区地域振興部国際平和・男女平等人権課発行

2022（令和4）年



『横浜連合婦人会館史  
100年のバトンを受けとる』



『千代田区女性史  
（1996～2020）』

『千代田区女性史  
（1996～2020）』

2023 (令和5) 年

- 4・6 六会文学サークル主催講演会、講師江刺昭子「私だったかもしれない・ある赤軍派女性兵士の25年―」に参加(藤沢市総合市民図書館会議室)
- 4・19 定例会、新年度体制確認、25周年記念誌編集
- 5・26 神奈川県立歴史博物館見学
- 10・4 定例会、25周年記念誌編集

編集

2024 (令和6) 年

- 1・17 通史のための資料収集と作成
- 4・3 新年度体制確認と25周年記念誌編集
- 5・22 定例会300回
- 6・1 平塚人物史研究会主催講演会、講師江刺昭子「女性史の意義、女性史を書くとは」参加(平塚中央公民館)
- 6・3 臨時例会、講師江刺昭子から「通史」の指導を受ける
- 12・28 江刺昭子宅訪問、記念誌編集のための指導を受ける

2025 (令和7) 年

- 4 『あつぎの女たち―25周年記念誌―』入稿
- 4・9 『あつぎの女たち―25周年記念誌―』刊行

2023 (令和5) 年

- 1 国立女性教育会館で女性アーカイブ「実践報告 史の会」を講演  
江刺昭子

2024 (令和6) 年

- 2 『史の会研究誌』未来へ、伝え続ける』7号刊行、史の会編集・発行

2025 (令和7) 年

- 11 はだの歴史博物館令和6年度企画展「秦野にいきた女性たち―それぞれの物語―開催(26・1)
- 3 平塚市博物館・平塚人物史研究会主催、「近代ひらつかの女性たち」の春期特別展開催(5・18)『近代ひらつかの女性たち』平塚市博物館発行

2023 (令和5) 年



『地域女性史研究』第4号

2024 (令和6) 年

- 11 『地域女性史研究』第4号刊行、地域女性史研究会編集・発行



『近代ひらつかの女性たち』

2025 (令和7) 年



『あつぎの女たち―25周年記念誌―』

## おもな参考文献

- ・ 『厚木の歴史探訪4―寺院』飯田孝ほか編 厚木市文化財協会 二〇〇六年
- ・ 『開校百年の歩み』開校百年記念誌編集委員会編 厚木市立南毛利小学校 一九七四年
- ・ 『歩み続けた40年 結成40周年記念誌』厚木市地域婦人団体連日協議会 一九八九年
- ・ 『みおつくし』創立九〇周年記念誌編集委員会編 神奈川県立厚木東高等学校 一九九六年
- ・ 『阿夫利嶺にこだまして』厚木高女青葉会記念誌実行委員会編 青葉会 二〇〇〇年
- ・ 『神奈川県立厚木東高等学校 創立百周年記念誌 夢はるか』門倉時子ほか編 神奈川県立厚木東高校 二〇〇七年
- ・ 『井上篤太郎翁』京王帝都電鉄株式会社内 井上篤太郎翁伝記刊行会 一九五三年
- ・ 『厚木市婦人会館10年のあゆみ』厚木市教育委員会 社会教育部婦人会館 一九九二年
- ・ 『続・あつぎの女性―民権家子孫の聞き書きと女性史年表―』さがみ女性史研究会「さねさし」二〇〇九年
- ・ 『続々・あつぎの女性―聞き書きと資料―』さがみ女性史研究会「さねさし」二〇一五年
- ・ 『会報「さねさし」』さがみ女性史研究会「さねさし」二〇〇〇年～二〇二二年
- ・ 『江刺昭子講演―「再び、かながわの女性史を振りかえる」―資料二〇一四年』
- ・ 『江刺昭子講演―「女性史の意義・女性史を書くとは」―資料二〇二四年』

## 編集後記

「さねさし」が誕生し二五年、長いようであつという間に月日が流れました。その間に多くのかたとの出会いがありました。忘れてはならない人の一人に、中倉マキ子さんがいらつしやいます。一九九八年、厚木市企画部女性政策課の女性情報紙「ハーモニー」の編集で、初めてお会いしました。

江刺先生の「地域を支えた女性たち」の講演会に誘われて、講演会後の内山良子さんの呼びかけに応じて、わたしは入会することになりました。

二〇〇〇年六月に大磯に転居したのですが、その頃、「さねさし」は「横浜貿易新報」から明治、大正、昭和初期の厚木の女性に関する記事を記録していました。翌年、津久井郷土資料館で見つけた『武相の若草』を八八冊会員で綴じ製本し、当時の女性たちの活動にふれ、それを知らせなければと思うようになりました。知らせることは楽しみでもあり、二〇二〇年刊行の『あつぎの女性』で、活動をよみがえらせることができました。

二〇〇〇年に創刊した会報「さねさし」から、わたしはパソコン作業を担当してきました。以前は、調べ物があると図書館まで足を運んでいましたが、最近は、パソコンやスマホで調べることが多くなってきました。夢中になるとついつい夜遅くまでキーボードに釘付けになってしまいます。

聞き書きの話者に出会ってお話をお聞きすることは、学びの時間でもあります。話者になってくださったかたに感謝したいと思います。今回、内山さんの聞き書き「メッセージは平和」を掲載できることになり、それも喜ばしいことです。「さねさし」で刊行した四冊を手にするとき、「あのときは、こうだった」とたくさんの思い出があります。わたしを「さねさし」に導いてくださったかた、ご指導くださった江刺昭子先生には感謝の気持ちでいっぱいです。

「さねさし」の仲間とともに歩めたことに「乾杯」。

(神谷 智子)

さがみ女性史研究会「さねさし」の仲間とともに歩んで二五年です。一九九九年の発会からみなで学んだ成果を四冊刊行し、五冊目に向かっています。

わたしは横浜生まれで、結婚後は転勤族の夫、子どもたちと国内のあちこちで生活しました。五〇年程前に厚木を定住の地にしました。今までの各地との土地柄の違いを生活のなかで感じ、厚木の風土、歴史、身近な足元の暮らしに関心を持ちました。子育てを通じて子供会、PTA、ボランティア活動に参加。地域の女性、生活感のある落ち着いた年齢層のかたがたと出会え幸いでした。そのなかで気楽に声をかけてくださったかたが内山良子さんです。地域女性史を学ぶ「さねさし」への道へ誘ってくださった先輩です。おかげで女性史研究者江刺昭子先生にも会え、的確なご指導も受けられ、幸せです。

今まで刊行した四冊のなかで、わたしが何回も読みかえすのは聞き書きの部分です。魅力的です。

『あつぎの女性20人』の語り、前場コウさん。「君が代」を英語で歌うおばあちゃん、明治三六年生まれ、一〇〇歳のかたです。大工の嫁、夫は度々兵役に、その間八人の子をほとんど独りで出産、女の道のきびしさを伺っている聞き手のほうが崩れそうですが、コウさんはしなやかに強く、ささやかな幸せを集められるかたと思えました。

八一歳の石井ミネさんも強烈な印象でした。家の跡取り娘として結婚、出産、未亡人に、そして再婚、四人の子育て。戦後の生活改善グループ活動。逞しい女性先輩です。そして思い入れを強めるのは、わたしの亡母と一歳違いのミネさんが戦前戦後を生きてこられた歴史だからです。

こうした地域の身近な先輩女性の生の声を伺える「さねさし」を大切に、これからも歩みます。(亀井 喜美子)

「さねさし」が発会して二五年。長かったようなあつという間だったような日々でした。わたしの後半の人生は「さねさし」とともに歩み、学んできたといつても過言ではありません。

何も分からないわたしを指導してくださった先生の根気強さに頭が下がります。「よき出会い」に感謝です。

本づくりで特に印象に残ったことは資料調べのためにフットワークを駆使して動いたことです。その一つは二〇〇一年に訪れた津久井の郷土資料館、古びた佇まいながらわたしたちの探していた『武相の若草』の宝庫でした。当時の館長、渡辺さんは元小学校の校長さん。この資料館のことは江刺先生が教えてくださいました。あまりにも冊数が多く困って江刺先生にお電話したら「全部コピーして」とのこと。途方に暮れていると、初めて訪ねたわたしたちに「全部持つて行っていいよ、期限は二週間ね」と思ってもみなかった温かいお言葉。喜び勇んで帰り、初代代表だった内山良子さんがご自宅のコピー機で五〇〇〇枚印刷し、とうとう機械が壊れてしまったというエピソードを記憶しております。それが『続・あつぎの女性』の年表の各所に反映され残っています。当時のわたしたちの心意気です。とにかく一生懸命でした。

もう一つ情熱を注いだのは「聞き書き」です。今まで出版した四冊の本には全部聞き書きが入っています。話者は四二人に及びます。それぞれ環境の違う人生を歩まれてきた人たちに話が聞けたことは素晴らしい経験になりました。なかでも印象に残っている話者は第一集の「芸者のみっちゃん」こと篠田道子さん。わたしが担当しました。聞き取りの当時はもう現役を退き和風スナック「みっちゃんの店」の経営者でした。花街のことはまったく知らないわたしでしたが、とても明るく気さくな気性の人で、話しつづりも歯切れがよく分かることは何でも話してくださいました。「さねさし」を通じて一番よかったこと。それはやはり、さまざまな生き方をしている人に出会えたことだと思います。また「新たな出会い」を楽しむに前を向いて歩いていきたいと思えます。

(中村 碩子)

二〇〇一年一月頃、ご近所の内山良子さんに誘われて「女性史の勉強をする会」の見学に行きました。自分のできることをすれば良いといわれ、ホツとしました。入ったばかりのときは何が何だか分からず、メンバーが聞き取りに行き、録音したものをテープ起こしする作業をしていました。

「さねさし」に入る前、聴覚障害者のかたがたに何年も、ボランティアで手助けしてきました。手話と要約筆記。人と話していることをその場で文字に書いて伝える作業をしていたので、テープを聞いて文字に起こすのは嫌ではなかった。そんな訳で「さねさし」に入ってから、前半はテープ起こしが作業として多かった。当時はお客様のな存在だった。個性豊かなかたが多くて、話しもできなかつた。

二〇一二年、厚木市三田の二見元子さんのお宅へ聞き取りに伺うことになりました。県内で一軒残った養蚕農家でした。まとめ上げていくうちに様子が分かり、「さねさし」の仲間たちとの距離が近くなりました。テープ起こしが仕事として多くありました。家でも家事を済ませてからしたこともありました。おしゃべり会とちがつて目的があるので充実してきました。お楽しみ的なことはなく、今にいたっています。

そうこうしているあいだに会も二五年目になりメンバーは今四人です。わたしが入ったときは一〇人でした。今までに四冊刊行しました。江刺昭子先生ご指導のもとに、今五冊目の刊行に向けて追い込み中です。

わたしも後半の人生に入りました。学ぶことは山ほどありますが、ときには意欲が衰えたりしてきます。気分転換で友人とおしゃべりをして一日過ごすこともあります。「さねさし」を辞めたいと思ったことは、いまだかつてありませんでした。仲間の支えがあったからです。ほんとうにありがとうございます。  
(深沢 かをる)

## 監修

江刺 昭子（えさしあきこ）

1942年生まれ。64年、早稲田大学教育学部国語国文科卒業。出版社勤務ののち、71年よりノンフィクション、女性史を執筆。被爆作家・大田洋子の評伝『草鱧』で第12回田村俊子賞を受賞。81年より日本エディタースクール講師、88年より神奈川県的女性史研究グループ「史の会」代表。

著書に『女のくせに 草分けの女性新聞記者たち』『透谷の妻 石阪美那子の生涯』『樺美智子、安保闘争に斃れた東大生』『私だったかもしれない ある赤軍派女性兵士の25年』『歴史をひらいた女たち 人物で読むジェンダー史』『共生社会をめざして 人物で読むジェンダー史』

## 編集指導・執筆した主な地域女性史

『千代田区女性史』（全三巻）（2000年）

『史の会研究誌』（1～7号）（1991～2024年）

『中央区女性史—いくつもの橋を渡って』（全二巻）（2007年）

『続・あつぎの女性—民権家子孫の聞き書きと女性史年表—』（2009年）

# あつぎの女たち

—25周年記念誌—

発行日

二〇二五年四月九日

発行 さがみ女性史研究会「さねさし」

代表 中村 碩子

編集

神谷 智子

監修

江刺 昭子

発行所

株式会社  
プリントパック

頒布価格

一五〇〇円









